
或る戦艦と艦長 2

E F 1 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る戦艦と艦長2

【Nコード】

N7540V

【作者名】

EF12

【あらすじ】

遂に始まった暗黒星団ことデザリアム帝国の地球侵略！

圧倒的な敵に、地球防衛軍第7艦隊と宇宙戦艦『ヤマト』、そして嶋津冴子率いる『相模』と独立第13戦隊はどう立ち向かうのか？

プロローグ（前書き）

“残念美女”達の新たな戦いが始まります。

本格的な連載は、拙作『或る戦艦と艦長』完結後にスタートします。

プロローグ

無限に広がる大宇宙。

全ての始まりとも言う“ビッグバン”から約150億年。数多の星が生まれ、消えていった。

それはまさしく生命の営みにも似ている。

億年単位で進む星の生涯に比べれば、人間の営みなどまさに一瞬の光芒にも満たない。

しかし、その一瞬の光芒のごとき人の生命にもまた、輝きと煌めきがある。

ガミラス、ガトランチスの侵略を何とか跳ね返した地球は、太陽系のみならず近隣恒星系にも開発の手を伸ばし、侵略・絶滅戦争の痛手を取り越えて立ち上がるうとしていた。

近隣恒星系への進出は単に資源の確保のみならず、人類の新天地探しや、新たな侵略に備えた警戒拠点作りも兼ねていたが、予想もしない手で侵略の魔手が伸びつつあることを、人類はまだ知る由がなかった。

また、地球とは別次元の世界に本部が存在する汎世界規模の治安・司法維持組織ともいうべき一大組織、時空管理局は、魔法による世界平和の構築と維持を掲げて活躍してきたが、成立から100年を経ずして、早くも行き詰まりを見せ始めていた。

さらに、魔法戦力を見戲のごとくあしらう強力かつ凶悪な軍事勢力や国家との遭遇で、管理局はジワジワとその力を削がれ始めていた。

第188話『第7艦隊』（前書き）

こちらの本編もスタートです。

第188話『第7艦隊』

地球防衛軍本部、司令長官執務室

執務室には主たる藤堂平九郎と前任参謀の古代守、長官付秘書官の森雪の他、2人の壮年の男がいた。

「山南良介、第7艦隊司令官を命ずる」

「はっ」

「ジェイムス・モーリー、第7艦隊参謀長を命じる」

「拝命致します」

藤堂から呼ばれた2人、山南とモーリーは敬礼の後、それぞれの辞令を受け取った。

山南は沖田・土方の2期後輩にあたり、直前まで宇宙戦士訓練学校の日本校にて校長を務めていた人物。モーリーはアメリカ出身で51歳の黒人。白色彗星帝国戦においては第2外周艦隊副司令官職にあり、首脳陣を失いつて半ば壊滅した第2・第5外周艦隊を再編してガニメデ基地まで撤退を果たした人物だ。

藤堂は全員を着席させる。

「第7艦隊は実験部隊とも言つべき艦隊だ。旗艦たる『マルス』と新造艦『アリゾナ』『モンタナ』に『海鳴』『タコマ』、自動制御の戦艦・駆逐艦を中核に、旧白色彗星帝国軍からの編入艦を運用してもらう。」

何分にも初めてづくしの艦隊だ。それゆえ、君達に任せたいの

だ」

「わかりました。全力を尽くします」

山南が微笑を浮かべて応じた。

子供が見たら泣き出しそうないかつい顔立ちなのが実に残念だったが。

アステロイドベルト付近、『相模』艦橋

『いつまでも真っ直ぐ飛んでるんじゃない！どうぞ撃墜して下さい
と言ってるようなもんだぞ！！』

モニタースピーカーからは山本の怒号が響く。

アルファ星系の第1次探査を終えた13TFは、第2次探査隊
出発までの間を輸送船団護衛と太陽系内の哨戒を行っているが、そ
の合間にイカルス付近に立ち寄り、『ヤマト』配属予定の新人パイ
ロット達のアグレッサー任務にもつく。

本日の訓練メニューは小惑星帯内の機動だ。

『四郎！そんなこっちゃ、いつまで経っても兄貴が成仏せんぞっ！
！。』

坂本！貴様ら、ヒナ共に何を教えてた！！？』

『はいっ！！』

『すみません！』

山本の容赦ないダメ出しは新人のリーダーである亡き僚友の弟のみ

ならず、彼らを教えた坂本茂にも及ぶ。

「絞られてますね、ヒナ鳥達のみならず、坂本達も」

「……『ヤマト』戦闘機隊の名の重さは、山本が一番よく知っているからな。」

坂本達にとつてもいい復習だろう」

感嘆の声を上げる大村に冴子が応じる。

『ヤマト』が不撓不屈の艦である以上、戦闘機隊もまた不屈であることを求められる。

亡き加藤三郎と共にヤマト戦闘機隊を支え、唯一生還した山本とすれば、坂本や加藤四郎達は期待の後輩だ。散っていった仲間達の思いを継ぎ、立派なファイターパイロット、否、宇宙戦士に育ってもらいたいという思いは人一倍だ。

『鳥海』艦橋

山本に扱かれる坂本、加藤四郎達を見ながら、艦長席のフランベルク・棗・シルヴィアはぼつりと呟く。

「頑張れ、弟達……」

それは“沖田の子供達”共通の思いでもあるが、すぐに気分を切り換える事になった。

「艦長、間もなく対空戦闘機動演習です」

「オッケー。アリア、準備できてるわね？」

「ええ、いつでも」

通信士からの連絡を受けたシルヴィアが舵を預かる副長のフランベルク・白百合・アリアに確認をとると、双子の妹は不敵な笑みを返してきた。

そう、アリアはアクロバティックな操艦にかけては地球防衛艦隊屈指の操舵士なのだ。
そして、アリアに負けず劣らずの過激な操舵士が僚艦にいた。

『水無瀬』艦橋

「これより対空戦闘演習に入る。新人相手とはいえ、手加減なしで行くわよ！！」

「はいっ！！」

艦長のナーシャ・カルチェンコが鼓舞するように言うや、ブリッジクルーが元気よく返す。

ナーシャもまたアクロバティックな操舵で鳴らしたのだが。

「伊歩、張り切り過ぎないようにね」

「はい、艦長」

念を押されたのは正操舵士の月読 伊歩だ。

既に何度か述べたが、彼女もまた艦長に負けず劣らずのチキンレーサー。

普段の言動はおどしているのだが、一度操舵桿を握ると雰囲気が一変。曲芸とも言える操舵を披露する。

そして、彼女は正しく漲っていた。

放置すれば新人のコスモタイガーを追いかけ回しかねないため、ナ

ーシヤは予め釘を刺しておいたのだが、当の伊歩は薄笑いすら浮かべ、グローブをはめ直す。

（やれやれ……）

隣の戦闘指揮席の篠田 巖はその様を見ながら軽く肩を竦めた。

『伊吹』艦橋

「新人隊、編隊を組み直しています」

「……鍛える余地が大分あるな」

観測士の報告に、艦長席の塩江龍一は一人ごちる。

些か時間がかかり過ぎだ。敵に奇襲されたら最初の一撃で3割はやられてしまう。

「副長、用意はいいか？」

「はい、いつでも」

操舵士席に陣取る副長兼任の綾歌麗奈が応える。

若手の操舵士としては、華麗な舵捌きの『ヤマト』の島 大介、ダイナミックな『相模』の大村耕作、アクロバティックな『鳥海』のフランベルク・白百合・アリアと『水無瀬』の月読伊歩の陰に隠れがちだが、無駄がなく流れるような操舵で、僚艦3隻に遅れをとつたことはない。

『相模』艦橋

「戦隊全艦、突撃隊形。対空戦闘用意！」

艦長席の冴子が指示を下す。

「新人隊、攻撃隊形に変わりました！」

「全艦前進！」

『全機突撃！行くぞっ！！』

『相模』以下の13TFが加速しつつ前進を始め、それを目指して加藤四郎達新人が駆るコスモタイガーが突撃していった。

ミッドチルダ首都クラナガン郊外、首都第4飛行場、
訓練生食堂

航空戦技教導官・高町なのは一尉は午前の教導を終え、教導生と昼食を共にしていた。
なのはが教導生から高い人気を博しているのが、こういう飾らない性格ゆえだ。

ともすれば高ランク魔導師は己を恃む傾向が過ぎ、他者を見下しがちなのだが、管理外世界の出身ゆえ、魔導師・非魔導師に関わらず同じように接するなのはは、威張らない高ランク魔導師として信望を得ているのだ。

「教導官、質問よろしいでしょうか？ 教導とは関係ないことなんです
すが……」

「私に答えられることなら構わないよ。何かな？」

斜向かいの教導生がなのはに質問してきた。

「最近、ディンギル帝国の話をとんと聞きません。教導官のところには情報は入っていませんか？」

“ルガールの虐殺”から数ヶ月が経過している。

“海”の一部が主張しているディンギル帝国への武力制裁は賛同者が集まらず、具体化する気配はない。

次元航行艦『ネストル』がディンギルの手に落ちた可能性が高く、管理局はディンギル方面に繋がる次元回廊を航行禁止とし、サーチャーを設置して警戒しているが、今のところ異常は見られない。

通常、航空武装隊に次元航行本部の情報が全て流れてくるわけではないが、ディンギル帝国関連の情報は重要であり、なのはにはクロノやフェイトといった“海”の士官の友人がおり、通常ルートより先に情報が入ることもあるのだ。

必ずしも教導生が知るべき情報ではないし、窺めるのは簡単だが。

「私も、ディンギル帝国関連の情報は聞いてないんだ。

何か変わった事があれば必ず発表が入るから、少なくとも今は、周囲が動揺しようと、それに流されずに私達のやるべき事をやるしかない。私はそう思うよ」

「はい……」

教導生達は頷いたが、不安の色は隠せないようだ。

無理もない、となのはは思う。

つい最近まで、時空管理局が次元世界の最高権威であり、なのはも、

目の前にいる教導生達も、その頃に入局した。

それが今では、ディンギル帝国に暗黒星団帝国（ガトランチスは首脳陣が全滅したため、脅威度は低下したと思われる）といった強力な軍事国家が管理局に牙を剥き、一方的にやられて数百名の局員が殉職してしまった。

これで管理局の権威は大きく揺らいであり、もし一般市民が犠牲になれば局への信頼は失墜しかねないのだ。

なのは無論、教導生も士官であるから動揺を表に出さなくとも、不安が募るのは仕方ないところだ。

「第197管理外世界との関係はどうなるんでしょう？」

別の教導生が聞いてきた。

「あの世界も私の故郷と同じく、軍隊は現地政府の一機関という存在だから、政府の命令なく勝手に判断したり行動する事はできないの。」

今のところは対話する姿勢だから、悪い方に進む事はないと思うけどね」

「はい…。でも、向こうは管理局法を受け入れる事はないんでしょうね…」

女性の教導生がぼつりと口にした。

「魔法文化は存在しないし、宇宙戦艦みたいな兵器でないと自分達の世界を守れない以上、質量兵器を放棄する事はない。」

それに、地球連邦と地球防衛軍は、今の管理局と付き合いなくても殆ど困らないからね…」

正確には“今の体制の管理局”なのだが、
なのははそこまで言い切ることはできなかった。

第189話『法の舟と戦神』（前書き）

いよいよあの艦が登場です。

第189話『法の舟と戦神』

天の川銀河・オリオン腕辺境、太陽系外縁部

時空管理局所属の改し級次元航行艦『ラットバルド』は、本部からの指示により、第197管理外世界方面の哨戒任務に当たっていた。

「センサー、レーダーとも正常。次元断層反応なし。周辺空域に異常ありません」

「ん……」

過日、ある任務で第197管理外世界に赴いた経歴がある『ラットバルド』は、それ以後、しばしばこの方面の哨戒・監視任務に就いていた。

とはいえ、太陽系を囲む“エッジワース・カイパーベルト”から内側は地球防衛軍の衛星や哨戒艦艇による監視網が敷かれており、不用意に侵入すれば管理局の艦船では簡単に拿捕・撃沈の憂き目に遭うのが目に見えているため、カイパーベルトの外側に近寄るのが精一杯なのだ。

小1時間程経過した頃か。

空域観測担当のオペレーターが緊張した声を上げた。

「前方左に空間歪曲反応を複数確認！」

「緊急空間転移スタンバイ！」

……それと、念のため、地球防衛軍との回線をいつでも開けるようにしておけ」

「……よろしいのですか？」

オペレーターが疑問の声を上げるが、それは仕方ないことだ。管理局員は管理外世界の住民と接触することは規制されている。ましてや相手は軍なのだ。

但し、第197管理外世界こと地球連邦とは何度もコミュニケーションをとっており、知らない間柄でもない。

それに、管理局の艦船では『ラットバルド』と『クラウディア』だけが地球防衛軍と直接通信できるコードを持っているのだ。

「出て来たのがガトランチスの残党や暗黒星団帝国の艦隊なら、知らせてやるくらいは良からう。どのみち我々の戦力では手に負えないし、地球防衛軍には借りがあるのだからな」

「はあ……」

会話はそこで途切れた。

「転移してきたのは艦船5隻！

反応は地球防衛軍の艦船です……。『相模』級戦艦1、巡洋艦クラス3と……データベースにない艦船が1隻です！」

「新型戦艦…アリゾナ級か！？」

緊迫した観測オペレーターの声に、他のブリッジクルーも驚きの声を上げる。

「接近する。誰何されたら正直に答えればいい。いきなり撃たれはせん！」

スールは即座に接近しての確認を決断した。

（『アリゾナ』級なのか、それとも　？）

帰還したフェイト達が齎した情報には、地球防衛軍の新型艦船のものもある。

その中で管理局が重視しているのは『アリゾナ』『モンタナ』等の大型戦艦と『海鳴』級試作大型巡洋艦だ。

『アリゾナ』と『モンタナ』は、かの『ヤマト』を上回る艦体規模を持ち、かつ1年間の無補給航海が可能という本格的な外・深宇宙戦艦で、既に『アリゾナ』は就役済と予想されている。

一方、『海鳴』級大型巡洋艦も現行の『相模』級戦艦に匹敵する規模で、やはり長期間無補給航海が可能という。こちらは既に2隻が就役している頃だ。

さらに、10万？を超える無人制御の超大型戦艦に、鹵獲したガトランチスの艦艇から状態のいいものを改装した編入艦艇も存在するという。

「周辺監視を厳重にしろ。進路左50！全速前進！」

「はいっ！」

スールは地球艦がワープアウトした空間に『ラットバルド』を向かわせた。

「捕捉できるか？」

「今のスピードなら何とかありますが：何分にも巡航速度が違い過ぎます」

「わかった。とにかく接近しよう。速度そのまま！」

『ラットバルド』は最大戦速で地球艦に向かっていった。

同宙域、『相模』艦橋

「 接近する船は、時空管理局『ラットバルド』です! 」

「 …こちらで対処すると『マルス』に連絡。『鳥海』を差し向ける」

嶋津冴子は『マルス』への連絡を指示する

『ラットバルド』の接近は早々に地球側に捕捉され、警戒体制の全艦は一時緊張状態になったが、接近してくるのが一度接触したことがある時空管理局の改し級艦『ラットバルド』らしいと知るや、冴子は同艦の進路を厄する形でコンタクトをとることにした。

今回の任務は就役したばかりの超アンドロメダ級戦艦『マルス』の試験航海の随伴と護衛。

時空管理局とは敵対関係ではないが、仮に友好国の船でも自軍の新鋭艦を長々と見せるわけにはいかない。

超アンドロメダ級戦艦『マルス』は排水量16万?超、全長385?。波動砲3門、アンドロメダ級の主砲を改良した20インチ砲20門等、地球防衛軍艦としては破格大型戦艦であり、カタログデータ上の攻防力なら『ヤマト』をも軽く凌ぐが、将来のバージョンアップにも対応できる余地を持っている。

艦の省力化も一層進んでいるが、白色彗星戦役で『アンドロメダ』が呆気なく沈んだ教訓を取り入れ、素早くマニュアルオペレートに切り換えられるようにもなった。それだけのポテンシャルを発揮させるためには乗組員のスキルアップが欠かせないが、経験豊かな人材が少ない現状では訓練でレベルアップしていくしかない。

その点、艦長兼第7艦隊司令の山南は教官経験も豊富であり、うつ

てつけの人選だ。

既に『マルス』乗組員には厳しい訓練が課されているはずだ。

巡洋艦『鳥海』

「接触まで50秒です!」

「念のため所属と船名を問い質して。回答しないようなら警告を」

観測士からの報告に、艦長のフランベルク・棗・シルヴィアは件の艦が『ラットバルド』か否かの確認を指示する。

ややあつて。

「返答が来ました。時空管理局所属『ラットバルド』です!」

『ラットバルド』

「接近して来る艦は地球防衛艦隊の巡洋艦『鳥海』と名乗っています」

「わかった。鳥海に『かの大型艦の名を知りたい』と打電してくれ」

どのみち、詳しい事を教えて貰えるわけがなろうが、艦名位は尋ねてもいいだろう。

ここに強硬派の局員が乗り合わせていなかった事は何よりの幸いだ。

それとは別に、空気が読めない者なら、臨検しろと言い出しかねないところだが、そんな事しても無視されるか最悪撃破されてしまう。

しかし、スールも手ぶらで帰るつもりは全くなかった。

そして、少し置いて回答が来た。

「『鳥海』から回答。あの大型艦の名は『マルス』であるとの事です。」

「『マルス』か。鮮明な映像データは取れるか？」

「はい、今とつています」

ここはいわば宇宙の公海。必要以上に挑発しなければ情報収集は認められている。

「モニターに出せるか？」

「はい、映像データ出します」

太陽からも遠く離れた太陽系外空間ゆえ、処理した映像だが、それでも『マルス』の艦影は比較的鮮明だった。

「推定ですが、全長は350ないし400？、質量は15万？以上。艦首波動砲3門、3連又は4連大型砲塔が5基。全体的な形状からみて、『アンドロメダ』級の拡大形と思われます」

「何て艦だ。『ヤマト』や『相模』級ですら我々の理解を越える艦なのに」

「これは、第197管理外世界からのメッセージなんだろうな。我々は独自の道を歩むという、な」

「」

絶句しているブリッジクルーの中にあつて、通信担当の女性オペレーターは黙々と己の職務を進めていた。

「地球艦隊、右に転針して離れていきます。『鳥海』より入電、貴艦の航海の無事を祈る」

です！」

「追跡しますか？」

通信オペレーターの報告に、副長が引き続き追跡するかをスールに質すが、

「いや。やめよう。

どのみちこの艦では追いつけないし、先方の疑惑を買う可能性がある。

『鳥海』に感謝の意思を伝えればいいだろう。本艦も次元空間に戻る！」

「わかりました」

これ以上留まれば地球防衛軍から警戒されかねない。収穫は十分あったのだ。

『ラットバルド』の姿がかき消すように消えた。

時空管理局本局

執務官室の一角、フェイト・T・ハラオウンのブースのアラームが鳴った。

「……！クロノ？」

フェイトは発信元が義兄のクロノだと気づくや、通話回線を開いた。傍らのシャリオ・フィニーノとティアナ・ランスターの表情にも緊張の色が走る。

「忙しいところ済まないが、皆至急僕のところに来てほしい。緊急

事態だ」

表情と声色からして、深刻な事態のようだ。

「わかった、すぐ行くね」

通話を切ったフェイトは2人の補佐官に向き直る。

「フェイトさん」

「クロノ提督の様子からみて、深刻な事態みたいですね」

シャリオ、ティアナとも既にスタンバイできているようだ。

フェイトは内心で満足を覚えながらも、表情はそのままに告げる。

「外れてほしいと願っているけどね。まずは状況把握だね。2人とも行くよ！」

「ハイッ!!」(x2)

「皆、急に呼び出して済まない」

「うっん。それで、何があったの？クロノ」

フェイト達が着席してから、クロノは改めて口を開く。

「次元客船が遭難した」

「!?!」

クロノの言葉に、フェイト達は耳を疑った。

「遭難って まさか、『レム』や『レオニダス』のような事が再

発したんですか!？」

「」

「そんな。どうしてそんな事が」

身を乗り出して問い質すティアナに、クロノは無言で頷き、ティアナは力無く腰を下ろした。

「船はザンクト・ヒルデ魔法学院の高等部がチャーターし、第37自然環境保全世界に向かっていた。

乗っていたのは高等部1年生の生徒167名と職員10名、乗組員11名の188名。

次元回廊内で“黒いXV級に攻撃されている”との通信が最後に、こちらからの呼びかけに答えなくなった」

「黒いXV級？」

一同の脳裏に浮かんだのは、ディンギル帝国軍との戦闘で未帰還になった『ネストル』。

同艦のクルーが残虐極まる公開処刑に処せられた事が確認されている以上、『ネストル』の艦体もディンギル軍に鹵獲された可能性が指摘されていた。

ディンギルはそれを改修して作戦に投入したというのか？

そして、遭難したのはザンクト・ヒルデ魔法学院の生徒。ヴィヴィオの先輩に当たる者達だ。

そこでフェイトはハツとして顔を上げた。

「クロノ、私達が呼ばれたのは」

「そうだ。『クラウドディア』が初動搜索を命じられた。途中で『ラットバルド』も合流する。」

多忙なところ済まないが、君達にも参加してもらおう。出航は4時間後だ」

「わかりました！」（×3）

敬礼を交わした後、フェイト達は急ぎ足でクロノの執務室を後にした。

「やはり、束の間の平穏でしかなかったか」

クロノの沈んだ呟きは空調の風に流れて消えた。

第190話『次元世界波高し?』（前書き）

今回はミッドチルダ市内のひとこまで。
そして短いです。

第190話『次元世界波高し?』

新暦77年4月、ミッドチルダ首都クラナガン、ザンクト・ヒルデ魔法学院初等科

その日、学院全てで午後の授業が自習になった。

午前中は通常どおりの授業だったが、昼休みも終わりに近づいた頃、突然全校放送で、全学年とも第5限を自習とする旨が知らされたのである。

「なにがあつたんだろうね?」

「……あんまりいいことじゃなさそうだね……」

2年2組に籍を置く金髪に紅翠のオッドアイの少女、高町ヴィヴィオは、すぐ前の席のクラスメイトであるコロナ・ティミルと会話を交わっていた。

ヴィヴィオが“いいことじゃない”と口にしたのには理由がある。

昼休み、件の放送がなされる少し前、学院理事長代理の職にある聖王教会騎士、カリム・グラシアが、秘書兼護衛のシャッハ・ヌエラを伴って現れた。

カリムが学院に顔を出すのは公式行事の時くらいで、何の行事もない日に現れただけでも珍しいのだが、心なしか2人の表情が強張って見えたのだ。

2人とも、子供達の挨拶に応えるためか、すぐ穏やかな表情になったのだが。

ヴィヴィオはかなり特殊な生まれ育ちであり、つい1年前は某事件のキーパーソンに祭り上げられていた経験上、他人の不安な表情には敏感なのだ。

（また、ああいうことがおきちゃうのかな……）

幸いにも今度は事件の当事者にはなっていないが、時空管理局の手に負えないらしい世界の存在は、ヴィヴィオも知るところになっている。

彼女自身、そうした世界の一つである第197管理外世界こと地球連邦の軍隊である地球防衛軍の士官とモニター越しに対面し、短時間だが会話したこともあるのだ。

（なのはママやフェイトママでもどうにもならないのかな……）

2人いるママが、“わるいことをする人”には負けない事を、ヴィヴィオは肌身に染みて知っているが、それは直接相手と戦ってこそだった。

管理局の艦船に乗っているところを、より強い艦船に襲われてしまえば、いかに強い魔導師でもどうにもならないことを半年あまり前に思い知らされたのだ。

そして、管理局とは全く違う世界の存在も。

その世界は、なのはママの故郷と同じ名前を持ちながら、とんでもなく強い艦船をたくさん持っており、その艦船を指揮している者達もまた、とても強い意思の持ち主であることを直感的に感じ取った。

その後、帰ってきたフェイトママからは、

「ミッドや、管理局では正しいとされていることでも、別の世界ではまちがっていることもあるんだよ。もちろん、その逆もね」

と聞かされた。

くわしくは、自分がもう少し大きくなったら少しずつ教えてくれるというのだが。

ヴィヴィオの思考はそこで中断した。
何故なら。

「皆さん、突然ですが、今日はこれで下校となりました。
寄り道せず、真っ直ぐお家に帰って下さい」

戻ってきた担任が開口一番告げたからだ。
担任も緊張した表情をしている。

（やっぱり、何かあったんだ）

子供達は一様に不安な表情になったのだが、詳しい事態を知ったのはその夜、管理局からの発表によってであった。

クラナガン中央港地区、港湾特別救助隊隊舎

「　　そんな！！」

緊急召集を受けたスバル・ナカジマー等防災士は、上司たるヴォルツ・スターン防災司令から、事のあらましを聞かされ絶句した。

「第1次搜索隊を率いるクロノ・ハラウン提督が、お前さんの派遣を打診してきたんだが」

「行きます！行かせて下さい！」

上司に皆まで言わせず、スバルは参加を申し出た。

クラナガン港湾地区、海上特別教育施設

『すまねえな。こんな時ばかり頼っちまってよ』

画面の向こうで頭を下げる陸士108隊部隊長、ゲンヤ・ナカジマ三佐に、チンクとウエンディが返す。

「気にしないでくれ、父上。ああいう場所こそ私達の特性が活躍するんだからな」

「そうっスよ、パパリン。家族なんだから気遣い無用っス」

チンクとウエンディがゲンヤを父と呼んだのは、ひと月前、チンク・ディエチ・ノーヴェ・ウエンディの4人をゲンヤが養女にしたからである。

無論、ギンガとスバルも賛成した事で、一気に6人に増えた姉妹の順序は、ギンガ・チンク・ディエチ・スバル・ノーヴェ・ウエンディの順。

遺伝子学上、ギンガ・スバルの実妹と言っているノーヴェは

「ギンガはともかく、スバルにまで妹扱いされたかねえ！」

とごねたが、チンク・ディエチ・ウエンディに“説得”され、“不本意ながら”承諾したのだった。

「でも、とんでもねえ事になっちまったな」

荷物をまとめながらノーヴェがこちる。

「比べたくはねえけど、ドクターとあたしらがやらかしてた事がすげえつまらなく思えてきたぜ」

去年、彼女達はある大事件に深く関与したが、彼女達やその生みの親は、無差別殺戮は考えていなかった。

しかし、今回、チャーター次元船を襲ったらしい連中は、民間船も関係なく攻撃したらしく、その前には管理局員を残虐極まるやり方で惨殺し、その映像を目にした彼女達も皆憤怒したが、同時に、管理世界の価値観が通じない世界が存在することも実感させられた。

（嵐みたいなこの世界で、あたしらがやれる事って何なんだろう？。

いや、自分で考えて見つけて、生涯それを貫き通すのが、あたしらに課された“償い”なんだろうな）

荷造りをしながら、ノーヴェは自分達に課された贖罪について思いを馳せていたが、

「……ノーヴェ、手が止まってるよ」

ディエチにツッコまれた。

第191話『次元世界波高し?』（前書き）

冒頭に出る人物の名前は、ウィキペディアに準拠しています。

第191話『次元世界波高し?』

ザンクト・ヒルデ魔法学院初等部の制服を着た少女はクラナガン市街を歩いていた。

碧銀の髪と、紫碧のオッドアイの彼女は、ふと、電器量販店の店頭に置かれている最新型テレビに目をやったが、次の瞬間、全身に悪寒が走る感覚に襲われて立ち竦んでしまったが、一斉下校になった理由も理解した。

（大変なことが起きてしまった）

スポーツ中継を流していたテレビ画面の上にニュース速報のテロップが点滅した後に表示されたのは、『ザンクト・ヒルデ魔法学院高等部生徒が乗った次元客船が行方不明。正体不明の艦船から攻撃された可能性も』というものだった。

少女は地面に落とした鞆を手にすると、踵を返して足早にその場から立ち去る。

（…クラウド、あなたやオリヴィエ殿下の時代のような、いや、もっと血生臭い時代が来てしまうんでしょうか？）

少女 ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルト（尤も、フルネームを名乗る事は殆どない）の問いに答えられる者は誰もいなかった。

次元空間回廊

搜索隊員と機材を載せ、僚艦3隻とともに本局を離れた『クラウデ
イア』だが、件の船が緊急通信を発信した座標空間までは、最大巡
航速度でも11時間を要し、それが皆の焦慮をかき立てる。

（あゝ、もおっ！遅い、遅過ぎるわっ！！）

焦りを隠せずにいたのはティアナ・ランスターだった。

XV級は在来のL級艦より大型重武装であるとともに、航行能力も
上がっているのだが。

（『ヤマト』や『相模』の船脚の速さと比べると、管理局の艦船は
遊覧船程度ね。

武装も、アルカンシエル以外は豆鉄砲に紙みたいな攻防力しかない。
こんなんじゃ、宇宙を席卷する星間国家の軍隊や軍事勢力に管理局
は噛み殺され、世界はいいように食い荒らされてしまうわ）

『ヤマト』を初めとする地球防衛軍艦船の性能を目の当たりにして
からは、管理局の艦船が、次元空間航行能力以外では数世代も遅れ
ていることを実感せざるを得ない。

魔法科学も日々進歩している。

管理局関係では、AMF下でも使える新型デバイスの開発と試作も
進んでいるが、実用試験が始まるのは早くて来年後半。

また、ジェイル・スカリエツィが開発・投入した無人兵器ガジェ
ットドローンをベースにした空・陸戦用ガジェットもテストが始ま

つたが、量産と配備には今しばらくの時間を要している。
しかし、これまでの犯罪者やテロリスト相手はともかく、ガトラン
チスみたいな獰猛な軍事勢力相手には何とも心許ない。
格段に強力な艦船や機動兵器でなければ撃退できないのだ。
。

（母さん　　）

焦慮を隠せないティアナより少し離れた席のフェイトは、虚数空間
に消えていった母プレシア・テストロッサと、母が手掛けていたと
いう魔力炉“ヒュドラ”に思いを馳せた。

（あれが実用化されていたら、管理局の艦船はどのくらい強化され
ていたんだろう　　）

今乗っているXV級は、計画段階では主動力に“ヒュドラ”を用い
ることになっていたというが　　。

フェイトはかぶりを横に振る。

たとえ“ヒュドラ”が実用化されていても、出力では地球防衛軍の
波動機関には到底及ぶまい。それこそ、第97管理外世界のセスナ
機とF-35ライトニング？の差くらいに。

（　　管理局の版図が拡大していけば、いつ強大な勢力と遭遇して
もおかしくなかった。

それを指摘する声は以前から上がっていたのに、管理局、特に海は
耳を貸さないまま突き進んだあげくがこの有様。

一歩間違えれば、地球防衛軍とも武力衝突していただろう。

それに、魔法以外の武装を質量兵器だと一様に決めつけ、ひどく嫌悪してきた現場の私達にも責任がある。

宇宙戦艦の乗組員は厳しい選抜と訓練をくぐり抜けなければならず、質量兵器は誰にでも扱えるという管理局の認識は当たらない。

遅きに失するかも知れないけど、管理局規則を改めてでも、地球連邦から波動エンジンを含めた艦船建造技術を導入しないといけないんじゃないか　？）

『ヤマト』『相模』等の戦艦クラスや波動砲の技術供与は無理としても、巡洋艦クラス以下なら可能性がある。

地球防衛軍の艦船は見た目の大きさ以上に戦闘力が高いことは目の当たりに見て知っている。

さらに、武装はショック・カノンやパルスレーザー等のビーム兵器中心で、解釈さえ変えれば質量兵器には該当しない。

過日、管理局の質量兵器の解釈をフェイトから聞いた地球防衛軍の士官達は心底呆れた顔になっていた。

実弾兵器ならいざ知らず、魔法によらない兵器全てを質量兵器に指定しているのでは、魔法原理主義・高ランク魔導師優位主義と受け取られても仕方ない。管理局内でもそういう不満の声が上がっている。

管理局でも低ランク／非魔導師局員の方が多いのに、将官の大半は魔導師だ。

JS事件後の内部改革でいくらかは是正されているが、中途半端だという声が大きい。

魔法要らずで強大な軍事力を持つ国家と接触し、多くを敵にしてい

る現在、今までのような考えでは到底この“嵐”は乗り切れない、とフェイトやティアナは考えている。

クロノら幾人かの高官は賛同しているが、全体の意識改革は遅々として進まずにいた。

ネツクは質量兵器。

拳銃はデバイス扱いで所持できるが、あくまで例外。主流を占める魔導師の間では魔法に拠らぬ武器に対する抵抗が強いのだ。

（黒船でパニックになった江戸幕府のように、外圧がないと変わらないのかな）

フェイトの整った顔に、翳りがさした。

太陽系内、天王星軌道付近、戦艦『マルス』

「第31駆逐隊、合流しました！」

「第18戦隊、合流完了！」

「自動艦統合指揮システム、異常ありません！」

それを確認した第7艦隊参謀長、ジェイムス・モーリーが艦長席を振り返り、報告する。

「司令、艦隊全艦集結しました」

艦長席に陣取る第7艦隊司令官兼任の艦長、山南は大きく頷くや、厳かに命じる

「 第7艦隊、発進する」

一際目立つ巨大戦艦『マルス』を中心に、大型戦艦『アリゾナ』以下40隻余りの艦艇は、演習地たる海王星空域に向けて発進していた。

第192話『事情と盆の空』（前書き）

デザリアム側には色々オリジナル（別称：単なる思いつき）要素があります。

第192話『事情と盆の空』

我々地球人類が住まう太陽系から、実に約40万光年を隔てたところに位置する黒白くくぱくに重なる二重銀河。

その二重銀河をほぼ支配下におくのが暗黒星団帝国ことデザリアム帝国だ。

その首都星たるデザリアム星。

この巨大銀河帝国とも言うべき星間帝国の頂点に立つ人物“聖総統”の住まいと執務所を兼ねる大宮殿の謁見室に、2人の男が黙然と座っていた。

前に座るのは帝国軍第4艦隊司令官のカザン中将。後ろに座るのは艦隊参謀長のスロハ少将。

更に司令官付の副官が別室に控えていた。

少し経った頃、謁見室に若い女性が入ってきた。

眉がないカザンら男性とは異なり、切れ長の眼の上には細いながらはつきりと眉がある。

その女性　　サーダ　　の姿を認めたカザンとスロハは起立し、目礼する。

「お忙しい中、お越しいただきましてありがとうございます。カザン閣下、スロハ閣下」

サーダは一旦言葉を止め、口調を改めた。

「畏くも、聖總統がお出ましになります」

居住まいを直した一同の前に、二重銀河の頂点に立つ男、聖總統スカルダートがゆつくりとした足どりで現れる。

臣下が直立不動で迎える中、玉座に座ったスカルダートは、カザンを手招いた。

「カザン、ここに呼ばれた理由は解っているね？」

「はっ」

臣下の回答に頷いたスカルダートは玉座から立ち上がると、改まった口調で告げる。

「カザン、君は帝国軍大将に昇進し、太陽系攻略軍司令官に就任してもらう。

……君も知つてのとおり、この国に残された時は無限ではない。我が臣民の将来は、君の手腕にかかっているといつてもいい。

この帝国のさらなる繁栄のために、力を尽くしてほしい。頼んだぞ」

元首の言葉に、カザンは頭を垂れて奉答する。

「我が身に余る光栄。

臣カザンは、この身に代えまして太陽系を制圧し、新たな帝都を建設してご覧に入れます」

カザンの奉答に満足したスカルダートは更に続けた。

「君の元には主力として第4艦隊に加え、第8・第9艦隊、並びに第2・第5機動兵团をつけるが、追加の人員や装備等、必要なものは私の名で参謀本部に要求して構わん。直ちに準備し、40期（

デザリウム本星の平時自転周期。1回期Ⅱ地球の約27時間相当）
以内に出撃するのだ」

「はっ！！」

告げ終わるや、スカルダートは玉座につくことなく、カザン達の敬礼を受け、サーダを従えて謁見室から歩み去った。

「……早速出撃準備にかかる。

関係する司令官と参謀長を『ガリアデス』に召集するのだ」

謁見室を退出したカザンは、参謀長と副官に最初の命令を下した。
。

2202年8月、湘南市海鳴区、『翠屋』跡地

照り付ける太陽の下、嶋津冴子と高町雪菜は“迎え盆”に合わせて、実家があつた敷地の草むしりをしていた。

翠屋 高町家 跡地には向日葵が咲き誇り、斜向かいの嶋津家跡地には早咲きの秋桜が咲いている。

地面に置かれたラジオのアナログ中波放送からは、昨年、10年ぶりに再開された高校野球大会の実況中継が流れていた。

科学が進んだ23世紀にあつて、中波／短波のアナログ放送が存続していたのは、ひとえにインフラが安価かつ強靱なこと。

何しろ、受信装置の構造が簡単な上に電源がなくても聴けるからで、ガミラス戦当時は長／短波のモールス信号で各国・地下都市間の通信を行ったほどである。

一方、甲子園球場もまた一度は遊星爆弾で消滅したが、2201年、元の場所より少し内陸に、20世紀当時の姿に近づけて再建された。

しかし、日本国内だけでは出場校が足りず、台湾・韓国・中国・フィリピンにまで規模を広げ、東アジア高校野球大会として、2201年に始まっていた。

余談ではあるが、ガミラスとの戦争で地球のプロスポーツは格闘技等、一部のインドア競技を除いて壊滅的打撃を受けてしまい、再建はまず学生スポーツからということになっていた。

野球の場合、当初の計画では、各国持ち回りでの開催だったが、日本以外の各国では野球場の整備が進んでいなかったのと、甲子園球場は高校野球の聖地というイメージが他国にも広がり、是非とも甲子園でプレイしたいとの声が強かったため、当面は甲子園球場での開催となったという。

因みに冴子は小・中学時代はバレーボールの選手で、中学では1年生にしてエースアタッカー。3年生では中学総体ベスト8まで勝ち進んだ経歴を持ち、宇宙戦士訓練学校でも女子バレー部のエースアタッカーだった。

それはよだんです
閑話休題

「ふう
」

真夏とはいえ、海岸沿いの建物が全くないため、海風がまともに通り、しんどい暑さではない。

尤も、冬は寒風が吹きすさぶのだが。

ガミラス戦後の地域再編で一帯は湘南市に統合されたが、市街地の再建は市役所がある旧鎌倉地区に留まっており、旧小田原市までの湘南地区は荒れ地からようやく草原に代わったばかりだ。

クレーター湾と一面の草原でしかない海鳴の地に、再び賑わいが戻るのはいつになるのか。

「暗黒星団帝国は“来る”んでしょうか？」

雪菜がぽつりと口にした。

ガミラス・白色彗星帝国との戦争は、雪菜から多くのものを理不尽に奪い去った。

自分以外の家族、親戚、友人等々。

あんな思いはもうごめんとするのは、雪菜に限らず、あの戦争を生き延びた人達全てに共通する思いだろう。

「私もあんな事は二度と御免被りたいけど、準備は悲観的に行うのが、軍というものだからな」

答える冴子も声を落とす。一個人としての彼女もまた、ガミラスや白色彗星帝国との戦争で家族や友人、帰る場所を奪われた身だ。

だが彼女は軍人。失った者に嘆く事は許されない。

地球に仇なす者を討ち果たし、悲しみの拡大を防がなければならぬのだ。

尤も、それは敵兵を殺し、彼らにもいるかも知れない家族や恋人、友人達の悲しみを生産する事でもあるのだが。

「戦わないで済むなら、それが一番いいはずなんだが、あつちにとつては戦争こそが正義なのかも知れないしなあ」

かの白色彗星帝国がそうだった。

かの帝国は征服（侵略）こそが正義であり、それをやめる時は滅亡の時だというのが国是だった。

立ち止まったら死んでしまうあたりはまさにマグロだ。

無論、地球連邦が掲げる正義とは到底相容れず、戦うしかなかった。残念ながら、勝者こそが正義という風潮はなかなか改まりそうにない。

白色彗星帝国との戦いから1年も経っていないが、地球防衛軍は躍起になって戦力の整備を行っており、その象徴といえるのが、先日就役が発表された超アンドロメダ級戦艦『マルス』と、旧白色彗星帝国軍からの改造編入艦だ。

『マルス』は素人目にもアンドロメダ級を大幅に拡大強化したものとわかったが、旧白色彗星帝国軍からの編入艦に対しては少なからぬ拒否反応があった。

これに対し、連邦議会で説明に立った藤堂司令長官は

「我が軍の艦船は白色彗星帝国軍のそれに全く劣るものではありませんが、かの国の艦船は長距離侵攻作戦に適したもので、居住設備等、部分的には我々が見習うべき部分も少なからず見受けられます。

無論、これらの点は今後の計画に活用することになりますが、我が軍は未だ再建半ばであり、使える艦船はたしかつての敵国のものであっても、どんどん活用しなければ戦力が足りないのです！」

なりふり構わぬ戦力の再建は、偏に新たな侵略に備えてのこと。ガミラスとは奇妙な休戦状態、白色彗星帝国の復讐も、先だつての

戦闘を最後に終息状態だ。

となれば、イスカンダルへの侵略を図った暗黒星団帝国が新たなる侵略者としてやってくる可能性が相対的に高くなる。と断言していた。

転んでもただでは起きるなかれ。石に躓いたならばその石を持ち帰って詳しく調べる

地球防衛軍の技術部門は、イスカンダルはもとよりガミラス、白色彗星帝国軍、さらには時空管理局からも盗める技術はほとんど盗み取っているのだ。

とはいえ、際限なく戦力を揃えられるわけではない。

全てが再建途上の地球は人材も金も限られている。地球を取り巻く情勢は相変わらず不安定であるため、軍の予算は比較的多くまわされるが、それは他の分野にしわ寄せを強いる事であり、それを当然とすることは許されず、少しでも効率的に予算を使わなければならない。

尤も、勘違いする者は必ずいるもので、士官の中には思い上がった言動をとる者も出ており、市民から強いブーイングを買ったケースも複数報告されている。

「守ってやっている等と考えている者は我が軍には要らん。即刻退官願を書け！」

軍務局長のステファン・スミスは、朝礼で局員を厳しく戒めた。同様の檄を飛ばした指揮官は多数おり、冴子ら13TFの各艦長も乗組員を戒めていた。

軍の場合、人の腐敗が命取りになることは往々にしてある。
ましてや、今のような軍の存在感が相対的に増している時こそ注意
しなければならないのだ。

雪菜が見上げる空は青く澄んでいる。

（青空はどこまでも、いつまでも澄んでいてほしいんだけど
《 そうだな、レディ》

少女の願い空しく、再び空が焦がされる時が静かに忍び寄っていた
。

第192話『事情と盆の空』（後書き）

重核子爆弾発射までにはもう少しかかります。

第193話『次元世界波高し?』（前書き）

色んな意味でドツボにはまりつつある余寒…もとい、予感が。

第193話『次元世界波高し?』

次元空間、『クラウドディア』

ブリッジ

「あ、ああ」

「そんな」

「こんなの、ひど過ぎるわ」

スクリーンに映し出された前方の光景に、ブリッジクルーは悲憤慷慨する。

声こそ上げないものの、艦長席のクロノ、執務官席のフェイト、ティアナ、シャリオも拳を握り締め、怒りを堪えていた。

映し出された次元航行客船『クリッパー08』は辛うじて船の形を留めているが、側面には大小の穴が穿たれ、多数の煙の尾を引いており、航行能力を失っていることは一目瞭然だった。

「『マリア・ジュナス』、目標に接近します」

『マリア・ジュナス』は、相次ぐ次元航行艦の遭難に衝撃を受けた管理局が建造した新型病院船で、その名は管理局黎明期に活躍し、生涯現役を貫いて8年前に天寿を全うした伝説の女性医療魔導師からいただいたものだ。

余談だが、故レジラス・ゲイズや“三提督”ですら、マリアにかかればやんちゃ息子や弟妹同然だったという逸話があり、高町な

のはが9年前に瀕死の重傷を負い、再起不能の危機に陥った時には自ら治療とその後のアドバイスにあたり、その再起に貢献したのが伝説の医務官最後の仕事だった。

「ギンガ、そろそろ出られるか？」

クロノは艦載シャトルで待機する突入救助隊を呼び出す。

『はい、いつでも行けます。クロノ提督』

最初に突入するのはギンガ、スバルと旧ナンバーズ更生組の9名だ。

「強い放射能反応はないが、爆発が起きる可能性がある。無理だけはするなよ」

『わかりました！』

通信を終えたクロノ達は改めてスクリーンを見遣る。

あれだけ船腹に穴を穿たれたのでは、内部の酸素はすっかり吸い出されてしまっただろう。

「また、スバル達には辛い思いをさせてしまうな」

「うん。でも、一体誰が何のために」

「やはり、ディンギル帝国なんだろうか？」

皆、憤りとやり切れないさが入り混じった気持ちにさせられる。

「通信では黒いXV級とあったからな。

ディンギルが捕獲した『ネストル』を改装してテロ活動に投入したという可能性が高いが」

「もしその通りだとしたら、早急に『ネストル』を奪還するか撃破しないと、いずれ次元航行能力を持った宇宙戦艦が投入されますよ」

『ネストル』は単なるテロ活動だけではなく、次元航行能力を持つ戦闘艦の建造を想定したデータ収集の役目を担っている可能性をティアナが指摘すると、ブリッジクルーは皆蒼白になった。

もし、下手人がディンギル帝国ならば、強力無比な宇宙戦艦が次元空間に大挙して入り込み、本局や各世界は重大な危機に陥るのだ。

「ティアナの言うとおりだ。その可能性は大いにある。

しかし、今の最優先事項は生存者の搜索だ。

単純に比較することはできないが、『レオニダス』はもっと手酷くやられていたからな。望みはある」

かつてガトランチスに襲われた『レオニダス』はもっと酷くやられていた。

率直に言えば、対艦戦闘を想定していなかった既存の次元航行艦の外板は材質も厚さも同程度の大きさの次元商船と大差ないのだ。

だとすれば、目の前の『クリッパー08』にはまだ生存者がいるかも知れない。

第一、あれほど手酷くやられた『レオニダス』でフェイト達3人は奇跡的にも生き延びたのだ。

『クリッパー08』で生存者がいる可能性は決して低くない。

既にスバル達が乗ったシャトルは『クリッパー08』に接近している。

専門の作業員が取り付き、外から乗船口のドアを開いた上でスバル達が突入するのだ。

「提督、『ラットバルド』のスール艦長から通信が入っています」
「繋いでくれ」

第197管理外世界（地球連邦と太陽系）方面に進出していた『ラットバルド』も急報でこちらに向かっていたのだ。

「ご苦労様です、スール艦長」

『いえ。こちらの方が大事です。経過はどうですか？』

「今しがた先行隊が突入したところです。」

『レオニダス』より損傷の程度は軽そうなので、望みはあると踏んでいます。が。 。

そちらは何かありましたか？」

『詳細は後ほど報告しますが、地球防衛軍はアンドロメダ級やXX級をも軽く凌ぐ大型戦艦を完成させました』

スールがもたらした情報に『クラウドディア』のブリッジクルーも息を飲む。

「『アリゾナ』か『モンタナ』ではないのですか？」

『幸い、随伴していたのは嶋津艦長の独立第13戦隊だったので、駄目元で照会したところ、艦名は『マルス』と回答してきた。』

フォルムは『アリゾナ』級ではなく、並列配置にもう1基追加した波動砲口等の艦首周りはアンドロメダ級に酷似していて、それよりも格段に大型だった。

君達が持ち帰った資料にあった詳細不明の実験艦というのが、この艦ではないだろうか。 』

地球に滞在していた当時建造中だった『アリゾナ』『モンタナ』はアンドロメダ級ほどではないが、『ヤマト』を確実に上回る大型戦艦だが、『マルス』はそれすらも軽く凌ぐと言うのだ。

「『マルス』には、地球の隣にある惑星の呼称と、古代神話に伝わる戦いの神の2つの意味があります。

その名を冠する以上、その艦はあちらの世界史上最強の戦艦ということになりますね」

フェイトの言葉の意味を悟ったのか、一瞬、ブリッジは静まり返ったが、クロノは気分を換えるよう促す。

「その『マルス』の事は戻ってからにしよう。今は『クリッパー08』救援が先決だ！」

その声にブリッジクルーも各自の作業に戻る。

ただ、フェイトとティアナは『マルス』の事も心に残っていた。

（海に加齢臭連中がいきり立つかも知れないわね　　）

ティアナ・ランスター執務官、元帥は、弱者、特に孤児に対する深い気遣いと裏腹に、上官等に対する遠慮ない物の言いつぷりと、凶悪犯罪者に対する峻烈かつ厳正な姿勢で畏怖されたが、前者、毒舌家の資質を開花させた“容疑者”は、彼女が17歳当時に初接触した異世界の女性軍人とその同僚の男性士官達、さらに当時その女性軍人に養育されていたという元戦争孤児の某女性実業家であるという説が有力である。

第194話『次元世界波高し?』（前書き）

“ 珍しく ” 冴子が悩みます。

冴子「バカだから悩むに決まってるだろうが?」

第194話『次元世界波高し?』

『生存者発見』の一報が飛び込んできたのは、スバル達が突入してから50分経過した頃であった。

たちまち『クラウドディア』のブリッジが色めき立つ。

「慌てるな。まずは『ジュナス』への収容が先だ。情報確認を急げ」
ひと通り指示を下したクロノはフェイト達に向き直った。

「『ジュナス』に行けるよう準備してくれ」

「可能なら事情を聴くんだね？」

「そうだ」

少なくとも、事故の経過の一部はわかるだろう。
ともあれ、生存者の容態がいいことを祈るしかない。

『クリッパー08』 エントランス

エントランスも瓦礫が散らばっていたが、爆発の危険はないため、
『マリア・ジュナス』のクルーが死傷者の収容準備を始めている。
そこへ、

『生存者2名、お願いします!』

『わかった!』

スバルとノーヴェが女子生徒とアテンダントらしい女性を抱えて戻ってくる。

要救助者の容態等を『ジユナス』クルーに伝え、身柄を託すと、スバル達はボンベの再充填等の作業を受け、再び船内に突入していた。

「よし、急げ！」

生存者収容に、現場のムードは一時上がったが、更なる生存者発見の報はなかなか入って来ない。

スバル達に加え、次元航行部隊の救難隊員や聖王教会騎士団直属の救助隊員も人命検索に当たっているが、発見されるのはすでに事切れた者ばかりだ。

死者の多くは被弾によって生じた破口から空気が抜けた事による窒息死で、喉元をかきむしったり、白目を剥いたり失禁や脱糞、或いは舌を出した状態で息絶えていた。

「見てられないっすよ、これは」

「む」

ウェンディは思わず顔を背け、場数を踏んでいるチンクも顔をしかめずにはいられなかった。

「あの放射能ミサイルを撃ち込まれなかったのは不幸中の幸いだが」

「

あのルガールのやり口にしては些かあっさりし過ぎてはいないか？

『クラウドディア』ブリッジ

『クロノ提督、あなたはと思う？』

『クリッパー08』に突入していたチンクからの通信に、クロノも思わず唸った。

「確かに、あんな残虐行為をさせた人物にしてはあつさり過ぎるな」

『ブービートラップを仕掛けた可能性は否定できないと思うが』

「完全破壊しなかったのはそのためなのか？」

『直接兵士が乗り込んできた形跡はないが、不発弾があれば、それがブービートラップという可能性が高いと思う』

「わかった。それはこちらで調べる。君達は十分注意して搜索を続けてくれ」

『承知した』

通信を切ったクロノはサーチャーの発射を命じるとともに、僚艦にも『クリッパー08』の船体表面の確認を指示した。

その間、船橋で搜索を行っていたギンガから通信が入る。

『残念ながら、船長ら乗組員はダメでしたが、幸い、航行データの記録媒体は回収できましたので、一旦離れます』

時間が経つにつれ、搜索範囲も広がっていったが、齎される報告は発見された遺体の数ばかりで、既に何体かはエントランスホールに搬送されている。

生存者は病院船『マリア・ジュナス』に収容されたが、死者を連れ帰るのは『クラウドディア』ら次元航行艦だ。

各艦では霊安室だけではスペースが足りず、倉庫の一部も遺体安置所に早変わりし、急拵えの祭壇と遺体収容袋が並べられており、更

に聖王教会から派遣された神父とシスターも待機していた。

『クラウドディア』のブリッジには『クリッパー08』の船内配置図が展開されているが、ほぼ全ての箇所に救助隊員が進入したことを示すように、図はほぼ黄色一色に変わっていた。

「体制を切り換える。人命検索から遺体収容に変更」
「わかりました」

船内全域に搜索の手が及んだにも関わらず、生存者は2名だけで、生命反応はなし。

やり切れない面持ちで、クロノは遺体収容作業への切り換えを指示した。

心中には、襲撃者に対する激しい憤りと、『クリッパー08』の乗船者を救えなかった事への無力感がないまぜになっていた。

その時だった。スクリーンに映る『クリッパー08』の船体後部から閃光と火の手が上がったのは。

地球防衛軍・新横須賀基地、『相模』艦長執務室

「
「
「
」
」
」

テーブルを囲んで3人の男女が深刻な顔つきで押し黙っていた。

「…この事を他に知っているのは？」

「真田と（藤堂）司令長官だけだ」

敢えて感情を出さず問う冴子に、古代 守も感情を込めずに答える。

「万一、連中が侵攻してきたら、当然真っ先に拘束されるだろうかな。

その場合、周りの住民も巻き込んでしまうかな。それは俺達の本意じゃない」

「わかった。引き受ける」

どのみち、こういう仕事ができるのは“万事屋”たる我々しかないのだ。

「済まんな、こんな仕事を押し付けて」

「いいってこった。13TFは万事屋だからな」
ウチ

2人の傍らで、『相模』副長の大村耕作は同席したことを後悔していた。

『平然と話してはいたが、嶋津艦長と古代参謀、特に古代参謀の胸中は察するに余りあるものでした』

大村は後日、軍務局の中島龍平ら数名にそう語っている。

古代を見送り、大村に二・三指示を出して下がらせた後、独り艦長室に残った冴子は、唇を噛み沈んだ表情になった。

艦長たる者、乗組員の前で感情を露わにしてはならない。

一喜一憂しては乗組員を不安に陥らせる元になるのだ。

『喜怒哀楽は腹に込める』

『ひびき』艦長を拝命した時、沖田十三から言われた言葉だ。

冴子は幼少期から喜怒哀楽がはつきりしている性格だ。しかし、一艦を預かる者は、自分の感情をコントロールできなければ乗組員を萎縮させ、果ては艦と乗組員の命を失わせる事になるからだ。

「沖田さんや土方さんの域へは、道半ばにもなっていないな」

自嘲気味に呟く冴子だが、性別関係なしの厳格かつ苛酷な教導で、『鬼嶋津』（グーシーマンズ）の異名がつくほど訓練生から畏怖されるのは少し後のこと。

第195話『薄命』（前書き）

あの方の前途が明らかに

第195話『薄命』

『クラウドディア』食堂

「
」

スバル・ナカジマら特別救助隊員達は無言でいた。

『クリッパー08』で突然発生した爆発により遺体搬出活動は中止され、全員が退避した後、『クリッパー08』は全船炎と煙に包まれた。

結局、収容できたのは女子生徒と女性クルー1人ずつの生存者のみで、遺体や遺品は全く収容できなかったのだ。

「くっそおおっ!!」

隊員の1人であるノーヴェ・ナカジマが悔しさを爆発させ、壁に拳を叩きつける。

犠牲者の大半は10代半ばの少年少女。戦闘機人である自分達と単純に比較することはできないが、余り変わらない年頃に見える彼らの変わり果てた姿に、ノーヴェ達は一様に衝撃を受けていたのだ。

「どこの誰なんだよ！非武装の民間船をなぶり殺しなんてよ!!
あいつらに何の罪があるっていうんだよ！」

その叫ぶような問いに応えられる者はその場にいなかった。

「また、助けてあげられなかった…」

肩と視線を落としたスバルも呟く。
要救助者をいるのに退却しなければならぬ。
救助隊員にとってはこれほど辛い事はない。

決して望んで得たわけではないが、普通の人より頑丈かつ強靱なこの身体。また、憧れていたあの人の教導の元で伸ばした力はこの時にこそ役立つものではなかったか？
しかし、この現場で見たものは理不尽以外の何物でもなかった。

破壊を免れた後部ギャレー付近で自分と同年輩の女子生徒と乗組員を救出するのが精一杯だった。

救助隊員である以上、助けられなかった事もあるが、先日といい、今回といい、大半の要救助者を助けられなかった。

「
」

込み上げてくる涙を必死に堪える。

泣く事は許されない。

かけがえのないものを失った犠牲者の家族の悲嘆の方が遥かに大きく重いからだから。

“ソードフィッシュ1”

レスキュー隊員のエースオブエースであるこのコードネームの初代として名を馳せたスバル・ナカジマだが、この時はまだ己の無力感に悲憤する駆け出しの救助隊員でしかなかった。

時空管理局本局

「そう、わかったわ…」

息子からの報告に、総務統括官リンディ・ハラウンも沈痛な表情になった。

『申し訳ありません。もっと早く到着していれば…』

「クロノのせいではないわ。命令受領から出発までは予想以上に早く進んだと皆驚いているのよ」

派遣命令を受けたクロノは、個人的なコネまで動員して人員と装備を、予想以上の短時間で揃えて出発していった。

客観的に見れば、僅か2名とはいえ生存者を収容できたのは上出来だろう。

無論、それを口に出せる状況ではないが。

「それで、救助したお2人の容態は？」

『シヤマルからの報告では、2人とも軽い一酸化炭素中毒で、後遺症の心配はないとの事です、問題は』

「メンタルケア、ね」

2人にとってはこれからが正念場だ。

仲間や同僚は皆死んでしまい、自分だけが生き延びたという事実は生涯消えない。

メンタルケアを入念に行わなければ、後日自ら命を絶つ事だってあり得る。

ともかく、全てはクロノ達が帰還してからのこと。あとは自分達の仕事だ。

「いずれにせよ、皆、帰ってきてから考えましょう。」

クロノも疲れているだろうけど、もう少し頑張ってちょうだいね」
『わかりました』

通信を終えたリンディは腕を組んで考え込む。

クロノには言っていないが、今回の襲撃犯がディンギル帝国であると明らかになれば、今度こそ武力制裁という事態が現実味を帯びてくる。

民間人を理不尽に殺されておいて泣き寝入りという事はあるまいからだ。

問題は、仮にそうなった場合、管理局の戦力は相手に通じるのか？

相手がディンギルだった場合、艦船同士の戦闘では、彼我の艦船の戦闘力に差があり過ぎて勝ち目はない。

ならば本星近くに艦隊を次元転移させ、首都をつくか？

アルカンシエルの威力を見せつけた上で交渉に持ち込むのがベターかも知れないが、向こうは『ネストル』に搭載されていたアルカンシエルも調べただろう。何らかの対策を考えていてもおかしくはない。

単なる反管理局武装組織ならば打つ手はいくらでもあるが、ディンギルやガトランチス、地球防衛軍みたいな勢力では返り討ちに遭うのが関の山だ。

地球防衛軍 ？

ガトランチスをも退けた地球防衛軍ならばディンギルとも互角に戦えるだろうが、管理局内部では本局高官の過半数が地球防衛軍に対する拒否反応を未だ根強く持っている。

彼らの技術を全面的に導入すれば、確かに戦闘力は飛躍的に上がり、非／低ランク魔導師も戦力化できるが、非魔導武装Ⅱ質量兵器の導入は管理局の自己否定であり、また旧暦時代の混乱に逆戻りだというのだが。

この見解にやや否定的な態度をとったのが、養女のフェイトとその補佐官のシャリオ・フィニーノとティアナ・ランスターだった。

『拳銃やライフル銃クラスは確かにそうだが、戦闘機や宇宙戦艦は厳しい選抜と訓練を経た者にしか扱えないし、一度その資格を得ても、常に研鑽していなければたちまちその資格を剥奪されてしまう。魔法文化がない世界からすれば、その気になればすぐ周囲を破壊できる自分達魔導師こそ、歩く火薬庫か戦術核みたいな存在だ』

『私達は管理局の基本理念に賛同したからここにあります。が、管理局の戦力を大きく上回っている勢力が相次いで登場している。今、理念に囚われ続ければ、管理局は崩壊しますし、管理局から地球連邦のような、政治と軍事のバランスがとれた国家と同盟する世界だって出てくるのではないのでしょうか？』

フェイトの言い分は、視点を変えればそのとおりだし、ティアナの話もそうだ。

編入時の行き違いで管理局への反感が根強い世界にすれば、管理局より地球連邦と結んだ方がうまくいくと考えてもおかしくはないのだ。

そういった混乱を防ぐためにも、地球連邦との関係を進めたいのだが、管理局内部は二分されているし、地球連邦もまだ再建半ばで、自分達のことですべからず一杯らしい。

しかも、ガミラスとは休戦したもの、ガトランチスや暗黒星団帝国とは敵対関係にあるため、対応を誤れば管理局も巻き込まれる。

「日本の諺で、こういうのを“ナイユウガイカン”と言ったわね」

角砂糖×2とたっぷりの生クリームを入れた煎茶 通称リンディ茶。ゲンヤ・ナカジマ曰く“可哀相なお茶” を口にしながらリンディは呟き、関係局との通話回線を開いた。

月軌道付近、戦艦『相模』

「調子はどうだい？」

嶋津冴子は急遽あつらえた特別病室にスターシャを見舞った。

「ありがとう。思ったよりいいわ」

「そうかい」

スターシャの答に冴子は表情を和らげる。

「それより、ごめんなさい。私のために多くの人達を振り回してしまつて」

「それは言いつこなし。」

友達が困っているなら、手助けするのは当然のことさ」

表情を曇らせたスターシャを嗜める。

元々白磁のごとく色白のスターシャだが、病によるやつれと、あちこちにシミが出てしまっていた。

何より、艶やかだった金髪は光沢を失い、白髪すら混じっている。

軍務多忙なのと厳重な面会制限のため、ふた月近く見舞えなかった
冴子は、先日、古代 守から写真を見せられて茫然自失してしまい、

「あと、どの位保つ？」

とだけ言っのが精一杯で、守は淡々と

「年は越せないだろうよ」

と答えた。

せめて最期の日々はサーシャと一緒に過ごさせてやりたいというのが
だが、運命と言っには余りに残酷な仕打ちではないのか？

目の前に神とやらがいるのなら、サンドバッグ代わりに叩きのめし
てやりたいと真剣に考えてしまった。

登場人物紹介（山南、カザン他）（前書き）

今回は新顔と“いつもの面子”です

オリジナル設定テンコ盛りです。

登場人物紹介（山南、カザン他）

地球防衛軍第7艦隊

？山南 良介

第7艦隊司令官兼戦艦『マルス』艦長

2149年生まれ 53歳。

先輩の土方同様に教育畑が長く、2200～2202年にかけては宇宙戦士訓練学校日本校の校長を務めた人物で、大村耕作や『ヤマト』『相模』のルーキー陣は彼の教え子にあたる。

現役教官時代は先輩の土方が『鬼の土方』『鬼竜』の異名で訓練生から畏怖されていたのに対し、『仏の山南』『仏山』の異名で畏敬されていた。

イメージCVは原作同様、小林 修氏

？ジエイムス・モーリー

第7艦隊参謀長。

2151年生まれのアメリカ籍黒人士官。

窮地にあっても沈着冷静なスタイルを崩さない。白色彗星戦役では戦死した司令官に代わって残存艦をまとめ、さらなる抵抗を図った。空前の超大型旗艦や自動戦闘艦運用など、新し物づくめの第7艦隊を率いる山南の補佐役として白羽の矢が立った。

イメージCVは江原正士氏

？古代サーシャ（諸般の事情により『真田漣』を名乗る）

外見上はティーンエイジャーだが、生後1年を過ぎたばかりである。

本名は『サーシャ・アム・ド・イスカンドル・古代』で、イスカンドル王国の正統にして唯一の王女なのだが、イスカンドル星消滅により、父・守の故郷である地球へ亡命した。

乳児〜少女期までの成長速度が地球人の10倍以上というイスカンドル人特有の体質を色濃く受け継いだため、一時地球に滞在した後、第2イカルス天文台を預かった父の親友、真田志郎の亡き姉の一人娘という肩書で真田らと共に第2イカルス天文台に赴いた。

真田漣としての年齢は17歳で、外見上も大差ないまでに成長した。

感受性が著しく発達する時期を地球で過ごしたが、その間、父の友人らの影響を受けてしまったらしく、チャキチャキな娘に育ったという。（真田志郎談）

イメージC.V、原作どおり藩恵子氏にすべきか検討中 （汗）

デザリアム（暗黒星団）帝国

？スカルダート

デザリアム帝国の元首で、聖総統を名乗る。

デザリアム帝国が抱える致命的欠陥を解決すべく、地球侵略を計画したらしい。

イメージＣＶは原作同様の大平 透氏

？カザン

デザリアム帝国軍大将、太陽系制圧軍司令長官

スカルダートの命により地球を探していたが、その地球と戦い敗れたガトランチス帝国軍艦を捕獲し、接收したデータから地球の位置等の詳細データを得る事に成功し、その功績によりスカルダートから太陽系制圧軍司令長官に任命された。

イメージＣＶは原作同様の寺田 誠氏

？スロハ

デザリアム帝国軍太陽系制圧軍総参謀長

以前からカザンの片腕として力を発揮し、信任厚いＮｏ．２。
イメージＣＶは大林隆介氏

いつもの面子。

？嶋津 冴子

地球防衛軍内惑星防衛艦隊所属、独立第１３戦隊司令官代行兼戦艦『相模』艦長。

本作の主人公にして非ヒロイン。
桃の節句に“晴れて”３０歳を迎えた。

軍服姿の時は凜として颯爽たるものだが、私生活ではマダオ。
酒豪にして激辛食家。

見た目は、髪と瞳が黒い事以外は“20年後の高町ヴィヴィオ”。

イメージCVは戸田恵子氏

？真田 志郎

第2イカルス天文台所長の職にあるが、実態は『ヤマト』近代化改装工事の責任者。31歳。

『ヤマト』機関長の山崎とともに『ヤマト』の魔改造に精を出す一方、サーシャの後見人として養育にあたっている。

宇宙戦艦の設計から戦闘機の操縦に白兵戦、さらに宝石のデザインやウェディングドレスの縫製まで多彩な才能を発揮し、手腕の一端を目にした時空管理局の某執務官と補佐官をして『歩くロストロギア』と言わしめた。

CVは青野 武氏

？古代 守

地球防衛軍司令部付先任参謀。31歳。

余命短い妻スターシャを断腸の思いで娘と親友がいる第2イカルス天文台に送り出したが。

CVは広川太一郎氏。

以上の3人は同期生。

訓練生時代は『3バカ・ラス』と言われた悪たれで、当時の主任教官兼寮監の土方 竜から最も多く雷と拳骨を食った。

？高町 雪菜

冴子の被保護者で14歳。

容姿は“髪と瞳が漆黒の15歳時の高町なのは”で、並行世界におけるもう一人の高町なのはの直系子孫。

家族は先祖代々、喫茶店『翠屋』を営んでいたが、ガミラスとの戦争で雪菜を残して全滅。長姉の幼なじみだった冴子に引き取られた。現在は勉学に励む一方、『翠屋』再興に向けて努力中。

亡母の桃香同様“魔法”を扱え、インテリジェントデバイス自律知能形媒体も持つが、地球は魔法文化がないため、身に危険が迫った時や治癒・ヒーリング以外は魔法を使わない。

イメージCVは南央美氏

？フェイト・テストロッサ・ハラオウン

時空管理局次元航行本部所属の執務官（三等空佐待遇）20歳。

地球防衛軍の軍人らと関わり、もう一つの地球を直に見た事で、平和について改めて思うところがあり、魔法や質量兵器、管理局の在り方等については考え方が変わりつつある。

CVは水樹奈々氏

？ティアナ・ランスター

ハラウン執務官付の執務官補。（陸曹待遇）17歳。

地球から帰還後は、フェイト共々本来の犯罪捜査より、相次ぐ艦船遭難事件の対処にあたることが多い。

自らの体験から、管理局の質量兵器に対する方針を批判的に見ており、管理局規則を改定してでも、地球防衛軍から技術を導入すべきであると主張。

CVは中原麻衣氏。

？クロノ・ハラウン

管理局次元航行部隊所属の提督でXV級航行艦『クラウドディア』艦長。

25歳。

相次ぐ艦船の遭難という現実には、管理局の戦力不足を痛感しており、地球防衛軍・地球連邦とは協調すべきであると主張している。

本作においてはKYではなく常識的な苦労人。

CVは杉田智和氏

？高町なのは

時空管理局で航空戦技教導官を務める一等空尉。

言わずと知れたエースオブエースだが、JS事件での後遺症が残るため、前線からは離れて後進の育成と育児に専念中。

地球防衛軍とは事を構えてはならないと考えているが、関わる事で管理局が変質したり、世界の守り手の地位を失うことへの戸惑いと

脅威を感じている。
CVは田村ゆかり氏

第196話『再会』（前書き）

母娘対面です。

地球・管理局とも、スピードの差こそあれ、事態が暗転していきま
す。

第196話『再会』

第2イカルス天文台、特別病室前

建造キャンセルになったアンドロメダ級戦艦の装甲板であつらえたスターシャ専用病室の前で、ここの責任者たる真田志郎と嶋津冴子は所在なげに佇んでいる。

軍制式のM222レーザーアンチマテリアルライフルやRPG-77ロケットランチャー程度ではびくともしない扉の向こうでは、約半年ぶりに母と娘が対面していた。

このエリアに立ち入れるのは、責任者たる真田とNo.2の山崎。それに当事者の真田 澪ことサーシャに、『相模』でスターシャとともに赴いてきた専属主治医と看護師ら医療スタッフ数名だけだ。

「無力だな、俺達は」
「全くだ」

同期生2人は揃って天井を仰ぐ。

相手が宇宙艦隊ならば追い払うこともできようが、病魔、ことに友人の身を蝕む病には波動砲すら通じないのだ。

「ヤツ（守）はこっちに来られないのか？」

あの男のことだ。私事より公務を最優先するに決まっている。自分から休みたいとは絶対に言うつまい。
しかし。

「雪が長官に直訴すると息巻いてた。

友好国の国王を見舞うのは重要な公務、いや、国務だろうってな」
「なるほど、確かにそうだな」

揃って苦笑を浮かべる。

秘書としてはおしとやかな印象が強い森 雪だが、いざとなればなまじな男以上に凄みがある宇宙戦士である事を、真田は何度も目に
して知っているのだ。

「ま、そっちは雪と長官に任せるとして、『ヤマト』はどうよ？」

「後は細かな調整だな。

本当はアイツらがすれば完璧なんだが、そうもいくまいよ」

そう言いつつ、真田は手にしていた端末を冴子に手渡す。

「確かに、カタログデータじゃアンドロメダ級以上だな」

冴子が目になっているのも新『ヤマト』の全てのデータではないが、
単純な攻防力はアンドロメダ級をもいくらか上回っている。

「艦船を動かすのはあくまでも人だ。

あの繰り返しは御免被りたいしな」

“あの繰り返し”は土方らを乗せたまま自爆した『アンドロメダ』
のことだ。

3ヶ月前に回収されたブラックボックスを解析したところ、『アン
ドロメダ』は都市帝国に体当たりする直前まで砲戦能力を維持し、
機関も完調だったことが明らかになった。

人手不足対策として自動化を進めたのはいいが、いざという時のリカバリー能力が、『ヤマト』はおるか、ドレッドノート級主力戦艦にも劣っていたことが『アンドロメダ』の命を縮めたのだ。

最前線で戦う主力戦艦以下の艦船もマイナーチェンジ毎に自動化・省力化が進んでいたが、それでもアンドロメダ級ほどではなかった。アンドロメダ級の中でも、ネームシップたる『アンドロメダ』は地球防衛軍宇宙艦隊の総旗艦、いわば戦略指揮戦艦として建造されたため、司令部機能が充実していた反面、ダメコン用のマンパワーが不足していたのだ。

就役前、真田はそれを指摘していたが、当時は1隻でも多く艦艇を揃えることが優先され、頻繁に最前線に出ることを想定していない『アンドロメダ』自体のダメコンマンパワーは先送りされた。

しかし、都市帝国という予想外の敵手の前に、『アンドロメダ』自身も直接戦わざるを得ず、大型ミサイルが艦橋部に命中爆発したことで、艦のコントロールを失ったことで呆気なく潰えてしまった。

その後建造・改装された有人艦は、さらなる自動化を進める一方で迅速なマニュアルオペレーションへの転換も可能にした。

それは『ヤマト』も同様で、自動化そのものは『アンドロメダ』並になっていた。

無論、基本は従来並のマニュアルオペレートなのだが。

「『ヤマト』は練習艦かね？」

「そういう見方もできるな。自分が受け持つ機器をちゃんと扱えんようじゃ、宇宙戦士の端くれにもならん。」

それに、『アリゾナ』もヤマトと同様のコンセプトで建造再開した

「からな」

「なるほど」

旧式艦とされた『ヤマト』が生き延びた要因は元からの頑強さに加え、充実したマンパワーによるものだったことから、就役済みの『アリゾナ』『モンタナ』や、最近着工した『プリンス・オブ・ウェールズ』『ビスマルク』『ガガーリン』等、各州独自枠の大型戦艦は、程度の差こそあれ、『ヤマト』と同様にマニュアルオペレータを前提としていた。

「我々としては、マスプロ艦のアップデートも進めてほしいところだな。」

暗黒星団帝国と戦うことになれば、今の16インチ砲じゃ正直しんどいしな」

暗黒星団帝国軍の、あの大型旗艦は『ヤマト』の主砲を受け付けず、波動砲でやっと片付けた。

ましてや機動要塞『ゴルバ』はデスラー砲を受け付けず、より大口径の『ヤマト』の波動砲でも装甲を貫通できる確信を持てなかった。

『ヤマト』『マルス』やこれから出てくる大型戦艦群はそのあたりの対策を打っているだろうが、打撃力の主力はあくまでドレッドノート級主力戦艦だ。

次世代艦が出揃うまでは手持ちの戦力でやりくりするしかなく、既存艦の能力向上は必要不可欠なのだ。

「まだ泣きじゃくってるようだな」

「仕方ないさ。あの容態ではな」

戦艦の装甲板で造られたドアによって室内の音声が洩れ聞こえる心

配はない。

ストレッチャーに載せられた母と再会したサーシャは、見る影もなく衰えたその姿に泣き叫び、送ってきた冴子と出迎えた真田・山崎は、拳を握り締めて腑甲斐ない己を罵るのが精一杯だった。尤も、当のスターシャは、

「ここは公の場です。軍に身を置く者ならば、公私の別を弁えなさい」

病み衰えた身とは思えぬ気魄で娘を窘めてみせた。

じゃあ行くわ、と冴子は席を立った。

「（スターシャに）会っていかなくていいのか？」

「 母娘の時間は有限だからな。後は頼むわ」そう言つや、冴子は手を振って病室を後にした。

時空管理局本局

「母さん、それ本当なの!？」

「

胸倉を掴まんばかりに迫る娘に、リンディ・ハラOWNは苦渋に満ちた表情で応え、フエイト・シャリオ・ティアナは愕然たる思いで母/上官を見遣った。

「これ以上手をこまねいていては、次元世界の安定に悪影響を及ぼ

し、反管理局武装勢力をも勢いづかせるからということよ」

「そんな。まだディンギルがやったと決まったわけじゃないんだよ！」

「わかっているわ。でも、ディンギルが犯人と断定されたら、ディンギルへの武力制裁、あわよくば管理世界への編入か殲滅をためらわないわ。海の上層部は。」

状況が状況だから、三提督方も今度ばかりは反対できないでしょうしね。」

詰んだ。

フエイトは事態が完全に泥沼に陥ったことを悟った。

手下人がディンギルでなく、暗黒星団帝国や新たな武装勢力なら、
またも敵が増えたことになるし、ディンギル 大神官大総統ルガル
の犯行ならば、何も手を打たなければ管理世界は管理局に
強い不信を抱き、管理世界からの離反すら有り得る。
さらに、反管理局テロ組織をも勢いづかせてしまう。

しかし、管理局の戦力でディンギルを無力化できるのかと言えば、
甚だ疑問だ。

普通に艦隊決戦を挑んだところで返り討ちにされるのが関の山。宇宙に散らばる屍を増やすことが目に見えている。

今にすれば、最初にディンギルと接触した『アストラ』のやり方が
悔やまれた。

もしもルガルの言う事が事実なら、『アストラ』の軽率さがとてもない毒蛇を呼び込んだとも言える。

仮に地球連邦の技術を全面的に導入できたとしても、今からでは到

底間に合わない。

（一体どうしたら　）

フェイトは胸中で苦悶し始めた。

そして、主の苦悩を感じ取った愛機は

バルディッシュ

。

（酒　　、人肌に温めたお燗　　）

第196話『再会』（後書き）

冴子

「ふっふっふ、遂に君達も20歳だな。おめでとう」

フェイト・なのは・はやて

「ありがとうございます」

フェイト

「でも、その邪悪な笑顔は？」

冴子

「よくぞ聞いてくれた。」

君達も晴れて酒を飲めるようになったわけだが、同時に『少女』ですらなくなったわけだ。後は坂道を転げ落ちるが如く――

なのはは固まり、フェイトは“言うと思った”という表情になりかけたが、はやて共々、冴子の背後に立つ人物を見て顔面蒼白になった。

「冴子さん、少しお時間下さるかしら？」

「はい――」

冴子はスターシャに連行されていった。

はやて

「あ、あの人がイスカンダルの女王陛下なん？
メチャメチャ怖いやん！！」

なのは、震えながら

「私も同感。あの人には勝てる気がしないよ（涙目）」

フェイト

「スターシャさん　貴女も朱に交わってしまったんですね（泣）」

第197話『出兵?』(前書き)

寝冷えにご注意下さい。

第197話『出兵?』

ミッドチルダ首都クラナガン郊外、首都第4飛行場

突然、午後の教導中止が発表され、教導官、教習生は全員が講堂に集められた。

その中に、高町なのもいた。

「
」

なののは顔色は冴えない。教導官の数名も厳しい表情だ。

というのも、彼女は同居しているフェイトから、本局のきな臭い動きを聞かされていたからだ。

10日前の客船襲撃事件の実行犯がディンギル帝国軍と断定されたのは3日前。

そのニュースに管理世界は沸騰し、ディンギル帝国への対応を巡って激しい議論が湧き起こっていた。

それは管理局も例外ではなく、“海”の強硬派からディンギル帝国への武力制裁案が臨時理事会に提出され、今日の臨時理事会で採決される可能性が高いというのだ。

リンディやレティ、聖王教会のカリム・グラシア、ミッド防衛長官のアッテンボロー達は強く反対しているが、事が事だけに、今回はいわゆる中間派といわれる者達は賛成を迫られるだろうというのだ。

「でも、ディンギル軍はあの核ミサイルをはじめ、強力な艦隊や機動兵器があるんだよ。勝てる成算はできてるの!？」

当然なのは疑問をぶつけてみたが、フェイトは苦しげに

「 これまでは、こちらが小勢だったから負けていたけど、今度は300隻以上の大艦隊を動員して、さらに別動隊でディンギル本星をつき、交渉に持ち込む腹積もりみたいだ」

「本星をつくのはいいとしても、本当にアルカンシエルを撃ったら、ディンギル軍は前回以上に残虐なやり方で報復してくるよ。あの核ミサイルを管理世界に撃ち込むことだってためらわないかも知れない！」

「ううん、ディンギルのルガルという人が国民の犠牲を何とも思わない人だったら、管理局に撃たせておいて、無差別報復に出てくるよ！」

捕虜を公開処刑するような人物なら、自国民に対してもいざとなれば冷酷非道な事もできるだろう。

第一、ディンギル軍とまともにぶつかって勝てる保証はどこにもない。

「 ディンギル帝国の版図は1つの恒星系だけみたいだから、国家規模は地球連邦より少し大きい位で、本星の位置は解っているから、直接本国近くに転移してアルカンシエルを向けて交渉を持ち掛けるつもりみたいなんだ」

「フェイトちゃん、今の管理局にそんな事ができる力があると思う？」
「でも、ディンギル帝国が二段構えで防備を構えていたらどうなるの？」

あの放射能ミサイルは間違いなくあるだろうし、『ヤマト』みたいに地上から宇宙空間に向けて撃てる兵器があるかも知れないんだよ」

「母さんやレティ提督はそれを指摘しているんだけど、それは敗北

思想に取り付かれた臆病者だと批難されるらしいんだ。

本局には魔法至上主義が蔓延っているけど、ディンギルや地球連邦みたいな魔法に頼らない軍事力を持つ世界は、いわば異教徒の世界にしか見ようとしなないんだ。

本音を言えば、魔法要らずで管理局を圧倒する力を持つ世界に対する恐怖心の裏返しから来る拒否反応だろうね」

「――」

なのはは暗澹たる気分に陥っていた。

自分達が理解できないからと言って対話を拒んでいるのでは子供より始末が悪い。

ましてや、相手を十分知ろうとしないまま戦端を開く等は愚の骨頂ではないか？

そのような事を思い返している内、本局から来た佐官が登壇した。

「本日は緊急かつ重要な報告がある」

苦虫を噛み潰したような表情のまま、件の佐官はひと呼吸置いて話し始める。

「――時空管理局は、先日の客船襲撃の実行犯たるディンギル帝国軍並びにディンギル帝国政府に対し、武力による制裁を加えることになった。

については、諸君達教導官と教導生にも担当部隊への転属命令が出る可能性がある。心しておくように」

ズン、と空気が重くなる。

航空戦技教導官・高町なのはにとっての地獄が始まるうとしていた

。

地球防衛軍・木星イオ基地

嶋津冴子はモニター越しに内惑星防衛艦隊のタナリット司令官と相対していた。

「君達はシリウス星系に赴いてほしい」

タナリットから命じられたのは、第7艦隊所属補助艦船をシリウス星系まで護衛することだった。

「シリウス星系で演習を行うのですか？」

「そうだ。第7艦隊も全艦が出揃ったのでね。」

シリウス、プロキオン星系には白色彗星軍が遺棄した補給拠点が複数存在している。それを活用して自動艦の運用試験等のある程度の期間を要して行いたいのだ」

『マルス』や『アリゾナ』『モンタナ』は在来艦とは一線を画する強力な戦艦であり、『クレイモア』級自動戦艦も、うまく運用すれば頼もしい槍、あるいは盾になるが、まずは運用データを蓄積していかなければならず、広大な空域で性能いっぱい機動が不可欠だ。そのためのシリウス、プロキオン遠征演習だろうと冴子は予測した。

「それともう一つ、内々の話がある」

「とおっしゃいますと？」

タナリットは声のトーンを落とした。

『古代：兄の方だが、一時的に前線視察に出てもらうことになった』
「！　そうですか」

『ついては、赴任先たる《マルス》に合流するまでは《相模》に添乗してもらうが、途中、主な基地にも立ち寄ってもらいたい』
「わかりました」

冴子は内心ホツとした。

スターシャと守の面会も現実のものになりそうだ。
あとは、少しでも夫婦・家族水入らずの時間を長く確保してやることだろう。

スターシャは確実に衰弱していると真田から連絡があり、冴子や大山歳郎ら同期生達は焦りを隠せずにいただけに、これは僥倖だ。

「　出立はいつになりますか？」

『次の任務（船団護衛）終了後、整備・補給を受けて2週間後には出てもらいたい。第7艦隊の支援部隊とは冥王星基地での合流だ』
「わかりました」

敬礼を交わしてその場を辞す。

その航海は、またも長く厳しい航海になることを、神ならぬ身ゆえ、誰も予想していなかった。

第198話『13TF発進』

「　だば、ぼちぼち行くわ」

「はい、行つてらっしゃい。艦長」

嶋津冴子と高町雪菜のこのやりとりも何十何回目、あるいは百回過ぎたか。

もとより私生活マダオの嶋津冴子がカウントしているわけがなく。

「何かあれば中島さんに相談しますから」

「ん。それと」

雪菜の回答に頷きつつ、ふと頭の中に浮かんだことを口にする。

「　頭上の動向にも気を配れよ」

太陽系内に不審な宇宙船や不自然な動きをする小天体が入り込めば、即座に地球や各惑星の有人基地は即応体制に入る。

しかし、ワープで突然内惑星域（土星圏以内）に入り込んで来るケースもあるし、いきなり地球に降下／落下してくる可能性も否定できない。

暗黒星団帝国という、まだ全貌がわからない宇宙帝国主義国家がどんな形で地球に接触してくるか、全く予想がつかないのだ。

無論、いざとなれば避難勧告や避難指示、はては身柄の一時拘束も可能な避難命令も出るが、状況は常に変わるものだ。

軍や行政機関におんぶに抱っこではいけない。

冴子と言ったのは自分の目で見て判断することも必要というものだ。

『カピタン（艦長）、心配無用と断言はできぬが、そういう時は私も全力でレディを支援する』

雪菜の首から下がった青い石から渋い男性の声がする。

雪菜が亡き母から継承した全自律魔法支援媒体 時空管理局式呼称ならインテリジェント・デバイス の『ピュア・ハート』だ。

高町家は20世紀終わりに喫茶『翠屋』を開業したが、2代目のオーナーパティシエールを皮切りに、何人か魔法を使える者が存在し、7代目の桃香とその末娘である雪菜も例外ではなかった。

とは言え、地球における魔法や魔術の類は公認されていないため、おおっぱらに魔法を使うことはできない。雪菜とピュア・ハートが組んでから全力全開で魔法を使ったのは、あのズオーダー大帝の要塞戦艦の砲撃から自身と周囲の人間を守る為にやむなく発動させた時くらいで、雪菜は今後も積極的に魔法を使う気はないのだが。

冴子を見送った雪菜は蒼天を仰ぐ。

抜ける様な青空は、ガミラスとの戦争の後に戻ってきた。

皮肉にも総人口の激減と宇宙空間における高効率太陽光発電の安定化が21世紀以降減少を続けていたCO₂やNO_xを更に激減させて、都市部でも抜けるような青空や天の川を見られるようになり、ヒマラヤやアンデス、ヨーロッパアルプス等の高山では白昼でも星を見られるのだ。

「暗黒星団帝国、か

仮に攻めてくるにしても、この地球を支配するメリットがあるのかな？」

かの国は星間戦争に必要な不可欠なエネルギー確保のためにガミラス星やイスカンダル星のマグマを採掘しようとしたが、スターシャから提供された資料を元に地球の内部構造を再調査したが、マントル（内核にはガミラシウムやイスカンダリウムに相当する放射性物質は存在と発表されており、火星についても同様の発表がなされた。水星と金星はこれから調査する予定だが、同じ結果が出るだろうと言われている。

もつとも、公式発表自体が虚偽という可能性も否定しきれないのだが。

『何とも言えんな。』

単にムカついたからぶちのめす、という理屈もあるかも知れん。行動原理が地球人とは根本から違うだろうからな』

少女の守り石は淡々と告げた。

（ そんなにメンタリティがかけ離れてるのかな？

あの白色彗星帝国の人だって、メンタリティは地球人と大差なかったのに ）

雪菜が思い至るのは、過日、冴子と激論を演じたあげく、座乗艦ごと屠られたかの国の総参謀長のことだ。

どんな内容だったかは“軍機”のため、公表されるのは数十年後になるが、真田志郎が

「貰い手がない女同士の子供じみた口喧嘩に過ぎんよ。恥ずかしくてとても公表できんさ」

とバツサリ斬り捨てたことを雪菜は聞いていた。

（真田さんの言うとおりなら、白色彗星帝国人のメンタリティは地球人とさして変わらないんだよね。容姿だって、肌の色と眉毛以外は地球人と変わらないし。

暗黒星団帝国人も、映像や艦長の話の限りじゃ、地球人と大差ないし）

冴子は暗黒星団帝国軍のメルダースという司令官と直に会話している。

詳しい内容は当然聞けなかったが、会話は一応成立したとだけ聞かされていた。

ならば、話し合いで問題を解決することだって可能だろう。

「何で、この世界のリーダーは戦争バカばかりなんだろうね？」

『案外、弱虫なだけなのかも知れんな』

雪菜の根源的な疑問に対し、守り石は即座に切り返した。

「そうだよな。皆いい大人なのに、意気地無し揃いだよね」

雪菜は苦笑したが、数年後、地球Ⅱタマゴタケモドキ説を口にして冴子達を閉口させるのだった。

半日後。

「波動エンジン、エネルギー120%！」

「戦隊全艦、発進に支障ありません！」

「波動エンジン、起動！」

「『相模』発進！」

大村の号令とともに『相模』は前進。『水無瀬』『鳥海』『伊吹』も主機関に火が入った。

「第13戦隊、発進する！」

冴子のアルトが艦橋に響き渡るとともに、13TFの4隻は増速して一路アステロイドベルトに向かう。

最初の目的地は第2イカルス天文台だ。冴子のアルトが艦橋に響き渡るとともに、13TFの4隻は増速して一路アステロイドベルトに向かう。

最初の目的地は第2イカルス天文台だ。

「本当なの！？フェイトちゃん！」

ヴィヴィオが眠りに就いたのを確認してから、フェイト・T・ハラオウンはデインギルへの制裁作戦に『クラウディア』と『ラットバルド』が組み入れられたのを親友の高町なのはに打ち明けた。

「じゃ、フェイトちゃん達も行くの？」

「うっん。私達は乗り組みから外れた。

宇宙空間じゃ魔導師は役立たずだからね。

ただ、気になる事があるんだ」

「気になる事？」

フェイトが少し声のトーンを落とした。

「 今回の任務、穏健派の艦長の大半が動員されてるんだよね」

クロノやスールは言わずもがなの穏健派であり、今回の武力制裁にも反対の立場だ。

「 懲罰人事じゃないよね？」

なのはの表情が曇る。

「 そんな事はないと思いたいけど 」

言葉とは裏腹に、フェイトの表情は冴えない。
まさか、そんな事ありえないと思いたいが、疑念を払拭することはできなかった。

第198話『13TF発進』（後書き）

冴子

「確かに、白色彗星やらディンギルやらにすれば、地球は一見美味しそうな標的に見えただろうな」

雪菜

「でも、皆酷い目に遭いました。

ガミラスは本星をメチャクチャにされたし、白色彗星は首脳陣が壊滅。

デザリアムやディンギルは文字通りの国家消滅。ボラー連邦の首相は、出しゃばったばかりに命を縮めたようなものでしたし。

どう考えても、地球はある考えの人間には美味しそうに見えても、その実、凶悪な毒キノコとは思えなくなりました」

冴子

「タマゴタケのつもりで食ったら猛毒の“モドキ”だった、か。

確かに、地球にちよっかい出した連中は口クな末路を辿ってないなあ

「

（それにしても、雪菜のヤツもとんでもない事をさらりと言ったな。誰に似たんだろうな　？）

“タマゴタケ”は一見毒キノコっぽいですが、実はとても美味しいキノコです。

“タマゴタケモドキ”はその名のとおり、タマゴタケに似た、とても凶悪なキノコです　。

第199話『夫婦？』（前書き）

短いです

第199話『夫婦?』

アステロイドベルト外周空域で、いくつかの光点が乱舞している。

『航跡が棒切れになってるぞ、気を抜くなっ!!』

『は、はいっ!』

『相模』戦闘機隊の各機が加藤四郎ら『ヤマト』の新人パイロットが駆るコスモタイガーを追い回し、彼らの教官である坂本が若鳥達に檄を飛ばしていた。

「
「
「

少し離れたところから、その様子を窺うように1機のコスモタイガーが滞空していた。

機首に燕のマーキングを施した三座タイプである。

操縦桿を握るのは『相模』戦闘機隊長の山本明。

ナビゲーター席には真田志郎が座り、最後部の銃手席には『相模』艦長の嶋津冴子が仏頂面で座っていた。

機首の燕マークが示すように、この機体は冴子が『長門』戦闘班長に就任した時に受領し、『相模』にもそのまま持ち込んだのだが、当然ながら冴子自らが操縦して出撃する機会等なく今日に至っている。

で、“ヒヨッコ共の成長確認”と称して冴子が自ら飛ぶと言い出したところ、副長の大村とチーフパイロットの山本からは渋面を向け

られ、真田からはにべもなく却下された拳げ句、銃手席に乘せられるはめになった。

「何で私がここなんだ…」

ふて腐れた冴子は旋回パルスレーザー機銃をくるくる回したり、盛んに銃の仰角を変えたりしている。

「敵襲に対応するには、これがベストの配置だからに決まってるだろうが」

「機長が銃手なんてあり得んだろっが…」

「だから前例を作ってやったのさ。てか、クルクル回るの止めろ」

「んな前例要るか！」

第一、お前の口から前例つつー単語が出る事自体あり得んわ！」

銃座ごとクルクル回り続ける冴子に、凡そ前例とは無縁であるこの男は、しれっとした表情で追い撃ちをかけ、冴子は自棄気味に返した。

「ははは
」

後席の先輩^{バカ}2人の丁々発止に、操縦席のエース（山本）は、乾いた笑い声をあげるだけだった。

見る影もなく痩せ細った妻の手を、守はそつと握る。

「ごめんなさい。地球にとって大事な時なのに、あなたや冴子さん達に寄り道させてしまって」

「何も言わなくていい。」

素通りすれば皆が後悔するからな」

スターシャが病に臥せっていることは公式発表されており、各州から見舞いのメッセージが届けられている。

ただ、余命が限られているほど悪い事はまだ公式発表されておらず、連邦政府では大統領等限られた者にしか正確な病状は報告されていない。

故に、正確な病状を知る親しい者からすれば、知っていて素通りすることは到底できないし、軍首脳部もまた、妹を失ってまで波動エネルギー技術等の超ハイテクを賣してくれたスターシャに足を向けて寝られず、古代 守が彼女を見舞うのは当然という認識であり、藤堂以下の幹部連も巻き込んで融通を効かせたという次第だ。

そうでもしないと、公私に厳格な守は、自分からは妻の見舞いに行こうとしないからだ。

「まあ、お節焼きが沢山いるからね。俺の周りには」

全く、上官といい、先輩といい、後輩といい、同期生あいつらといい…。

「いいじゃない。私にはサーシャ（妹）しかいなかったもの。世話好きのお友達が沢山いて、羨ましいわ」

「あの子（娘）の周りには小うるさいおじさんおばさんばかりになりそうだがね」

小うるさくておっかない？連中だから、嫁の貰い手が現れるかどうか、極めて不安である。

というか、“虫”の心配がない代わりに、あの連中の毒に染まる心配があるのだが。

「多少の毒は免疫にってしまう位でないと、この厳しい時代では生き延びられないでしょう？」

私はダメみたいだけど、サーシャはタフに生き抜いてほしいわ」

「君だって、まだダメと決まったわけじゃないだろう？」

「サーシャが私の分まで力強くはばたいてくれればそれで十分よ。

宿命に縛られないあの子なら、私なんかより明るく力強く生きていけるわ」

「スターシャ」

聡明過ぎる程の妻にごまかしが効かないことは十分わかっていたため、守は慰めの言葉をかけることができずにいた。

第200話『夫婦?』（前書き）

冴子

「塵も積もれば何とかやらで、遂に200話か」

雪菜

「作者は少話多連投しかできませんから、別に大した事じゃありません。」

大体、完結の目処すら立っていないんですから」

ティアナ

「雪菜、すごいきついわ」

サーシャ

「だって、雪菜ちゃんの言った事は全て事実ですから。作者の頭は中二病以前だし」

フェイト

「サーシャ、見た目はお母さんを彷彿とさせるのに」

ティアナ

「染まりましたね」

古代 進・高町なのは

「あの、僕／私達の出番は？」

冴子

「進はもう少し待て」

ヴィヴィオ

「なのはママは 当分モブキャラ扱いだつて。
作者のオチサンが、ママの立ち位置に悩んでるみたい」

なのは

「作者さん、隠れないで出て来て下さいっ!!」

フェイト・ティアナ・ヴィヴィオ

「なのは(さんノママ)落ち着いて! レイジングハートも何とか言
つて!」

雪菜

「向こうのご先祖様は血の氣が多いんですね」

第200話『夫婦？』

『何で、何でクロノが行かなきゃならないのっ！？』

エイミイの第一声はそれだった。

『そんなに管理世界を拡げたいんなら、拡げたがつてる連中だけで行けばいいんだよっ！』

「エイミイっ！」

忿懣をぶちまける妻に、それ以上言うなとばかりに声が大きくなってしまう。

エイミイの言う事はわかるが。

「今回の任務の第一はディンギルに対する武力制裁だ。これ以上あの国を放置すれば、今後もいように管理世界に対するテロが行われる。」

もうそんな事をさせないために、ディンギルにある程度の損害を与えて、二度とする気にさせないための任務なんだ」

そう言いながら、クロノの心中には無力感が募る。

武力制裁といえば聞こえはいいが、内実はアルカンシエル先制攻撃により、ディンギル本土を半ば焦土に変える、れっきとした戦争だ。

ルガルらディンギルの指導者層は許すことができないが、だからといって普通に暮らしているであろうディンギル国民まで犠牲にするやり方には納得できない。

いくら敵対しているとはいえ、魔法文化がない世界を格下に見る姿勢は相も変わらないのか？

クロノは、武力制裁の裏に隠された任務にも思いを馳せる。

もう一つの任務。ディンギル帝国軍の技術を没収して、管理局の戦力とすること。

ミサイルのような実弾兵器はダメにしても、エネルギー兵器は、極端な事を言えばどうにでもごまかせる。

あれだけの戦闘力を持つ艦艇を管理局のものにすれば、次元航行能力さえ付加できれば、反管理局テロ組織の殲滅も容易になるし、今後の管理世界拡大も楽になるだろう。

獲得できれば、だ。

失敗した時のリスクは余りに大き過ぎて口にするだに恐ろしい。

それに、成功したらしたで、管理局はガトランチスみたいな侵略的組織と堕してしまいかねない。

もしそうなれば、真っ先に地球連邦・地球防衛軍と戦闘になる可能性が高い。

フェイト達の一件で交流を持ったとはいえ、正式に友誼を結んだわけではない。いざ戦闘となれば容赦なくこちらを壊し、殺すために手ぐすね引いて待ち構えているだろう。

次元航行能力を持たせた『ヤマト』や『相模』、あるいは超大型戦艦『マルス』あたりが本局に波動砲を撃ち込みに来るかも知れない。彼らは“侵略者”に強い敵愾心を持ち、その企みを止めるためには敵国の中枢を攻撃するのちためらわないのだ。

殺し殺される覚悟が皆無か希薄な管理局に、そういった修羅場をくぐり抜けられるだけの気魄があるのか、クロノは自分自身も含めて首を横に振ることしかできずにいた。

説得が奏功したか、エイミィは渋々だが矛を収めてくれた。

『でも、これだけは約束して。』

どんなに無様でもいいから、『クラウドディア』のクルーと一緒に生きて還ってきて。

魔導師や局員の代わりはいくらでもいるけど、家族の代わりはいないんだからね。いい？』

眼を真っ赤にして早口で言つと、さっさと通信を切ってしまった。

「まったく」

あの辺は昔から変わらない。思わず苦笑が洩れてしまったが、すぐ表情を引き締めた。

「当たり前だろう？」

こんな任務で父クライドの元に逝くのは真っ平ごめんだ。母もそんな事は許しはしまい。

無論、『クラウドディア』の乗組員も1人として死なせるつもりはない。

「死んで花実が咲くものか、だ」

第97管理外世界には、実に含蓄のある言い伝えが数多く存在する。

こういう諺はミッドチルダにはなく、ゲンヤ・ナカジマの祖父やギル・グレアムといった、かの世界の出身者によって持ち込まれたも

のだが、近年、高町なのはと八神はやてが実績と知名度を上げていくに伴い、第97管理外世界の民俗文化に対する関心が高まったことにもよるだろう。

いずれにせよ、自分は部下の命に対する責任を果たすまでだ。地べたを這いずり回ってでも生きて帰る。こんな馬鹿な作戦を立てた連中の思惑どおりにはさせない。

「サーシャとは話せたか？」

「ああ」

『相模』艦内食堂《早雲峽》で、差し向かいで野菜天そばを啜りながら尋ねてきた悪友に守は応えた。

返事までの一瞬の間。父娘の会話がどんなものだったか、大体想像がつく。

こればかりは流石の真田でもどうにもならなかったらしい。相変わらず嘘が下手クソな奴だと、冴子は内心で長嘆息した。

（私が宇宙戦士訓練学校に入る頃の嶋津の養父も、オヤジこんな思いだったのだろうな）

何しろ養父は最後まで冴子が宇宙戦士訓練学校入りすることに反対し、最後は

『勝手にしろ！大馬鹿娘！！』

『ああ、勝手にするとも！！』

売り言葉に買い言葉。喧嘩別れ同然に海鳴の実家を飛び出した冴子は、その後遂に養父と正式に和解することなく、間に立ってくれた養母共々死別してしまった。

自分の選んだ道は正しかったと確信しているが、養父の理解を得る努力が足りなかったと、冴子は今もって悔いている。

古代とサーシャには自分達と同じ過ちはしてほしくないが、どうにもタイミングが悪過ぎる。

スターシャの意識がある間にサーシャの気持ちが無くなってくればいいのだが、これは一家3人の問題で、自分も真田も如何ともし難い。

何とか父娘の時間を作ってやりたい。

「なあ、古代よ」

「何だ？」

「いっそ、沖田さんの後継いじまえば？」

さりとて冴子は口にした。

第200話『夫婦？』（後書き）

ぼつぼつ重核子爆弾発射しますか
。

第201話『シリウスへ』（前書き）

些かガス欠気味。
短いです。

第201話『シリウスへ』

土星圏タイタン。

地球連邦は、土星圏を内惑星圏と外惑星圏の境界と定め、タイタンを始めとする主要衛星には地球防衛軍や宇宙開発庁等が有人・無人の基地を設置しているが、タイタンの防衛軍港はそれでも最大のもので、外惑星に向かう艦船は原則としてここに寄港するのだ。

正反対の土星軌道上にもこれに準じた施設の建設が取り沙汰されており、かの白色彗星帝国が遺棄した都市帝国の下半分をここに移動して大改装する話も出ているが、今しばらく時間がかかりそうだ。

そのタイタン空域に様々な艦船が遊弋している。

地球防衛軍の制式軍艦もあれば、民間の貨物船の形をしたもの、はては旧ガミラスや白色彗星帝国軍の艦船らしきシルエットの船も見受けられる。

これらは太陽系内や周辺宙域で放棄されていたものを地球防衛軍が接收し、艦装を地球式に改めたものだ。

「艦長、補給艦集結完了しました」

「ん…」

副長・大村耕作の報告に、艦長席の嶋津冴子が頷く。

13TFは、シリウス星系で演習中の第7艦隊にこれらの補給艦船群を合流させるべく随伴するのが任務なのだが。

「艦長、『デ・ロイテル』のオラニエ艦長から通信です」

「繋いでくれ」

補給部隊に随伴するのは13TFだけではない。巡洋艦『デ・ロイテル』他、ヨーロッパと南北アフリカ州の巡洋艦、パトロール艦各1、駆逐艦6の護衛艦隊が本来の護衛戦力だが、藤堂長官の指示により、急遽13TFも随伴することになったわけだ。

今回の場合は最先任である『デ・ロイテル』のオラニエ艦長が全体指揮をとることになっている。

メインスクリーンにオラニエ艦長の姿が映し出された。

オラニエは齡61。一般隊員から現場一筋で叩き上げて今の地位に到達しただけあって、老練な指揮には定評がある。

敬礼を交わして名乗り合う。

「『相模』艦長の嶋津です。13TFの指揮を代行しています」

『…《デ・ロイテル》艦長のオラニエだ。貴隊の活躍ぶりは聞いている。シリウスまでの短い間だが、よろしく頼む』

「はっ！」

冴子は若くして戦艦を預り、さらに代将旗をも掲げる立場にもなったため、ともすれば年長の艦長連からは白い眼を向けられがちだが、オラニエは人物が練れているのか、そういう言動は窺えなかった。

他人のやつかみなど知ったことではないが、意思の疎通がスムーズであることに越したことはない。

『デ・ロイテル』からの指示が飛び、各艦は所定の位置につく。
13TFは艦隊の後衛を固める位置につき、『水無瀬』がしんがりだ。

やがて、『デ・ロイテル』から発光信号が撃ち上げられた。

「発光信号撃て！戦隊全艦発進する」

「了解。『相模』半速前進！」

「半速前進、宜候！」

『デ・ロイテル』を先頭に、輸送・支援艦船22隻、護衛艦12隻は土星圏を離脱していく。

第7艦隊との会合ポイントまではおよそ3昼夜だ。

ミッドチルダ首都クラナガン・高町家

「なのは、何があったの？」

ヴィヴィオを寝かしつけた後、フェイトは無二の親友に話しかけた。

デインギルへの武力制裁が決まったあたりから元気がなかったが、今日帰宅した時の表情は一段と沈んでいた。

ヴィヴィオが玄関に来た時は笑顔に変わったが、何か良くない事があったのは確実だった。

「うん」

しばらく湯飲みのお茶に視線を落としていたのはだが、顔を上げて話し始める。

「今回のディンギル遠征部隊に、教導生と同僚の人達も何人かが参加することになったの」

「え？」

魔導師は大気圏内、それも対流圏内での任務に限定されている。

成層圏での活動については専用のバリアジャケットの開発が端緒についたばかりで、ましてや宇宙空間で活動できる目処はついていない。

ディンギル本土に降下するというのか？

それをなのはに問い質すと、

「私もそれが疑問で、本部に問い合わせただけど、降下任務が生じる可能性があるから、空戦魔導師も必要だと言っの」

「そんな。ディンギル軍には戦闘機もあるんだよ。

宇宙戦闘機だけど、それなりの翼もついでる。

コスモタイガー同様に大気圏内でも運用できるかも知れないのに！」

たとえそうでなくても、防空戦闘機や対空ミサイルは必ず保有しているはずだ。

優秀な航空魔導師であれば、低空での格闘戦で互角に戦えるかも知れないが、ダイブ&ズームの一撃離脱戦法や地上からの対空砲射撃には抗しきれない。

ましてや、対空ミサイルに核弾頭が仕込まれていたら。

フェイトはそれを指摘したが、なのはは

「私もそれを指摘して反対したけど、決定は覆らないって」

と答えるや俯いてしまった。

よく見ると肩を震わせ、噉り泣いている。

「いくら向こうのやっている事が悪いとは言っても、侵略紛いの行為に加担させるなんて」

自分の教導は、世界の平和の守り手になってもらいたい一心でやっている。

こんな、侵略同然の行為に加担させられる上、生還が保証されない任務に送られる教え子や同僚達が余りに不憫だった。

第202話『開幕』（前書き）

色々盛り過ぎたかも知れません

第202話『開幕』

シリウス星系、戦艦『マルス』、艦長公室

大規模艦隊旗艦能力を持つ『マルス』のそれは、せいぜい分艦隊旗艦までの『相模』等とは段違いに広く、艦の規模も手伝って、ちょっとした会議室だ。

その部屋で、この艦と第7艦隊を預かる山南良介は参謀長・ジェイムス・モーリー以下の幕僚達と難しい顔を突き合わせていた。

第7艦隊はシリウス星系を中心にした訓練を行っている。

それも、有人艦のみならず、クレイモア級やダガー級自動戦闘艦の戦術機動訓練も並行して実施しているのだが。

「小さなトラブルやアクシデントが多過ぎるな。放置しておけば、間違いなく大事故を誘発するぞ」

「そうですね」

山南と幕僚達の表情は総じて渋い。

予想していたとはいえ、解決すべき問題が山積しているのだ。

自動艦もさりながら、新型艦であるアリゾナ級や海鳴級、旧白色彗星軍艦といった新顔。そしてそれらを運用する人員も、大半は経験が浅く、死傷事故こそ起きていないが、予想外の不具合やヒヤリハット事例があちこちで起きていた。

本来であれば、もっと時間をかけて訓練したいところなのだが、白色彗星帝国の報復や暗黒星団帝国の太陽系侵攻がいつあってもおかしくない現状では、実戦形式で、身体で覚えてもらうしかない。スパルタ形式だが、それでも各艦乗組員の士気が維持されているの

は幸いなことだろう。

「士気が高いのは結構なことですが、かといってこのまま張り詰めさせ続けるわけにはいきませんまい。半舷休日は予定どおり与えるべきでしょう。補給隊も合流することですし」

第7艦隊の“総務部長”であるアリー・ハッサン事務監が乗組員の半舷休日を予定どおり取らせる事を進言する。

3日前に発った補給隊が間もなく合流する以上、物資の積込作業が優先される。

作業自体は補給隊側が行うので、各艦乗組員は休息することができよう。

「ん。半舷休日は予定どおり取らせよう。総員に通達」

「わかりました」

山南の決定を受け、アンドレイ・ロコフ首席参謀が手元の端末を操作。所属する全艦の艦長宛に通達を流した。

ほどなく、補給部隊の接近が艦橋から伝達され、ようやく司令部幕僚も表情を綻ばせた。

山南は執務机に戻ると、通信長を呼び出した。

「山南だ。『相模』の嶋津艦長に連絡。古代参謀に同行して私の元に来るように、とな」

ミッドチルダ首都クラナガン、高町家

フェイトは自分の書斎で姿見に相對していた。

身に着けているのは私服でも執務官制服でもなく、白いマントを纏った通常のバリアジャケツだ。

フェイトはしばらく瞑目していたが、瞼を開き、鏡に映る自分を直視するや、一言呟く。

「バルディッシュ、真・ソニックフォーム・セカンドバージョン」

『畏まりました。マスター』

瞬転

1秒もしない内にフェイトのコスチュームが変わった。

それは、管理局員や犯罪者達がよく見知っている二の腕や太腿が露わな、セクシーとも露出過多とも言われるコスチュームではなく、首から下、爪先や手首まで黒を基調に白と金のラインが入ったとボディースーツ型のコスチュームに包まれていた。

「よしっ、コスチュームは完成だ」

フェイトは両拳を握り、小さなガッツポーズを作る。

執務官フェイトの真…もとい、新・ソニックフォームが姿を現した瞬間だ。

脚や二の腕をフルカバーしたことで防御力を増した一方、魔力制御の再設定で在来ソニックフォームとほぼ同等の機動力を確保し、バリアジャケツとしての総合性能は格段に向上した。

新コスチュームのモチーフは、過日『ヤマト』に身を寄せていた時に貸与された女性乗組員用制服だった。

ボディスーツ様のそれは宇宙服や戦闘服としての機能を持ち、ヤマト唯一の女性乗組員だった森 雪は、その姿で幾度となく鉄火場を走り回り、負傷して倒れた古代進を庇ってデスラー総統とも対峙したという。

その話を聞いたフェイトは深く感銘を受け、自分も負けていられないと発奮したかどうかはともかく、その制服の高い実用性にも着目。自らのバリアジャケット改良のモデルに決め、マリエル・アテンザ、シャリオ・フィニーノらと共同で作業を進めていたのだ。

以来、フェイト・T・ハラオウンのバリアジャケットは“露出度”を下げ、新暦80年代初期のエクリプス事件以後は通常のバリアジャケットもスラックスタイプに転換したため、男性局員を落胆させた一方、女性局員からは凛々しさを増したと好評を博した。そして犯罪者からは“金色の首狩女”と恐れられ、それを耳にした本人は痛く落ち込んだと言う。

『マルス』艦内

「
」

先導する『マルス』副長のジョーニマス・福田に続きながら、古代守と嶋津冴子は鼻白んだ体^{てい}で自動通路で艦長室に向かっていた。すれ違う乗組員が敬礼し、答礼を返しながら。

（『ゆきかぜ』はおろか、『ヤマト』と比べても段違いに広いな）
（『アンドロメダ』はまだツッコむ余地があったけど、こいつには

もうツッコむ気にならん)

冴子が鼻白んだとおり、『マルス』の艦内スペースは広く、居住性も良さそうだ。

潜水艦並みの居住性しかなかったかつての乗艦『ゆきかぜ』『ひびき』等、M21881式突撃駆逐艦をドミトリとすれば、『ヤマト』は民宿、ドレッドノート級はビジネスホテル、そして『マルス』はやや高級なシティホテルと言ったところか。

格納庫から通路とエレベーターで約5分余りで艦長室の前に立った。

「久しぶりだな、悪たれコンビ」

「お久しぶりです」

「ご無沙汰しております」

山南と守、冴子が相対して話すのは、かれこれ宇宙戦士訓練学校を卒業してから12年ぶりだろうか。

当時、山南は守・真田・冴子らの1期下の主任教官で、彼から直接教わる機会はなかったが、しょっちゅう土方に呼び付けられては叱言と雷を喰らっていた冴子達の事は間近で見っていたため、互いに面識はあり、その流れで言葉を交わす機会が多かったのだ。

そんな古代達が、今や高級士官として司令部入りしたり、小艦隊を率いる立場になっている。

ガミラスや白色彗星との戦いで一番戦没率が高い世代ゆえ、武勲を挙げてなお生き延びた者は、自ずと指揮官職や教官職についてしまう。

それは今や古代 進ら20歳そこそこの者にも当てはまるのだが、目の前の2人はその中でもフロントランナー。当人達は全然望んで

いなくてもだ。

「奥方の体調はどうかね？」

「率直に申し上げて、年は越せません」

「！　　そうか　　」

守の回答に、山南も声を落とす。

スターシャの容態が良くないことは軍の高級士官が皆知るところとなっているが、実は余命僅かなのを知るのは数える程の者しかおらず、山南も初めて知ったようで、一瞬絶句した。

しかし、次には守と冴子が絶句する番だった。

「　　失礼します　　」

ドアが開き、女性クルーがお茶を持って来たのだが、彼女の顔を見た守と冴子は目を丸くした。

（　　フェイト・Ｔ・ハラオウン？　　いや、瞳の色が違うか）

（よく見ると、胸の大きさも違うな）

後者のセクハラ思考の主は言うまでもなく冴子だが、それほど、この女性クルーの容姿はフェイトに似ていたのだ。

違うのは胸の大きさ　　フェイトは巨乳、目の前の彼女は美乳と、瞳が紅ではなくヘイゼルであることだが、顔立ちや長い鮮やかな金髪はフェイトとよく似ていた。

（ドッペルゲンガーか　　？）

些か呆然としていると、

「生活班副班長、アリシア・マルコーニです。お2人のお名前はかねがね」

女性クルーの自己紹介を聞いて、冴子はまたも目を丸くした。

（何とまあ 名前までフェイトの姉ちゃんと同じかよ）

フェイトのオリジナル、いや、姉に当たる故人と同じ名だ。魔法の世界とこつちがこうも似通っているとは。

まあ、もう一つの地球も存在するというのだから、自分と鏡移しな人物がいても不思議ではないだろう。

冴子はそう結論づけて自分を納得させた。

某宇宙空間

天の川銀河から約15万光年離れた宇宙の海に、巨大な建造物が浮かんでいる。

その建造物 デザリアム帝国軍中間補給基地 の司令室に、太陽系制圧軍総司令官・カザン大将が陣取り、ある人物とのコンタクトが繋がるのを待っていた。

やがて、メインスクリーンが明るくなり、映し出された人物に、カザン以下、そこにいた者はひざまずいて臣下の礼をとった。

「カザン、準備は予定どおり進んだようだね」

「はっ。聖総統のご威光あればこそでございます」

「いや、諸君はよく動いていたよ。私は少し動いただけさ それ

より、あれの準備はできたかな？」

聖総統スカルダートはカザンと幕僚達を労ってから、今作戦の“目玉”の進捗状況を尋ねた。

「はっ、万事整いました。ご命令あれば、直ちに地球に向けて発射可能です。

幸いにも、太陽系で地球の外側にある各惑星の大部分は直列に並んでいます」

『そうか、ならば直ちに発射したまえ。作戦発動だ、カザン』

スカルダートは地球制圧作戦の発動を宣言する。

カザンは幕僚を振り返り、命令を下した。

「聖総統のご命令が下った。直ちに重核子爆弾を地球に向けて発射。続いて全艦隊は出撃する！」

「はっ！！」

二重銀河崩壊という、文字通り宇宙規模の極大災害を結果的に誘発し、地球連邦にとっても一大痛恨事になったデザリアム戦役が、ゆっくりと幕を開いた。

第203話『出撃』（前書き）

運命の刻が迫っています。

第203話『出撃』

時空管理局本局次元港

本局音楽隊が奏でる『時空管理局に永久の栄光を』が響き渡る中、XX級次元航行艦『ルスラン』がゆつくりとバースから離れていく。見送る局員や家族の表情は悲喜こもこもだが、家族の大部分に笑顔はなかった。

「
」
「
」

見送る者の中にいるフェイト・シャリオ・ティアナにもまた笑顔はない。

彼女達の願いはただ一つ。クロノを初めとする乗組員達が一人でも多く生還してくること。

強硬派からは何たる弱腰かと言われそうだが、ディンギル帝国が白旗を上げるとは思えないからだ。

ディンギルがこちらに本格的攻勢をかけてくる様子は見られず、ならば先制してディンギル本星を叩こうというわけだが、ディンギル側には地の利がある上、艦船や機動兵器でもディンギル側のアドバンテージがある。

艦隊決戦に陥れば確実に不利な管理局側は、一目散にディンギルの首都を衝いてアルカンシエルを向け、可能な限り有利な条件で停戦交渉を行う。

その過程でディンギル国民が犠牲になるのもやむを得ない、という

ことだが。

（これまでの経緯からして、ディンギル国民は管理局の事を知らされていないか、憎むべき侵略者と教え込まれているだろうな。そういうところにいきなりアルカンシエルを撃ち込めば、更なる敵愾心と憎悪を買うだけではないのか　？）

『クラウディア』の艦長席で、クロノ・ハラウンは物思いに耽っていた。

クロノ達に与えられた任務は、事実上の囷となってディンギル艦隊を挑発し、誘い出すこと。

極めて危険だが、うまくいけば本隊はディンギル本星を衝ける。

ただ、クロノが何とも冷ややかな気持ちなのは、こちらに配置された艦の多くは、いわゆる慎重派や穏健派といわれる者が艦長であること。

（　目障りな連中を一網打尽に消してしまおうと言うわけか…）

余りに見え見えな配置といい、不本意極まる任務だが、自分は艦と乗組員に責任がある。そうやすやすと強硬派の思惑どおりに死んでやるつもりは毛頭ない。

何としても全員で本局に帰る。

クロノの頭に、勝利の文字は全く浮かんでいなかった。

本局、特別捜査官執務室

「ご苦労さんやったな。シグナム」

「いえ。大した事はありません」

部屋の主たる八神はやては任務を終えて戻ってきた自らの守護騎士の1人、シグナムを労った。

大したことはない、と応じたシグナムだが、彼女が着ている航空武装隊の士官制服には卵のシミが複数付着しており、右頬にはやはり守護騎士であるシャルマルが絆創膏を貼り付けていた。

「大した事じゃなかよ！シグナムのせいじゃないってのに。逆恨みもいいとこだぜ。あのガキ！」

心外だと声を張り上げたのは彼女の融合騎で相棒たるアギトだ。

シグナム達が赴いた第67管理世界は、約20年前、半ば強制的に管理世界に組み込まれた経緯があり、今なお反管理局意識が根強く残っているが、そこで発生した住民同士の小競り合いが拡大して現地駐在の管理局では手に余ったため、本局は武装隊を派遣。シグナムは自身が隊長である第241飛行隊とともに現地に赴いた。

管理局武装隊も加わったことで紛争は鎮圧されたが、治安維持のため一時駐屯したシグナム達は、現地住民からの冷たい視線に始終晒され、少なからず嫌がらせも受けた。

生卵や排泄物を投げつけられることもざらではなく、シグナムも子供から投石されて、右頬を負傷した。

当然ながらアギトや隊員は怒り、子供を拘束したのだが、シグナムは逮捕することを許さず、身元確認を済ませた後に釈放させた。

「治安維持に当たる以上、住民から煙たがられるのも給料の内さ。それに、あの子供らを逮捕して処罰したとて、根本的な解決にはな

らん。むしろ将来のテロリストを増やすだけだ。
あれで多少なりとも鬱積したものが発散されたのならば、この程度
の傷、怪我のうちには入らぬさ」

シグナムは淡々と語った。

「問題なのは第67世界だけやない。比較的近年管理世界にな
った世界での反管理局運動がこの数ヶ月で増加したとる。

ガトランチスやディンギル、地球連邦といった、管理局のコン
トロールが効かない世界の存在が微妙に影響しとるのかもなあ」

だからこそ、そういう世界を叩いておきたいという強硬派の考えも
全く理解できないというわけではない。

もしも、ディンギルやガトランチスと反管理局組織が繋がり、強力
な質量兵器が流入したら、管理局の手には負えなくなってしまっ
たらだというのが。

一方、地球連邦はディンギル等とは違っただろうが、万一管理局と激
しく対立するようなことになれば、何らかの牽制手段に出てくるこ
とはあり得る。

一番厄介なのは、反管理局感情が強い管理世界が地球連邦と正式な
外交関係を締結し、さらに軍事同盟関係になることだろう。

地球連邦の対外姿勢は対等かつ平和的に接する事を是としており、
管理局のそれとは必ずしも合わない。

ただ、侵略に対して全力で抵抗した結果、敵国の首都を壊滅させ
たり、元首以下の国家指導者層を全滅させてしまったりと、事情を
知らない第三者からは過剰防衛とは思えない、不本意な形での結末
が続いていくのだが。

（ディンギルと今すぐ和睦するのは不可能やろし、地球連邦まで敵に回すことだけは避けないかんよなあ…）

はやては内心で長嘆息をつくのだった。

シリウス宙域、『マルス』士官室

「では、何かありましたらお呼び下さい」

「ありがとう」

古代 守は部屋まで案内してきた生活班員を労うとドアを閉めた。

『ヤマト』『相模』のゲストルームですら、自分がかつて乗り組んでいた突撃駆逐艦より遥かに快適だったが、『マルス』のこれはさらに快適度が上がっていた。

戦略指揮戦艦は伊達ではない。

高官が乗り込む事を念頭に設計されているだけあり、占有面積や調度品の質も上がっている。

とはいえ、戦艦は戦ってなんぼだ。

ハードウェアは格段に改善されているが、山南曰く、樽も酒もまだまだ熟成不足とのこと。

気がついた事は忌憚なく言うように、と山南は話していた。

名目上は視察だが、山南に守を遊ばせておく気は毛頭ないようだ。

限られた時間の中でどれだけ出来るかわからないが、俺なりの事を

しよっじゃないか。

トランクから私物を出していく中、文庫本の間からフォトスタンドが出てきた。

内蔵電源を入れると、自分と妻子、弟、仲間達の姿が代わる代わる現れてきた。

画面の中のスターシャははかなげだが、まだ元気そうだった。

「　　っ、スターシャ　　」

間もなくスターシャはいなくなってしまう。

その現実を再認識した守の全身に震えが走る。

ガミラスとの戦争は守から沢山の大切なものを奪い去ったが、スターシャとサーシャという何物にも代え難い宝物を齎した。

そのスターシャが、もういなくなってしまう。

できるならば、仕事などうちやっけてスターシャの傍にいたい。

女王だったスターシャは私より公を優先する生き方だったし、自分もそうだ。

しかし　　。

理性と感情が常に平行線にいるとは限らない。それが人間だ。

それは守も例外ではなかったが、全ての状況が激変する時が刻一刻と迫っていた。

第204話『侵入』（前書き）

いよいよ始まりました

第204話『侵入』

天の川銀河・アンファ星系第3惑星、ディン
ギル

『大総統閣下、国防長官より至急の連絡が入っております』
「繋げ」

総統府で政務を執っていたディンギルの国家元首、大神官大総統ル
ガールは、国防長官との通信回線を開かせる。

「何か？国防長官」

『はっ。潜伏中の《ユーフラテス》が、時空管理局本局から多数の
艦船が発進するのを確認しました』

「目的地は我が本星か？」

『数日前から通信のやり取りが大幅に増えました事と、動員される
艦船の数が、管理世界における治安維持活動と比べても異常なまで
に多い事を併せて考えるに』

「我が本星への直接攻撃の可能性が高いということだな？」
『御意』

国防長官からの報告を聞いたルガールは即断する。

「よろしい。全軍に防衛戦闘態勢を敷かせろ。
《ユーフラテス》には命令あるまで現在位置で待機させよ」
『御意！』

国防長官との通信を終えたルガールは、次いで長男を呼び出す。

「ド・ザール將軍、時空管理局が我が国に向かってくることになった。迎撃準備は良いか？」

『はっ。既に全艦隊に発進準備を命じました』

「ん、準備でき次第発進し、南極上空に集結させよ」

『はっ！』

さらに内務大臣には全土に戒厳令を敷くように指示。ルガールの命令一下、デインギル帝国は短時間で戦争体制に入った。

市街地に警報音が鳴り響く。

政府庁舎内で人員が目まぐるしく駆け回る中、ルガールは謹厳とも仮面ともつかぬ無表情を崩さぬまま呟く。

「管理局よ、これは貴様達が仕掛けてきた事だ。血を流す覚悟がなかったとは言わせぬぞ」

呟き終えたルガールの口許は、微かに上がっていた。

太陽系外縁、第11番惑星軌道付近

銀河系中央側空域に敷設されている無人監視衛星が、何の前触れもなく直近にワープアウトしてきた物体を捉えた。

その物体は亜光速で監視衛星をフライパスし、冥王星に向けて飛び去っていく。

衛星からの信号はタキオン通信で地球に向けて放たれ、それをキャッチした防衛軍司令本部と、進路上にある各基地や部隊は騒然となった。

司令長官室で執務に当たっていた藤堂平九郎はすぐさま中央司令部に降り、参謀長ら幕僚と共に現状報告を受ける。

「物体は光速の95%以上の速度で冥王星に向かっていきます。あと10分で到達します！」

報告を受けた藤堂はスクリーンを見遣る。

そこには、水星から最外縁の準惑星エリス軌道や両極方面に展開している防衛軍の各戦力が表示されていた。

（天王星以外の惑星は、冥王星から火星までほぼ一直線に整列している。

誰の仕業なのかはともかく、太陽系の惑星が直列になることを見越した上で、あの物体を送り込んできたのではないのか？地球に向けて）

「火星以遠の全軍は戦闘配備！演習中の第6艦隊を呼び戻せ。それと、大統領官邸に通信を繋げ！」

老いたりとはいえ、彼もまた戦士だ。その本能が、これは侵略だと警告していた。

最優秀すべきは市民の安全だ。過剰反応、独断専行と言われようが、我々は全てを賭けて市民を守る。

藤堂にとって3度目の戦いが幕を開けた。

「ボヤボヤするな、急げっ！！」

傍らでは、右往左往する若いスタッフを参謀長が大喝した。

太陽系内の地球防衛軍は戦闘配備に入ったが、その最中に冥王星基地との通信が途絶した。

シリウス星系、戦艦『相模』

「10時半の方角から10機接近！」

「面舵20！左舷対空射撃用意！」

「了解！」

「3時の方角から新たな編隊接近！」

「遅いな。タイミングを見計らって横つ面をひつばたく。艦首下

げ30！右舷対空射撃用意！主砲3番を右95度！」

「はいっ！」

同宙域、パトロール艦『水無瀬』

パトロール艦を先頭に、2隻の巡洋艦が縦楔陣形を組んで突進する。

「『伊吹』と『鳥海』はついて来てますか！？」

「大丈夫。つかず離れずついて来てるわよ！」

僚艦を案じる操舵士の月読伊歩の問いに、艦長のナーシャ・カルチエンは心配無用とばかりに応じ、伊歩は可憐な顔に獰猛な笑みを浮かべた。

何しろ、地球防衛艦隊で1・2を争う過激な操舵士と悪名高い自分の操る『水無瀬』から落伍せず、僚艦の『伊吹』『鳥海』はピタリ

と追従してくるのだ。

『鳥海』の舵を握るフランベルク・白百合・アリアは、ガミラス戦役当時からアクロバティックな舵捌きで知られていたが、『伊吹』を駆る綾歌麗奈も、たおやかな容姿と落ち着いた性格と対照的に、なかなかダイナミックな操艦を見せている。

「自動駆逐艦第1集団まで、あと12宇宙?!」

「全艦、全発射管と砲門スタンバイ!」

仮想敵である自動駆逐艦部隊との距離を聞いた副長兼戦闘班長の篠田 巖が、砲雷撃戦準備を下令した。

13TFの次席指揮官は『伊吹』艦長の塩江龍一だが、旗艦『相模』と別行動で高速機動戦を行う場合は『水無瀬』艦長のナーシャ・カルチェンコが指揮をとることになっている。

13TFの4人の艦長のうち、『水無瀬』のナーシャは突撃志向、『鳥海』のフランベルク・棗・シルヴィアはトリガーハッピー。指揮官たる嶋津冴子も元来は攻撃型である。

対して『伊吹』の塩江は守勢になると粘り強さを発揮するため、こういった突撃戦闘の際は後衛を受け持つのだ。

さて、第7艦隊に合流した『相模』以下の13TF（独立第13戦隊）は、次の任地であるアルファ星系に出発するまでの数日間、第7艦隊の指揮下に編入され、周辺宙域の警戒や演習における“標的”任務にあたっていた。

もともと、冴子以下の各艦長はそうそう簡単に命中弾をくれてやる積もりはなく、山南からも

「思う存分揉んでやれ」

と言質をとっていたため、何もかもが新しい第7艦隊の各艦や艦載機隊は“標的”によって徹底的に揉まれていたのだ。

“仏の山南”の課した演習という名の訓練はなかなか厳しく、地球防衛艦隊再建当初に土方総司令が課していた訓練とさほど変わらぬ苛烈さ。敵は待つてくれないという事で、抜き打ち訓練や17時間ぶつ通しの長時間演習も行われていたのだが、それでも事故による殉職者や重傷者が出ていないことは快挙といえた。

そして、この日の訓練演習もほぼ順調に進んでいたのだが、艦隊標準時間（東京時間）で14時過ぎに、旗艦『マルス』から突然、演習中止命令が発信された。

第205話『制裁艦隊VSデインギル?』(前書き)

ゐよゐよ、デスマッチの始まりです。

第205話『制裁艦隊VSディンギル?』

ディンギル星赤道より約20万?宙域

『クラウドディア』『ラットバルド』を含む管理局次元航行艦隊約200隻は、予定宙域に転移を完了した。

「艦内全システム異常なし」

「通信状況クリア」

「レーダー正常動作」

『クラウドディア』艦橋内に艦内外のチェック状況を報告するオペレーターの声が響く。

「よし、旗艦に報告してくれ」

艦長席のクロノ・ハラオウンは自艦の状況を旗艦に報告するよう指示した。

クロノ達が所属する第2艦隊はXV級とL級の後期艦に改し級といった高速艦で編成されている。

クロノ達の任務は迎撃に来るであろうディンギル艦隊を誘い出し、本隊のディンギル本星接近を支援することだ。

いわば囷だが、簡単にやられては敵の矛先が本隊に向けられるため、敵艦隊に追いかけられながら“敗走”しなければならない難しい役どころだ。

当然、少なからぬ被害が生じることも考えられる。クロノは艦から

可燃物を下ろさせ、代わりに船外作業服を積み込んだ。

これとて気休めにしかないが、生身よりはずっとましだ。しかもバリアジャケット並の強度とABC対策もそれなりに施されているからだ。

強硬派の提督連からは嘲笑されたが、地球防衛艦隊とガトランチス艦隊の戦闘を目の当たりにしたクロノにすれば、これですら足りないのだ。

とにかく生き残る。こんな最低な任務で死ぬなど御免被る。

あのルガルが易々と我々の攻撃を許すはずがなく、悪質な、我々を絶望させるような陥穽を用意して手ぐすね引いて待っているに違いない。

その時。

「前方10時の方向に、艦船の転移反応多数！」

観測担当オペレーターがクロノを振り返り報告した。

「デインギル艦隊か？」

「味方識別信号は出ていません！地球防衛軍の反応もありません！」

「ならばデインギル艦隊だ。総員戦闘配備につけ！艦内全隔壁を閉鎖せよ！！」

（とはいえ、どこまで持ちこたえられるのか　？）

帰還したフェイトが指摘したのは、管理局艦船の脆弱さだった。

特に艦内隔壁の少なさは、万一被弾した時に大量の空気が失われ、犠牲者を増やす原因になる。

また、艦の什器・備品に可燃物が多いのも問題で、艦船技術本部も、現在建造中の艦船については隔壁増設や什器備品の難不燃化を進めているが、肝心の艦自体の強化はやっと端緒についたばかりだ。

武装にしても、ガトランチスや地球防衛軍の艦船と比べて数世代は遅れていると見られ、最強の魔導砲たるアルカンシエルは射程と威力で波動砲に及ばず、その他の中小口径魔導砲にしても同様だ。何より、主機たる魔力炉が相対的に出力不足なのだ。

機関出力が小さければ航行能力が低く、戦闘時の機動性も低い。だからこそ艦隊決戦ではなく、直接敵国の首都を衝くという戦術も領けるのだが。

「大型艦10、中学艦約90。後方に超大型艦2!」

観測オペレーターからの報告を聞いたクロノは内心で渋面をつくる。

超大型艦　宇宙空母かあの核ミサイル艇の母艦なのか？

「超大型艦から機動兵器は発進しているか!？」

「いえ、確認されていません」

「ヤツ（超大型艦）の動向を見落とすな!全砲門開け、障壁最大出力へ!」

双方の艦隊は急速に距離を詰めていく。

「第1・第2部隊、アルカンシエル発射態勢に入りました!」

通信オペレーターが叫ぶように報告する。

前衛の10隻がディンギル艦隊にアルカンシエルを浴びせかけよう

というのだ。

（発射を気取られなければ我々の勝ちだが　　）

クロノはメインモニターに視線をやり、アルカンシエル発射シークエンスに入った旗艦『レゾリューション』以下のXV級を見遣る。

『レゾリューション』の艦首直前に発生した光球が急激に拡大していくが、それを見ていたクロノの表情が強い不安に歪んだ。

（…いかん。あれでは撃つぞと敵に言いふらしているようなものだ）

クロノの絶望に近い不安をよそに、発射シークエンスは最終段階に到った。

「アルカンシエル、撃ちますっ！」

「て、敵艦隊が一斉に散開しましたっ！」

通信と観測の両オペレーターが叫ぶように言った　　。

第206話『制裁艦隊VSデインギル?』(前書き)

連続投下です。

第206話『制裁艦隊VSディンギル?』

「アルカンシエル、失敗しましたっ!」

多くの艦で同じ報告がなされた。驚愕とともに。

前衛の艦から放たれたアルカンシエルは狙い過たず着弾したもの、機動性に勝るディンギル艦隊は発射直前に大半が散開して離脱。艦隊後方に位置し、離脱が遅れた数隻の支援艦艇が消滅したのみだった。

「戦死した者には済まぬが、アルカンシエルとやらのデータもとれた。これで向こうの艦艇のデータは全て得た。

将兵達よ、管理の名の元に我が国を侵さんとする魔導師どもを宇宙の塵にするのだ!」

「全艦、砲撃開始っ!」

第1艦隊旗艦『ガルンボルス』艦上でルガル・ド・ザールは司令官席から立ち上がり、将兵を鼓舞するように総攻撃を下令。傍らの参謀長が司令官の命令を伝達する。

総攻撃命令を受けたディンギル艦隊は管理局艦隊の両翼と上下方向に高速で展開し、主砲・副砲のガトリング・インパクト砲を連射し始めた。

「ディンギル艦隊、両翼と上下方向から撃ってきました!」

「障壁展開! 撃ち返せ!」

「無理です! こちらの射程外です!」

「着弾しますっ!」

管理局にとっては最悪の展開になった。ディンギル艦隊はこちらの中小口径魔導砲の射程外からでも撃ってくる。しかも上下左右からの十字砲火。

果たせるかな、被害が出始めた。

Ｌ級の『タツカー』が左舷からの砲撃で障壁を破られ、忽ち艦体に多数の破口を穿たれて爆発炎上したのを皮切りに、艦隊の外側に位置する艦から火の手が上がり始めた。

「『タツカー』 シグナルロスト！」

「『カザルス』 反応消失！！」

瞬く間に僚艦のシグナルが次々と消えていく様に、『クラウディア』のブリッジクルーは蒼白になっていく。

「本隊は何をしてやる！！」

クルーから怒り混じりの声が上がる。

こちらは命懸けで囀の役を演じているのだ。本隊が役目を果たさなければ、こちらは犬死にだ。

「本隊の状況は？」

「“今しばらく持ち堪えよ”とだけです」

早くも半泣き顔の通信オペレーターの報告を受けたクロノは、コンソールの下で拳に一層力を込めた。

ディンギルの首都を焼野原にしたとしても降伏する保証などない。むしろ憎悪にかられたディンギル軍の報復の的になるだけだ。

「
！！」

モニター中のイヤホンからは断末魔に瀕した僚艦クルーの悲鳴と叫びが聞こえてくる。クロノは無言で聴き入っていた。

彼の指示で艦隊内音声通信を録音している通信オペレーターは聞いていられなくなったか、俯き、インカムに添えた手を震わせている。

「
」

クロノの心中は怒りを通り越して冷え冷えとしていた。

自宅がある海鳴で買い求めた“平家物語”の冒頭の一文が思い浮かぶ。

永久不変の物などあり得ない。それが大宇宙の真理。
それは管理局も例外ではない。

4割の艦が失われるか大破した頃、

「本隊、ディンギル星首都上空に転移！」

ようやく『ルスラン』以下の本隊が動いたようだ。

『クラウドディア』ブリッジ内にホツとした雰囲気漂い始めたが、それもつかの間。

「ディンギル首都方向から超高エネルギー反応！」
「何！？」

クロノが我が耳を疑った時、メインスクリーンに青い光が閃き、急速に広がった。

首都上空には本隊がいる。

それ目掛けて撃ったというのか！？

「本隊はどうなっている！？」

「一帯に極めて高いエネルギー反応！計測できません！」

デインギルはこちらの戦略を看破していたのか？

「解析急げ！」

本隊がやられてしまえば作戦の大前提が消滅する。

一刻も早く正確な状況を掴んで手を打たなければ、我々は犬死にだ！

その思いは旗艦『レゾリューション』も同じだった。

「本隊の反応はまだ確認できないのか！？」

「まだ出ません！」

第2艦隊司令官を兼ねる艦長のレックス・アキノ少将は焦慮していた。

強硬派／拡大派に属する彼は、本部高官と総司令官からは、多少の被害は無視しても構わぬと言われていたが、もう過半数の戦力を失ったも同然だ。

世界拡張に消極な連中のみならず、同志の艦も続々と戦闘力を奪われ、スペースデブリと化している。

これで本隊がやられてしまったら、最早撤退しかないのだ。

「『コルディア』シグナルロスト！」

「おのれ」

また同志の艦が失われた。

「提督、戦力の67%が失われました」

観測オペレーターが強張った表情を向ける。

彼女だけではなく、他のクルーが向ける表情も大同小異。

こんなに犠牲を出した

もう撤退すべきだ。

私達はこんな所で死にたくない。

「本隊との通信はまだか!？」

「まだ繋がりません」

本隊は全滅したのではないか？

我々はまんまとディングルの術中に嵌まったのではないのか？

そんな予感がアキノの脳裏をよぎった直後。決定的な情報が齎された。

「本隊、全艦シグナルロストですっ!!」

観測員が涙声で伝えてきた。

「間違いないのか？」

「僚艦からも同様の報告が入っています」

「」

「提督」

唇を噛むアキノの前に、副長のリサ・クングスホルム二等海佐が立った。

「作戦は完全に失敗です。一刻も早く撤退を！」

本隊の全滅。作戦失敗である以上、ここに留まることはただの無駄死に過ぎず、面子など何の意味もない。

（あの女狐達の言う通りだったか）

非常に不愉快だが、リンディ・ハラウンやレティ・ロウランが正しかったと認めざるを得ない。

「残存全艦、直ちに空間転移でここを離脱せよ。座標は各艦に一任。幸運を祈る！」

統一した座標を計算する時間すら惜しいと判断したアキノは、残存艦に自由転移を命じ、続いて本局への打電を命じる。

「我が艦隊はディンギル帝国軍の罠に嵌まり、旗艦以下8割以上の戦力を喪失し全滅に瀕す。

これより残存艦は全て撤退すると打電しろ。添削は要らん」

「わかりました」

通信主任はコンソールに向き直り、手早く通信文を作成して本局に向けて送信したが、その直後、右舷と直上からの十字砲火が『レゾリューション』のブリッジから機関部を直撃。同艦は大火球と化して消滅した。

第206話『制裁艦隊VSディンギル?』（後書き）

冴子

「連続投下とは久しぶりだな。パー作者の癖に」

雪菜、熱爛の準備をしながら

「完全に躁状態ですね」

ティアナ

「マジでアホ作者の反動が怖いわ」

なのは

「あの 私の出番は?」

冴子

「ここの主役の私ですら出番がないのに、モブキャラに成り下がった魔王に出番が回ってくるわけなかるう?」

「」

目のハイライトが消えたなのは冴子にレイジングハートを向けようとしたが、掌には何も無い。

「レイジングハート?」

ティアナ

「雪菜、あんた何て命知らずな事してんのおおお!？」

雪菜

「だいぶ消耗しているようでしたので」

引き攣ったティアナの視線の先には、熱燗酒に身を沈めたレイジン
グハートとピュアハートがいた。

『どうかな？酒加減は』

『Excellent！バルディッシュの気持ちが変わりました。
確かにこれは気持ちが良い！』

ティアナ

「あんだ達も何やってんのオオオ！　なのはさん、現実逃避しないで下さいイイ！！」

第207話『敗走クラウディア』（前書き）

クロノが奮闘します。

第207話『敗走クラウディア』

時空管理局本局

デインギル軍と戦闘に入るとの連絡が入ってからきつちり30分後、凶報が飛び込んで来た。

本隊は全滅。陽動役の第2部隊も大半を失い、残るは僅か2割というのだ。

報せを受けた“海”の高官達は蒼白になって立ち尽くす。

「どういうことだ、もう一度確認しろ！」

「総旗艦『ルスラン』に通信が繋がりません！」

「『レゾリューション』応答願います！ 応答して下さい！！！」

「呼び出し続ける、他の艦もだ！」

オペレーターは懸命に各艦に呼び掛けるが、応答してくる艦はごく僅かだ。既にやられてしまったのか、撤退することで精一杯なのか。せめて後者であってほしいのだが。

そしてその報せは瞬く間に本局中に広がった。

「
！」

捜査の打ち合わせをしていたフェイト、シャリオ、ティアナは蒼白になり、フェイトは棒立ちになったまま、しばらく動かなかった。

リンディ・ハラOWN総務統括官は親友であるレティ・ロウラン人事統括官と打ち合わせ中だった。

彼女も第一報を聞かや、一瞬気が遠くなりかかったが、すぐに気を取り直す。

しかし、様子を見ていたレティは打ち合わせを中止し、リンディに一休みするようお願い渡すと、足早で自室に戻った。

クロノが幼い頃、次元航行艦の艦長をしていた夫クライドを不慮の事故で失い、今度は息子の安否も危なくなったリンディの心中を、レティはよく知っていた。

一方、本局詰めのテレビ局や新聞、通信社等の記者は、行き交う局員の顔色が急に変わったのを見て取り、色めき立った。

編集部とやりとりする者、知り合いの局員を見つけて駆け寄る者等、思い思いのやり方で情報収集にかかるのだ。

「明らかに怪しいな」

「ああ、何か大事なのは間違いないな」

日頃は競合関係にある記者同士が顔を突き合わせてはひそひそ話し込んだ。

彼らは知り合いの局員を見つけると、何があつたのか問い質すが、局員の口は固く、あるいはうまくかわされてしまうのだ。

苛立つ彼らの連名で、記者会見要請文が本局報道部に提出されたのはそれから間もなくのことだった。

クラウドディア、ブリッジ

「旗艦から撤退命令です！自由転移で離脱せよ――！」

「わかった。第8海上支部に向かう。各艦にも伝達してくれ」

クロノは指揮下にある『ラットバルド』以下3隻の艦にも同様の指示を下すが、クルーが疑問を呈した。

「本局には戻らないんですか!？」

『クラウドディア』以下、クロノが率いる4隻は皆本局に艦籍があるから、当然本局に戻るのが筋だが。

「本局はディングルに見張られている可能性がある。向こうの手に落ちた『ネストル』が潜んでいるかも知れないからな。一旦第8支部に寄港して様子を見る。本局にその旨も伝えるんだ」
「わかりました」

クロノの指示を受け、クルーは空間転移の準備を急ぐが、ディングル艦隊のスピードはそれを上回り、『クラウドディア』の周囲の艦からも火の手が上がり、その衝撃波は周囲の艦を揺さぶった。

「『カルマン』『タウロス』被弾!！」

すぐ近くで空間転移の準備に入っていたXV級『カルマン』に砲火が突き刺さり、中央部から火柱が上がった次の瞬間、大爆発の閃光と共に艦が両断。続け様の爆発でスペースデブリと化していく。

もう1隻のXV級『タウロス』も数発被弾し、ブリッジ付近に生じた破口から、海の制服姿の男女が次々と虚空に吐き出されていったかと思うと、第2波の砲撃で艦体をへし折られた。

凶報はさらに続く。

「旗艦『レゾリューション』、反応消失しましたっ!」

撤退命令を出してから3分も経たずして旗艦もやられてしまった。そしてまた1隻、僚艦が宇宙の塵と化す。

その様を直視してしまったブリッジクルーから悲鳴が上がり、泣き出す女性クルーも出始めたが、

「うろたえるなっ!!」

艦長席で仁王立ちになったクロノの大喝が飛んだ。

「生還したら好きなだけ泣け!今は生き延びる事が最優先だ!手すきの者は何かに掴まるかシートベルトを確認するんだ。」

ルキノ、転移までの時間は!？」

「あ、あと1分20秒です!」

普段の冷静さをかなぐり捨てた鬼の形相で指示を下すクロノに、ルキノ・リリエ副操舵士が気圧されながらも応えた。

「わかった。残り30秒でカウントダウン開始だ」

クロノはそれだけを指示すると、いつもの表情に戻って席についた。

(我々管理局は、こんな経験は初めてに等しいからな。泣き出したくなるのも無理もないか)

本音を言えばクロノだって怖いが、艦長たる彼が諦めては助かる命も助からない。

何より、艦長自身が恐慌に陥るのは艦とクルーの命を縮める事に等しい。

（あの人達は、こんな戦いを何度もしてきたのか？）

ふと、モニターを通して何度か会い、後には直接会って意見を交わした地球防衛軍の古代 守や嶋津冴子を思い出した。

彼らは圧倒的に優勢なガミラスやガトランチス艦隊相手に一步も退かず、敗北にもめげることなく戦い抜いて生き延びてきた。

そうだ、どんな相手でも臆してはいけない。攻めの姿勢こそが道を開く。

「1分前です！」

「総員対シヨック防御！」

ルキノがコンソールを叩きながら告げ、続いてクロノが衝撃に備えるよう指示を出したが、その次の瞬間、スクリーンに閃光が走り、衝撃が『クラウディア』を襲った。

「被害確認、急げっ！！」

「本艦には被害ありません 被弾したのは『ラットバルド』です

！！」

「何！？」

愕然としたクロノの目の前には、炎に包まれ針路を外れていく『ラットバルド』の無残な艦影があった。

「くっ、通信は繋がるか！？」

「音声だけです、スール艦長に繋がりました」

通信士はコンソールを叩いてクロノに回線を繋ぐ。

「スール艦長、状況を！」

クロノの呼び掛けに、ややあつて雑音混じりながらスールの声が返ってきた。

『ブリッジ近くに直撃弾。それと、生活ブロックまで撃ち抜かれました。艦内各所で 火災発生。ブリッジクルーは 私以外ダメになりました』

「
」
ブリッジクルー全滅の報に、『クラウドディア』ブリッジは一瞬静まり返る。

そしてスールの声も苦しげだ。重傷を負ったであろう事は容易に想像できた。

『ブリッジは全滅しましたが、艦内にはまだ生存者がいます。魔力炉はまだ稼働しますから、こちらは予定通り転移します。』クラウドディア』も予定通り行動して下さい』

「
」

クロノは立ったまま俯き、唇を噛んで右の拳を握る。

『クロノ。私はもう助からない。しかし、君は必ず生きて帰らないさ。』

そして、こんな事を繰り返すことがないよう、管理局を頼む

「
」

スールの口調は、部下のそれから、“アバンおじさん”のそれに変

わり、言い終わるとともに回線は閉じられた。

「 30秒前です 」

カウントダウンを続けるルキノの声も震えている。

クロノは僅かな間俯いていたが、顔を上げるや『ラットバルド』に向けて拳手の礼をとり、再び指示を下した。

「 本艦は予定通り転移する。予想外の衝撃があるかも知れん。何かに掴まっている!! 」

「 10 , 9 , 8 ... 」

その時、艦が揺さぶられた。

「 右舷に被弾! 」

「 人的被害なし! 第17から24区画を閉鎖! 」

「 転移用意! 」

この期に及んでは、多少の被害に右往左往してはられない。

「 転移! 」

右舷艦側から煙を引きながら、『クラウドディア』と僚艦『メリマック』『クラモント』は次元空間へ転移していった。

「 そうだ。それでいい 」

コンソールに半ば突っ伏しながら、改級艦『ラットバルド』艦長、アバン・スールは『クラウドディア』の転移を見届けて微笑した。

大きな破片で腹を裂かれた自分はもう助からない。

しかし、艦内には僅かながらも生存者がいる。

艦長として、最後までベストを尽くさなければならぬ。

出血多量のため意識が混濁し始め、指を動かすのも覚束ない。

「くっ」

機能を停止し始めている脳と震える指を駆使し、何とか座標を入力したスールにもう力は残されておらず、床に倒れ伏す。

「艦長、やっとそちらに伺えます」

スールが最期に口にした“艦長”は、果たして誰のことだったのか？

第207話『敗走クラウディア』（後書き）

【退職したら何をしますか？】

なのは

「地球かミッドで余生を送ります」

はやて

「皆で大衆食堂でもしよかなあ…」

フエイト

「孤児院を開いてるかなあ…」

J・S

「ふふふ…。君達是新・最高評議会として老醜を晒すのがお似合いさ」

ティアナ

（全否定できないわ…）

嶋津冴子

「てんさん天蚕の飼育と繁殖」

真田志郎

「小さな町工場で子供達のためになる発明」

古代 進

「世界中に木を植える」

雪菜

「皆さん、大真面目ですね。特に艦長は」

冴子

「私はいつでも真面目だが？」

雪菜・真田

「嘘ですね（だな）」

冴子

「orz」

リリカルトリオ（なのは・フェイト・はやて）

「天蚕って何ですか？」

冴子

「これさ」

親指大の緑色の芋虫を見せる。

リリカルトリオ

「キヤー（にやあああ！！）」

冴子

「ふむ。娘っ子達には刺激が強過ぎたか。

しかし、見てくれはともかく、家蚕カイコよりいいシルクがとれるんだぞ
（本当です）

サーシャ

「20歳じゃ、とうに“娘”じゃないわよね？」

第208話『激震?』（前書き）

何とか離脱したクロノ達が向かった先は
。

第208話『激震?』

第17管理世界『セピック』

一口に管理世界といっても、ミッドチルダやヴァイゼンといった高度な文明世界もあれば、このセピックのように人口密度が低く、原生林や野生動物が広く棲息する世界もあり、自然環境保護や希少な動植物を密猟・密採取から守るために、時空管理局は自然保護官を常駐させている。

また、外部世界との出入りは原則として定期の次元貨客船が管理局の艦船に限られており、それも1回1隻と限られている。それゆえ、一度に3隻もの大型艦が“停泊”し、しかも3隻とも損傷しているのは極めて異常な光景だった。

『クラウディア』ブリッジ

「提督、清水タンクの応急修理が終わりました。

『メリマック』『クラーモント』も作業完了です」

「わかった。物資移送を始めてくれ」

「はい!」

通信主任に地上への連絡を指示したクロノは、ふうと息をつく。

デインギル武力制裁作戦は、薺蛇どころかとんでもない猛毒蛇に一方的に噛み殺される有様。

総戦力の8割以上を失った挙げ句、苛烈な追撃を受けながらの撤退で、亡父と母、そして自分の補佐役だった老練の艦乗リアバン・スールと『ラットバルド』を失い、『クラウディア』『メリマック』

『クラーモント』も少なからぬ損傷を被った。

幸いにも殉職・重傷者はいなかったが、清水タンクや食糧庫が中々大破してしまった。

食糧は艦同士で融通できるが、水の欠乏は乗組員の士気に悪影響を与えかねないと判断したクロノは、比較的近在にあった『セピック』に立ち寄って応急修理と水、食糧の補給を要請することとしたのだ。

『セピック』の地上本部長であるエリザベート・ボルジツヒが母リンドイの友人という個人的事情もあったが、エリザベートの快諾と応急修理の完了がクロノをようやくひと安心させた。

転送ポートによる物資移送・搬入作業が始まるや、クロノは副長のロベルト二佐から、休憩するよう些か強く意見具申された。

艦乗りとしてはクロノよりキャリアが長い彼からの進言であるため、それを受け入れて艦長室に引き揚げた。

「
」

とはいえ、一人きりになると、スールの最期の声が脳裏にフラッシュユバツクし、彼と『ラットバルド』を救えなかった事実打ちのめされる。

せめて、艦と生存者はどこかの管理世界か拠点近くに転移していてくれれば。
。

スールは最期に、こちらにも転移すると明言した。

『ラットバルド』が生き長らえている可能性はあるのだ。

クロノは、それを信じる事で自分を奮い起こすことにした。
。

その時、ブリッジから通信が入った。

「お休みのところ申し訳ありません。乗艦してきたエリオ・モンデイアル二士とキャロ・ル・ルシエ二士が面会を申し入れておりますが、どうなさいますか？」

「大丈夫だ。会おう、こちらに通してくれ」

義妹の被保護者であるあの2人がここに赴任していたことをすっかり忘れていた事に、思わず苦笑した。

確か12歳になっているんだっとな。
2人とも、少しは背が伸びただろうか？

時空管理局本局

次元空間に浮く巨大コロニーである本局は、過去に例を見ない沈鬱な空気に包まれていた。

管理局に敵対する専制国家であるディンギル帝国を管理世界に編入させる一貫として、強い反対を押し切って実施した武力制裁作戦が、ディンギルを降伏させるどころか、一方的な虐殺同然の戦闘で投入した艦船307隻の内、8割以上を失った上、撤退に入った艦船も苛烈な追撃に遭ったらしく、本局からの呼び掛けに応答があった艦は未だ30隻に満たない。

しかも大半が少なからぬダメージを受け、中には総員退艦に追い込まれて放棄された艦も複数出ていた。

「これでは次元世界拡張どころか現行管理世界の治安維持すら覚束

ないぞ！」

「フネはいずれ造り直せるが、乗組員はすぐには補充できんぞ！」

「事情が事情だ！陸から人員を融通するしかなかろう」

「そんな事ができるんですか！？ 陸はおるか、各世界も反対するに決まっている！」

「再建はともかく、どのように報道発表するんだ？ 真実を発表すれば人心の動揺は免れないぞ」

「かと言って、これだけの夥しい犠牲だ。隠したところでいずればれるぞ。」

そうなつたら管理局は本当に崩壊するぞ！」

「」

実りのない激論を交わす高官達の傍らで、管理局理事官でもある聖王教会騎士のカリム・グラシアも憂鬱さを隠せずにはいた。

これだけ大量の殉職者が出た以上、聖王教会にも騎士の派遣等、管理局から協力を要請されよう。

それ自体は構わないのだが、問題は、どれだけの規模になるのかと、聖王教会内部に、過激な主張をする者が出てきていることだ。

レアスキル“プロフェーテン・シュリフテン”を元に、かの機動六課創設に協力し、JS事件の短期鎮圧に貢献したことで教会とカリムの存在感は増した。

それ自体はいい。しかし、彼女が警戒するのは古きベルカの復興を主張する一派の存在だ。

今回の大敗は、管理局衰退の始まりとなる可能性がある。

それを機に、かつて消え去ったベルカ王国を再興し、管理局にとって代わるべきだと主張する者も出てきた。

しかも、象徴となるべき“聖王陛下”も存在する。管理局士官の養

女としてだが。

まあ、陛下こと高町ヴィヴィオ自身が望まない道を強制されれば、母親たるエースオブエースや一騎当千なその友人達が絶対許さないだろうが、彼らの動向にも目を光らせるべきだろう。

カリムの思考はそこまでだった。

「帰還する艦船を確認！」

XV級『エクウス』『ベレンガリア』『セランディア』『レディア』です！」

いずれも損傷していますが、航行に支障ありません！続いて――

オペレーターが帰還しつつある残存艦の艦名を読み上げていく。

その艦名を耳にしてホツとした表情になる者、不安を隠せずにいる者と様々だったが、次の瞬間、蒼白になって立ち竦んだ。

「XV級『フライシャー』から緊急入電！！『ネストルの襲撃を受けている。来援を乞う』！以後応答ありません」

「XV級『ヴィクトリアス』からも入電！『ネストル』と交戦中！こちらも回線が切断されました！」「くそ！伏兵か――」

怒り混じりの呪詛が響くが、件の空域は本局から2時間以上を要する上、『ネストル』は火力、速力とも強化されているらしく、

「『ネストル』、急速離脱した模様です――」

あっという間に4隻に甚大なダメージを与えて遁走して行った。どうみても追撃は間に合わない。

「本局を前に4隻か」

佐官の1人が悔しげに呟く。他の者も悔しさと憤怒を隠さなかったが、ほどなく更なる災厄が起きた。

ディンギル星、帝国大總統府

「父上、残存敵艦の掃討は完了しました」

「ん。お前は直ちにこちらに出仕せよ。緊急国防会議を行う」
「はっ！！」

艦隊司令官たる長男、ルガール・ド・ザールの報告を受け終えたルガール大神官大總統は、後継者たる息子に至急の出仕を命じて通信を閉じる。

「」

ルガールはしばし沈思黙考する。

時空管理局の侵攻部隊は完膚なきまでに叩きのめした。

彼らにはもはや管理世界の治安維持に最低限必要な戦力しかなく、暫くこちらに侵攻してくる事はできないだろう。

だが、それでいい。

我が国は鎖国体制であり、国防軍も基本的には国土防衛に適した編成と戦力だ。こちらから数多ある管理世界とやりに手を出していは出血戦を強いられることになりかねない。

管理局は、ハード面はともかく、人的絶対数では圧倒的だ。

万一、被害を度外視した総力戦で来られれば、こちらは大流血だ。

だからこそ、管理世界、つまり有人惑星には手を出していない。

こちらへちよっかいを出す意欲と戦力を失わせれば、今回の戦闘の目的は果たしたようなものだ。

「さて、どうあしらったものかな？」

古来、戦争は始めるより終わらせる方が難しい。

大敗を喫した管理局がどう出てくるかが問題だ。

第208話『激震?』（後書き）

ティアナ

「嶋津艦長達、どうしちゃったの?」

高町雪菜

「当分出番がないのでシエスタ中です」

なのは・フェイト

「あ、あははは」

?????

「ふむ、私が休んでいる間にすっかりだれ切ったようだな、こいつらは」

フェイト

「あの人は？」

雪菜

「艦長達が恐れる鬼教官殿です。この後の惨状は想像つきますので、後はお任せしましょう」

なのは・フェイト・ティアナ

「そ、そうだね（そうね）（^ - ^）」

サーシャ

「雪菜ちゃん、鬼ね」

そう言いつつ、父とオジサマとオバサマに合掌すると、さっさとそ

の場を立ち去ったのである。

第209話『激震?』（前書き）

大神官猊下にして大総統閣下の真骨頂です。
。

第209話『激震?』

“百里を行く時は九十九里を以って半ばとせよ”

第97管理外世界の中・近世期、250年以上に及ぶ長期世襲政治体制を始めた覇者の言葉だというが、今、本局に向かっていた管理局の敗残艦に必要なだったのは、まさに己の足元に対する注意力である。

本局の中央通信センターのメインスクリーンの中の光景は、凡そ信じ難いものだった。

帰還する残存艦の第1陣が、本局までにあと20分を切った空間にさしかかった時、先頭を進むXV級『セランディア』の左舷艦腹で続け様に3度の爆発が発生した。

『セランディア』は左舷から火を噴き、速度を落しながらも針路を維持したが、それもつかの間のこと。さらなる悪夢が待ち構えていた。

速度を落とした『セランディア』と後続の『ベレンガリア』の左右から突然数本の煙の筋が伸びたかと思うと、両艦の横腹に文字通り突き刺さったのである。

『がっ　ぎゃあああっ!!』

ミサイルらしき物は命中してもすぐには爆発しなかった。

不発かと思った次の瞬間、通信コンソールのスピーカーから苦悶の声や絶叫が流れ、そして途絶えた。

「どうしました!?!『ベレンガリア』応答を!」

「『セランディア』 応答して下さいっ！」

オペレーターが焦って呼び掛けるが、応答はなく、代わりに本部に詰めていた局員の悲鳴が聞こえてきた。

「ああっ!？」

悲鳴と同時にスクリーンが閃光で満たされる。

『ベレンガリア』『セランディア』に2度目の爆発が発生したかと思うと艦体が2つに割れて爆散してしまったのだ。

凶事はさらに続き、後続していた『エクウス』『レディア』からも爆発発生 of 急報が飛び込んだ。

「状況は!？どうなっている！」

「『エクウス』『レディア』ともに航行は可能です！」

「さっきのミサイルは？発射されたのか!？」

「その形跡はありません！」

「一旦入港は中止!Sガジェットを出せ!！」

次元航行副本部長が発進命令を出したSガジェットとは、かのスカリエッティが開発し、聖王のゆりかごに搭載していた宇宙空間戦闘用のガジェットドローンX型をベースに、次元航行艦の被害を憂慮した管理局次元航行部が改設計した空間戦闘用ガジェットである。先行量産機が本局に配属されたばかりで、運用試験の後、拠点配備型と艦載機型を量産する予定になっているのだが、目の前でまたも艦船が失われたこともあり、これ以上の被害を防ぐために罔として発進させざるを得なかったのだ。

この光景は別室のフェイト達も目に見ていた。

「これは 地球で言うところの機雷だ」

「キライ、ですか？」

「第97管理外世界で普及した、対水上艦船や潜水艦用兵器だよ。

敵国の港や海峡、沿岸に仕掛けて、艦船を攻撃するんだ。様々な仕掛けがなされていて、とても厄介な兵器なんだ。

でも、あんなミサイルまで用意したなんて」

「凄くム力つきますけど、敵に心理的ダメージを与える点ではすごく有効ですね」

唇を噛むフェイトに対し、ティアナは怒りを隠さぬまま吐き捨てた。

もうすぐ母港というところで艦もろとも次元空間の塵と化した局員の無念と、その家族・同僚の悲憤を思うと、ルガールの鉄面皮に、魔王…もとい高町なのは直伝のスターライト・ブレイカーを撃ち込みたい衝動にかられる。

しかし同時に、実に有効な心理戦であることにもティアナは気づいていた。

（どうしたら ？ 管理局はしばらく積極的な行動には出られない。もし、あのルガルがガトランチスのズオーダーみたいな人物だったら、間違いなく報復戦を仕掛けてくる）

ルガルは、自国民に“時空管理局は侵略者”だと喧伝しているだろう。

そんなことはないと反論したいが、こちらの艦『アストラ』が、デインギルの貨物船に高圧的に接し、軍を呼ばれてしまったのがそもそのきっかけだ。

（この敗戦で“海”の意識が変わらないと、管理局は外から攻められ、内から見離されて崩壊してしまう）

以後、フェイト達は長年にわたり管理局改革に奔走し、結果として自らその終焉を見取ることになるが、それはかなり先の事。

管理世界『セピック』衛星軌道上、『クラウドニア』

「そんなにやられてしまったんですか!？」

「

艦長執務室でクロノから“事”の顛末を聞かされたエリオ・モンデイアルは驚きの声を上げ、キャロ・ル・ルシエは絶句してしまった。

乗組員に案内されて艦長室に通された2人は、憔悴しきったクロノに内心で驚き、艦の傷つき様と合わせて、かなり厳しい戦闘だったことは想像できたが、参加した艦船と局員の8割乃至9割がものの1時間で失われた惨敗とまでは思い至らなかった。

さらに、クロノとリンディを長年支えてきたアバン・スールと『ラットバルド』も行方不明になったと聞き、肅然とした。

「管理局史上最悪の惨敗だな。あのJS事件も、今回に比べれば些細な事でしかなかったと思うよ」

自嘲気味に語るクロノに、エリオ・キャロは返す言葉が見つからない。

「それじゃ、管理局はこれからどうなるんですか？」

キャロが絞り出すような声で問う。

「海の戦力は7割を切ってしまったからな。暫くは今の管理世界の治安維持がやっとだろう。

艦船はともかく、失われた人材は」

「」

艦船だけならいずれは補充できる。

しかし、艦もろとも失われた2000を超える人材は数年では補充できない。

これまでなら各世界の地上部隊から引き抜く事もできたが、慢性人材不足の管理局だ。大量に陸から引き抜こうとすれば、各管理世界政府も黙ってはいないだろう。

各管理世界政府とすれば、これ以上地上部隊の局員を引き抜かれては自分達の足元に火がつく。

そんなことを許すほど寛容ではあるまい。

「」

クロノは俯き気味の2人を見遣った。

各艦にはこの2人のような年端もいかなない魔導師も乗り組んでいた。幸いにも『クラウドイア』『メリマック』『クラーモント』は助かったが、行方不明の『ラットバルド』や失われた艦に乗り組んでいた若い、否、幼い魔導師は。

（遺族から石を投げられる事は覚悟しないとな）

理由はどうあれ、未来ある子供達の未来を断ち切ってしまったのだ。
この責めは、まず自分達高位にある者が背負わなければいけない。

クロノは当面やるべきことに思いを馳せなければならなかった。

第209話『激震?』（後書き）

雪菜

「艦長、いつまでもバテてないで起きて下さい」

サーシャ

「もう、お父様も真田のおじ様もだらしないわよ。いつまで垂れるつもりなの!？」

冴子

「まさか鬼竜が出てくるとは、全く予想せなんだ」

守

「正直、なまってたな」

真田

「そうだな」

ティアナ

「なまってたって　六課の教導メニューの3倍はあったわよ。さっきの」

フェイト

「うん。あそこまでやらないと戦い抜けなかったんだろうね」

はやて

「なまってたと言いながら、30過ぎた身でしつかり全メニューをこなすとは　宇宙戦士恐るべしやな」

冴子

「乙女諸君。女の20代はな、あつと言つ間に過ぎるぞ」

真田

「戦いに明け暮れた結果がこれ（嶋津）だからな」

フェイト・なのは・はやて・ティアナ

「はあ」

冴子

「お前さん達、断言してもいいが、今のままじゃ私と同じ運命だぞ？」

フェイト・なのは・はやて・ティアナ

（それは凄く嫌）

果たせるかな、なのは・フェイト・はやては25にもなって彼氏いない暦〃年齢。

第210話『1度あった事は2度。2度あった事は何度も起きるものだ。b y b y』

いよいよグダグダ

もとい、混迷の第7艦隊と13TFです。

第210話『1度あった事は2度。2度あった事は何度も起きるものだ。by』

地下都市・横須賀区

過去2度の侵略戦争の教訓から、東京首都地域以外での地下都市への避難は迅速に行われ、謎の超大型物体の降下・着陸と同時に発生した謎の空挺兵との戦闘による一般市民の犠牲者は、東京以外では僅かだった。

というより、東京との一切の連絡が断たれてしまったのだ。

正体不明の敵の攻撃は横須賀の防衛軍基地にも及び、恐らくは地球近くに空母を直接ワープさせてきたのか、大型の航空機も攻撃を仕掛けてきた。

爆発によるものか、ズシンズシンという衝撃が地上側から響いてくる。

不気味な震動に、まだ幼い子供の怯えた泣き声が響く。

大半の子供は付き添っていた親に宥められるのだが、親とはぐれてしまった子供はそもいらない。

高町雪菜が付き添っている女兒も、そんな子供の一人だった。

帰宅直後に緊急事態を知った雪菜はすぐさま中島家を訪ね、真理亜夫人と共に子供達の手を引いて地下都市に避難したのだが、途中で迷子になっていた子供も一緒に連れて来てしまったため、一行は4人から6人に増えていた。

「泣き疲れて寝ちゃったようね」

「はい」

先程まで親を求めて泣きじゃくっていた女兒は、今は目元を赤く腫らしながらも寝息を立てていた。

泣き疲れもあるのだが、雪菜が背中をさすりながらヒーリング魔法をかけていたせいもあるが、フェイト・Ｔ・ハラOWN等、時空管理局員が見たら驚きの声を上げるかも知れない。何しろ魔力光も魔法陣も全然見えないのだから。

時空管理局で言うところのインテリジェントデバイスに当たる人格形自律魔法制御媒体“ピュア・ハート”によって制御された雪菜の魔力光は不可視のため、魔法陣も含めて他人の目には見えない。これは亡母の桃香も同様で、魔法文化が公式には存在しないとされる地球で、魔法能力者が平穏に生きるための知恵と方便だ。

高町家では、2代目の“なのは”を皮切りに、魔法を使える者を各代に1人輩出しているのだが、前代の故・桃香によれば、雪菜は特に魔法資質が高く、感情の爆発で魔力が暴発し、周囲に害を齎しかねないと憂慮したが、既に死の病を侵されていた桃香は自ら所持していた“ピュア・ハート”と、夭折した長女・春菜の幼馴染みで、高町家の事情をよく知る嶋津冴子に後事を託したのだ。

《 疲れたか？レディ》

《大丈夫だよ。 私より、この子の方が遥かに辛いんだから》

寝息を立てる女兒に毛布をかけてやりながら、雪菜はピュア・ハートと念話を交わす。

《 攻撃してきたのは暗黒星団帝国とやらだろうか？》

《何とも言えないけど、地球そのものを滅ぼすつもりはないんじゃないかな？》

初めからそのつもりなら、それこそ巨大な波動砲みたいな兵器を撃つてくると思うんだけど》

《む。確かにそうだな》

ガミラスは、寿命が尽きかけている母星に代わる新たな母星を地球にするつもりであつたし、白色彗星帝国は国家首脳陣の保養地としての利用を考えていたらしい。

そして今回の敵も、惑星を破壊するような巨大戦略兵器ではなく、ある意味オーソドックスな降下制圧戦闘を行っている。

つまり、この地球に何らかの利用価値を見出だしている可能性が高い。

だとすれば、地球防衛軍には反撃の可能性があるということだ。

詳しい事は聞かされていないものの、嶋津冴子率いる13TFは太陽系外での任務に就いているようだし、第7艦隊も太陽系外で演習しているらしい。

そして『ヤマト』は所在不明だ。

冴子によれば、白色彗星との戦闘での損傷が予想外に酷かったとのことで、恐らく本格的な修理とバージョンアップを行っていると思像できた。

何しろ、あの真田と最近全く会っていないのだ。

真田のことだ。きっと『ヤマト』を極秘裏に隠匿して工事を進めているに違いない。スターシャとサーシャの世話を焼きながら。

高町雪菜はするように想像していたため、暗黒星団ことデザリアム帝国の占領下でも、絶望で心を折る事はなかった。

シリウス星系

第7艦隊を束ねる戦艦『マルス』艦橋は文字通り騒然としていた。

太陽系内各基地からの通信が突然途絶えたとの第一報が入ったのが約30分前。

一報を受けるや否や、司令官の山南は訓練中止と全艦警戒体制を指示したが、これは一時的に指揮下に入った13TFも同様だった。

第7艦隊の外側にはパトロール艦が展開して警戒に当たっているが、『相模』『伊吹』『水無瀬』『鳥海』の13TFも同様に第7艦隊の先頭（旗艦『マルス』との相対位置）に陣取り、銀河系外周方面の監視に当たっていた。

「
「
「
「

13TFの1艦『鳥海』の艦橋もまた、僚艦同様に緊張した雰囲気

に包まれていた。
普段ならば艦長のフランベルク・棗・シルヴィアが暇を持て余してクルーにちよっかいを出しては邪険にされ、1人orzになるものだが、今回はそんな暇もないようだ。

操舵士席に陣取っている副長のフランベルク・百合・アリアはいっ

つになく静かな姉を見遣り、ホツとする反面、言いようのない不安にかられている。
戦闘中でもボケをかます姉だけに、一旦黙り込むとかえって不気味なのだ。

今頃は旗艦『マルス』の艦隊司令部と各戦隊司令で喧々囂々やっているのだろうが、事が事であるからさして時間は要さないだろう。

その時だった。

「『水無瀬』から緊急電！1時15分の方角にワープアウト反応あり！」

少し突出していた『水無瀬』が空間転移明けの反応をキャッチしたようだ。

「全艦戦闘配備！」

「全砲門、発射管スタンバイできてるね！？」

アリアとシルヴィアが続けざまに指示を下す。

友軍艦船が合流する予定はない。とすれば敵襲の可能性も否定できないのだ。

僚艦も同様らしく、艦隊内通信のやりとりが俄かに忙しくなった。

『相模』

『第1主砲塔、準備完了！』

『左舷対空砲、準備完了しました！』

「隔壁閉鎖、急げよ！」

副長の大村耕作が指示を下す中、艦長の嶋津冴子が入ってきた。

「“お客さん”の身元はまだわからないか？」

艦長席につくや、冴子はワープアウトしてきた何物かの正体を質す。

「確認中です　　今、映像入りました。モニターに出します!!」

パク通信長がキーボードを叩き、『水無瀬』からの映像データをメインモニターに出した。

「これは　　！」

「ひどい　　」

モニターに映し出されたのはかなり大型の宇宙船だが、船体のあちこちには破口が生じ、そこから煙が噴き出している。

「艦長、あれは時空管理局の艦船に似ていませんか　　？」

「ん。三沢、あの船を時空管理局の艦船データと照合しろ！」

「はいっ!!」

観測士席の三沢亜利沙は即座にキーボードを叩いて解析にかかり、数秒後　　、

「艦長、あれは時空管理局の改し級次元航行艦『ラットバルド』です！」

報告した三沢がモニターの映像を拡大してみると、艦体左舷に「1735」の数字が認められた。

更に、フェイト達を迎えに来た時と『マルス』試験航海時に接触した折の『ラットバルド』にも“1735”の数字が描かれていたため、冴子以下のブリッジクルーは思わず唸ってしまったが、この期に及んでは、やるべき事は一つしかない。

「『ラットバルド』艦内搜索と生存者救出を行う。大村、指揮をとれ」

「わかりました！」

本当は自分自身が行きたいとうずうずしているのだが、仮にも一隊を率いる身である。

我が身の“不運”を内心でばやきながら、大村に搜索隊の指揮を委ねると、矢継ぎ早に指示を下していく。

「通信長、我々で対処する旨、山南司令に報告を」

「はっ！」

「『相模』『伊吹』『鳥海』は前進して『水無瀬』に合流する。町田、半速前進！」

「はい！半速前進、宜候！！」

慌ただしい第7艦隊と13TFの前途には、混乱という名の暗雲が垂れ込めつつあった。

第210話『1度あった事は2度。2度あった事は何度も起きるものだ。b y b y』

高町母子&雪菜のキャッチコピー（いい加減です）

？高町なのは：全力全開（全壊）の砲撃魔導師、管理局の白い悪魔、魔王様等々。

なのは

「だから、悪魔でも魔王でもないの！！」

？高町ヴィヴィオ

小さな聖王陛下、次世代型文系格闘魔法少女

ヴィヴィオ

「“陛下”は勘弁してってば」

？高町雪菜

異世界型隠密魔法少女

雪菜

「何分、ファンタジーかオカルト扱いされていますから。

というか、隠密とはどういう意味でしょうか？」

第211話『生き急ぎ』（前書き）

朝鮮（韓国？）版ヤマトというアニメのOPを見ましたが。
どう見ても色褪せた『アンドロメダ』にしか見えませんでした。

第211話『生き急ぎ』

『マルス』艦橋

突然の闖入者に、すわ敵襲かと緊張した第7艦隊だったが、下手人がスクラップ同然に満身創痍の時空管理局の艦船だったことで、また啞然とさせられた。

「よくよく縁があるものですな。時空管理局とは」
「そうだな。それにしても、一体どんな目に遭ったのか」

地球本星の異状に加え、突然現れたスクラップ同然の管理局の艦。以前に『相模』『ヤマト』が遭遇した時は白色彗星帝国軍の残党にやられていたが、今度もそうなのだろうか？

だとすれば、彼らは未だ健在なのかも知れない。
それとも、別の敵にやられたのだろうか。

13TFが生存者搜索と資料収集を行っているが、何とも最悪の夕イミングだ。

「それにしても、あの艦にも子供は乗っているんだろうかな？」

「向こうには向こうの事情があるんでしょうが、我々の認識では、容認できるものではありませんね。」

ともあれ、あの艦の事は13TFに任せましょう」

司令官の山南に艦隊参謀長のモーリーが応じ、スクリーンに映る各戦隊司令官達も頷く。

幸い敵襲ではなく、時空管理局の事情に多少なりとも通じている連中もそばにいるから一任して、対応策をまとめてしまおうということになった。

『相模』艦橋

煙を噴き上げながら漂流する『ラットバルド』 囲むように13TFの4艦は展開し、不測の事態に備えている。

『ラットバルド』には大村率いる『相模』からの搜索隊と篠田巖率いる『水無瀬』の搜索隊が突入し、生存者搜索を行っていた。

『そっちはどうだ？大村』

『ダメですね。皆殺られてます。ブリッジへの通路も完全に潰されてますよ。そちらは？』

『こっちも似たようなものだ。』

倒れている者の大半は皆二十歳台。中には十代半ばにしか見えんのもいる。 全くやりきれんよ。

それはそうと、機関室に近づく程高温になっている。この艦、そう長くは保たんな』

『こちらも似たようなものです。我々も生活エリアの搜索を終えたら撤収します』

『わかった。こちらもぼつぼつ撤収する』

『水無瀬』隊が入った艦後方部の搜索はだいぶ難航しているようだが、大村達が入った艦前方部も似たようなものだ。

ブリッジへの通路は完全に瓦礫で塞がれており、艦首脳陣の搜索は断念せざるを得なかった。

先日知己を得た艦長のアバン・スールらがいるかも知れないと思うと心が痛むが、振り切って居住エリアに向かう。

その時、ズシンと足元が重く震えた。

確かにこれは限界のようだ。

「総員、撤収し……」

『副長、待って下さい。生存者1名確認しました！』

撤収指示を出しかけた大村を、居住エリアに入っていた『相模』クルーが制した。

「……！わかった。その1名を連れてすぐに撤収だ。この艦はもう保たん。急ぐぞ！」

『わかりました！』

程なく、居住エリアから搜索隊員が戻って来たが、生存者らしき人影は見当たらない。

「……おい、生存者は？」

「こっちです」

「！　この子がそうなのか？」

一番体格いいクルーに背負われていたのは、10歳前後と思しき少年だった。

これには大村以下の全員が呆れ顔だったが、ともかく『相模』に移送するのが先だ。

先頭に立って進入口に向かう。

途中で篠田率いる『水無瀬』の搜索隊と合流したが、少年をひと目見た彼らも信じられない表情を浮かべていた。

「……こんな歳で艦船乗り組みとは、優秀な魔導師とやらか？」

「かも知れませんね。しかし、こんな子供まで危険を伴う任務に出すというのは」

「ああ、理解したくはないな」

大村と篠田は揃って頭を横に振ったが、嶋津冴子以下の13TF各艦クルーも反応は概ね同じだった。

「救出した少年は幸い命に別状なく、短期間で回復出来ますので、比較的早く事情を聞けるでしょう」

『わかった。本来ならこちらに収容して事情を聴くところなのだろうが、今は非常時だ。少年のことは君達に任せたいのだが、いいか？』

「わかりました。お任せ下さい」

山南の回答と指示も尤もで、今は地球の危機に対処するのが最優先である。

それに、管理局員への対応なら手慣れた嶋津達『相模』クルーの方が適任だろう。

「搜索隊、帰還しました。『水無瀬』隊も帰還しました」

「『ラットバルド』火災拡大！」

「戦隊全艦、艦首下げ30。半速前進で離脱する！」

搜索隊が離艦して程なく、『ラットバルド』はあちこちの破口から再び煙を噴き始め、次第に炎が混じってきた。

（スール艦長）

冴子は立ち上がって火煙に包まれつつある『ラットバルド』に拳手の礼を送る。

そして程なく、『ラットバルド』は爆発四散して果てた。
その数分後、大村が艦橋に戻ってくる。

「救出した少年ですが、認識票によると、名前はエミール・フ
ランツ・ボルジツヒ。階級は准空尉で年齢は11歳。ミッドチルダ
式の空戦魔導師。血液型はA+です」
「ん」

地球ならばまだ小学生だというのに既に士官とは、あのフエイ
ト・T・ハラウン同様、将来を嘱望されているエリート魔導師な
のだろうが、彼女といい、今回のエミールという少年といい、あま
りに生き急ぎ、あるいは生き急がせ過ぎではないのか？
ましてや、死と隣り合わせの任務に参加させるなど、到底納得でき
るものではない。

込み上げる憤怒を押し殺しながら、冴子は大村を促す。

「容態は？」

「救出した時は意識がはつきりしていました。煤煙を吸っています
が、意識障害は認められませんが、精神面でどの位のダメージがあ
るかはまだわかりません」

「わかった。当面は体調次第か」

目が覚めたらすぐ事情聴取とはいかないかも知れない。それにこち
らも非常事態なのは変わらない。

人情とすれば、早く仲間の元に返してやりたいのだが、ここからで
は例の通信ポッドにアクセスできない。

（気の毒に、火事場の来客になってしまったか）

幸いなのは、山南やモーリーが“話せる”上官であることだろう。

地球の本部には、司令長官はともかく、その下には原則論にこだわる連中が目立ち、喧嘩腰でやり合っているかも知れないのだ。

（　　今から考えても詮ないな。まずは太陽系だ）

「　　残骸は？」

「本艦搬入した分は解析にかかっています。『マルス』にも搬入済みです」「わかった。結果が出たらすぐ報告してくれ」

『ラットバルド』を殺つたのは一体どんな連中なのだろうか。白色彗星帝国軍か、暗黒星団帝国軍か、あるいはガミラス軍か　？。

旗艦『マルス』から、全速で太陽系に向かう旨の指令が来たのは、僅か3分後だった　。

太陽系内、内惑星防衛艦隊旗艦『アレクサン
ドロス』

「第6艦隊との会合点まで20分です！」

「ニューヨーク、ロンドン、北京との通信が途絶しました！」

謎の巨大物体が太陽系に侵入した時、内惑星防衛艦隊と第6艦隊は太陽を挟んだほぼ反対側で各々演習中だったが、急報で急ぎ地球にとって返したのだが、件の物体は増速し、迎撃をものともせず、に東京郊外に着陸した。

その物体は多数の空挺兵をも搭載していたようで、連邦政府や軍施設周辺で熾烈な戦闘が発生中との情報も入っている。

内惑星防衛艦隊司令官のタナリットは、じきに艦隊戦力も地球に接近すると推測。火星と地球圏の中間で第6艦隊や第1自動艦隊と共に迎撃せんと目論んでいた。

各惑星基地に駐留していたり、付近宙域にあつた艦艇や部隊とは連絡がとれていないが、第6艦隊は勿論、第1自動艦隊も異状なく機能している。

自動艦隊は、文字通り無人制御の戦艦と駆逐艦で編成されている。

無人艦ゆえ、有人艦ではありえないような急機動が可能であり、いざとなれば殿軍の捨て石にもなる。

これらの艦の開発自体は白色彗星帝国の来襲前から進められていたが、部隊編成と運用訓練はこの数ヶ月で行われた。

一時難航していた運用訓練が軌道に乗ったたのは、予備役に編入された『ヤマト』から島 大介・徳川太助ら、実戦で鍛えられたメンバーが合流したことが大きい。

彼らの参加で運用試験も軌道に乗り、組織立った艦隊機動もこなせるまでに至った。

現在シリウス星系にいる第7艦隊が戻るまで持ちこたえれば勝機もある。

タナリットはそう考えていた。

「火星北極方向に多数の艦艇がワープアウトしてきました！」

反応は 暗黒星団帝国軍のものですっ！」

「！」

『アレクサンドロス』艦橋に緊張が走った。

やはり、あの帝国が侵略してきたのか

数時間後には否応なしにぶつかることになる。

突然土足で踏み込んできたのは大ガミラス帝国以来だ。
向こうの戦力規模がどのくらいのものかわからないが、

第211話『生き急ぎ』（後書き）

冴子

「しかし、向こう（管理世界）は早婚なのかね？」

雪菜

「と言いますと？」

冴子

「クロノ・ハラオウンは20代半ばなのにもう双子の親父だし、お母さんも、どう見ても40代だろうしな」

雪菜

「クロノさんですか。確かウチの2代目さん（なのは）の旦那さんも同じ名前でしたね」

冴子

「ふむ。向こうの“高町なのは”はどうなのかな」

雪菜

「さあ？でも20歳前で管理局屈指のエースでシングルマザーだと、虫も寄りつかないんじゃないでしょうか？」

冴子

「泣いていいか？」

第212話『海上警備司令・八神はやて』（前書き）

『ヤマト2199』放映／封切に『なのはA's』封切と、来年は何かと賑やかになりそうな予感がしますが。

こちらはデザリアム編とガルマンガミラス・ボラー編をグダグダと進めているんでしょうねえ。

いや、デザリアム編とインターミッションで1年費やしてしまうかも知れません。

第212話『海上警備司令・八神はやて』

デインギル帝国武力制裁作戦が無残な失敗に終わったことで、時空管理局、特に“海”こと次元航行本部は半ば恐慌状態に陥った。

喧々囂々の議論の結果、管理局はほぼ正確な損害を発表した。ごまかしたところでいつまでも隠し通せるものではないし、虚偽発表が露顕すれば、管理世界の人心が完全に離反してしまう可能性が高いからで、どのみち非難されることは不可避なのだから、正確な被害を発表した方が良いとの声が強かったのに加え、伝説の三提督も賛同したからであるが、案の定、各管理世界は激震し戦慄した。

何しろ、参加した艦船の約9割と、2500名超の艦船乗組員と武装隊員が宇宙の塵芥に帰したのだ。

管理局創設以来例を見ない大敗、否、惨敗だ。

管理局側はこれを機にデインギル帝国への敵愾心をも植え付けようと目論み、若干の成果を得たのだが。

「犠牲は避けられないし、作戦の失敗もさることながら、どんな経過を辿ったら9割もの人員と艦船が失われたのか!？」

デインギル帝国軍はそれほど強いのか、管理局の戦術が拙劣だったのか、戦力が脆弱だったのか、全てを公表せよ!」

管理局の発表に納得がいかない遺族やジャーナリスト、さらには管理世界政府までが戦闘経過の詳細発表を要求したり、地元の管理局出先施設に押しかける者も出て、本局報道部や各世界の地上本部は対応に苦慮していた。

しかし、問題はそれだけではない。

失われた戦力の補充と再編をしなければならない。

武力制裁に失敗したから治安が悪くなったというのは許されないのだ。

次元航行本部はスタッフの穴埋めを地上総本部と航空総本部に求めたのだが、

「これ以上人員を割けば、各世界の治安維持すらできなくなる」

「これ以上人員を減らすなら財政支援を削ると管理世界政府から脅された」

等と冷淡な回答しか返ってこない上、スカウトに応じる“陸”の優秀な局員も殆どいなくなっていたのだ。

さらに、各管理世界政府からも、“海”の体制を根本から見直せ。見直さなければ今後の協力を見直すという声上がり始めた。

さらには、

「第197管理外世界の軍事技術を導入するべきだ。

魔法だけで守れる時代でなくなっているのは明らかなんだぞ！」

と主張する世界もあり、何とも混沌たる状況になっていた。

そんな中。

特別捜査官・八神はやては本局の高級士官エリアを歩いていた。

「…それにしても、お話って何なのでしょう？はやてちゃん」

右の肩に座るティンカーベル…もといユニゾンデバイスにして八神

ファミリーの1人たるリインフォース？（ツヴァイ）が顔を傾けながら疑問を呈する。

昨夜、は yet は本局人事統括官のレティ・ロウランから呼び出しを受けており、今朝一番で本局に来ているのだ。

「何やるなあ。可能性としては、一連の事態に関する事やるか。鬼が出るか蛇が出るか。」

「ビリケンさんならええなあ」

「鬼と蛇は絶対嫌ですう」

等とやり合いながら、レティ・ロウラン人事統括官の執務室に向かった。

総務統括官執務室

「何はともあれ、お帰りなさい、クロノ」

「はい。ただいま、母さん」

リンディ・ハラオウンは目尻の涙を拭いながら、一人息子を労った。

「ごめんなさいね、帰還したというのに、本局に缶詰にしてみました」

「9割の局員は缶詰になることすらできないんだ、こうしてこの場にいられるだけでも十分だよ」

「クロノ」

クロノが率いる『クラウドディア』『メリマツク』『クラーモント』

が本局に帰還したのは29時間前。

不運にも『ラットバルド』を失ったとはいえ、部下の8割近くを連

れ帰った戦隊指揮官はクロノしかいなかった。

しかし、クロノは元より、生還した艦船のクルーは、全員が本局や各海上支部の宿舎に缶詰にされ、限られた相手としか接触できない状態が続いている。

リンディが息子に詫びたのは正にそれなのだが。

「『ラットバルド』と、アバンさん達を連れて帰れなかったのは、紛れもなく僕に責任がある。

敗残の指揮官が責任を負うのは当然だし、逃げるつもりは毛頭ないけど、せめてクルー達は早く家族の元へ帰れるよう計らってくれないかな。母さん」

「クロノ、解ったわ。レティも巻き込んで、皆を早く帰宅させるよう手を回すから」

息子は公私混同を何より嫌う性格だから仕方ないが、せめて生還したクルー、特に下士官以下や子供達は1日も早く帰宅させるようにしたい。

憔悴の色を隠せない息子を前に、リンディは密かに決意するのだった。

人事統括官執務室

「ほんまでっか？」

レティ・ロウランから内示を伝えられた八神はやての第一声は間抜けの一語に尽きるが、それを受けたレティの答えも似たようなレベルだった。

「ほんまどすえ」

レティはそこで一息つき、口調を戻す。

「あの惨敗で、管理局の内実は、管理世界の治安維持すら怪しいところまで弱体化してしまった。

責任論はこれからとしても、既存の世界の治安は何としても守らなければならぬ」

レティの言わんとすることはわかる。体制を改めて新たに海上警備本部を創設するというのもわかるのだが。

「おっしゃることはわかります。しかし、私に艦の指揮は」

「そこは優秀なスタッフをつけるわ。それに貴女も、短期間とはいえ『アースラ』を指揮したじゃない」

レティはすかさずモニターを起動させる。

「これは　LS級？」

映し出されたのは、XV級をふた回り小型化したようなシルエットの艦船だ。

大気圏内での運用を主眼に入れて開発され、次元震制御により、大気圏間次元転移が容易になったという。無論、宇宙空間での運用も可能だ。

1番艦『セイバー』が先々月に竣工し、試験航行の後、第2海上支部を拠点に近隣世界の巡航警備に就いているというが。

「来月完成する3番艦『ヴォルフラム』。これを貴女に任せるわ」

機動六課解散から1年。急転する時局は、はやての思いには応えてくれなかったようだ。とにもかくにも、海上警備司令・八神はやての新たな闘いの幕が開いたのである。

第212話『海上警備司令・八神はやて』（後書き）

雪菜

「今度は魔法少年ですか」

冴子

「リリカルなのはじゃ、男キャラの影が薄いからなあ」

雪菜

「エミールという名前はわかりますが、ボルジツヒと言う苗字は？」

冴子

「作者が思い切り趣味に走ったそうだ」

と、ドイツ国鉄の05型蒸気機関車の写真を見せた。

雪菜

「わかりました」

冴子

「日本でも、ボルジツヒ製の蒸気機関車や電気機関車が走ってたんだとさ」

雪菜

「作者さんの頭の中は荒涼たるものですね。頭髮はぼつぼつその気配ですけど」

第213話『会戦直前』（前書き）

種じ 失礼、種を蒔き散らした結果、それをどう発芽させ育成して収穫するか頭を抱える自分がいいますorz

カザン

「愚かな作者は放置して、始めようではないか」

第213話『会戦直前』

火星内沖宙域

「第6艦隊です！」

心なしか安心した声が内惑星防衛艦隊旗艦『アレクサンドロス』艦橋に響く。

内惑星防衛艦隊主力の前に現れたのは、ドレッドノート級26番艦『ザクセン』を旗艦とする第6艦隊と、途中で合流した護衛艦やパトロール艦群を合わせた68隻。

内惑星艦隊と合わせれば100隻を超える中規模艦隊になる。

「敵艦隊との接触想定時間は？」

タナリットが観測士に質す。

「50乃至60分です」

「わかった」

当然ながら、第7艦隊の合流を待っている時間はないようだ。

島 大介らが運用している第1自動艦隊は、こちらに呼応して敵艦隊の後背を断つべく高速で移動している。

（ともかく、敵艦隊を足止めしないと）

最悪、敵艦隊と相討ちになってもいい。奴らを地球圏に近寄らせず、

その間に第7艦隊が戻れば、まずはこちらの勝ちだ。

タナリットの思案はそこで止まった。

「司令、第6艦隊のクリューガー司令から通信です」

「『ザクセン』及び第6艦隊の各戦隊旗艦とデータを接続します！」

両艦隊の統合指揮は内惑星艦隊司令たるタナリットが執る。

そして、旗艦としての情報処理能力も、主砲塔を1基オミットしてアンドロメダ級の設備を取り付けた『アレクサンドロス』の方が格段に優れているのだ。

『第6艦隊、ただ今参上しました。タナリット司令』

「ご苦勞様。些かしんどい事になりますが、頑張りましょう」

『白色彗星戦では、我々はヒヨッコで出番がありませんでしたからな。その分まで暴れてやりますよ』

「この度は貴方の隊が要だ。期待していますよ」

些かというのは気休めでしかない。仮にも敵の本拠に侵攻してくる以上、相応の前線戦力と後方支援力を整えて来ているのが当然で、こちらよりも多勢であると考えるべきだが、指揮官たる者、部下の前で弱気を見せてはならないのだ。

自動艦隊地下本部

照明を落とした司令部に数人の男がいる。

「第6艦隊と内惑星防衛艦隊の合流を確認しました」

「敵艦隊との接触まであと35分です」

「全艦、システム、機関、武装オールグリーンです」

最後に報告したのは、元『ヤマト』機関士の徳川太助。彼の仕事は各艦のハード管理とバックアップだ。

「了解。航行システムにも異常認めず。統一機動とれています」

そして、徳川に続いて報告の声を上げたのが『ヤマト』航海長だった島 大介だ。

58隻に及ぶ自動制御艦の統一制御を一糸乱れぬスムーズさでこなしているのは、正しく島の真骨頂 と言えよう。

熟練の有人艦隊には及ばぬまでも、錬成中の有人艦隊よりはかなりスムーズに無人艦達は動いているのだ。

「『アレクサンドロス』とリンクしました！」

オペレーターが内惑星艦隊旗艦とのデータリンク完了を報告する。理想を言えば、『アレクサンドロス』から直接自動艦隊を運用したいところだが、そこまでのハード、ソフト熟成が間に合わなかったとは言え、ぶつつけ本番で旗艦で運用するよりは、島達のオペレーションの方がベターなのと言っまでもない。

すぐさま、『アレクサンドロス』からデータが送られてくる。

敵艦隊の前面は内惑星艦隊と第6艦隊が厄し、自動艦隊は敵艦隊の後方を遮断して挟撃するというのが、内惑星艦隊の戦術骨子だ。

敵、暗黒星団帝国の一の槍を食い止め、叩きのめしておけば、その間に第7艦隊も戻って来る。

敵の第2撃が来る前に侵入経路を解明して本格的な反攻に移り、暗黒星団帝国軍に決定的ダメージを与えて停戦交渉に舞台を移す。

いかに憎き敵であつても滅ぼしてはならぬ。
敵の滅亡を願うは、侵略者に堕したも同然である。
ガミラス、白色彗星帝国との戦闘で得た教訓なのだが、その後も苦
過ぎる結果が続いたのは周知のとおりであろう。

第7艦隊先鋒、13TF

「地球や各基地とは、まだ連絡がつかないの？」

「申し訳ありません、まだ繋がりません」

「通信長の責任ではないわ。それに、不用意な通信は敵に気取
られかねないからね。あらゆるルートでコンタクトを続けて」

先頭をいく『水無瀬』で、艦長のナーシャ・I・カルチエンコが済
まなそうな通信長を労っていた。

白色彗星帝国戦後に竣工した『水無瀬』は、機関出力の向上に加え、
既存の同型艦よりも探査・通信能力が引き上げられているのだが、
地球や各惑星基地、太陽系内にいるはずの第6艦隊や内惑星防衛艦
隊主力、資源輸送船団との連絡もとれない。

戦艦やパトロール艦はもちろん、巡洋艦の通信システムでも太陽系
からシリウス星系までは、通信しようと思えばできるはずだ。
それが出来ないというのは。

「つ」

最悪の予感が脳裏をよぎるが、すぐに打ち消す。
最悪の事態は予測しておくものだが、それに行動を縛られてはいけ

ない。大規模な通信妨害であるだけかも知れないのだ。
ナーシャは己に喝を入れ、帽子を直して前方を睨んだ。

「艦長、例の少年が意識を取り戻しました」

『相模』艦橋。副通信士が医務室からの連絡を艦長席の嶋津冴子に伝える。

「そうか。様子はどうか？」

「周囲の見慣れぬ光景に驚いていたようですが、水野先生がハラオウン執務官らの事を説明したら落ち着いたとの事です」

過日、遭難しかかったフェイト・Ｔ・ハラオウンらを救助したのが地球防衛軍であることが知れ渡っていたのだろう。
回線が艦長席にリンクされる。

「どうです？少年の様子は」

『バイタル面に異常は見当たらないね。』

ただ、精神的にかなり消耗してる。オートミールを茶碗半分食べさせて寝かしつけたところさ』

「飯が喉に通るなら大丈夫でしょう。もうしばらく様子を見てもらえますか？」

『了解』

こちらは突然尻に火がついたが、管理局も不穏な事態に見舞われているようだ。

気の毒だが、今度ばかりはこちらもどうにもならない。フェイト達に頑張ってもらうしかない。

艦『ガリアデス』

「閣下、全艦集結完了しました」

「ん」

艦隊集結完了を告げた幕僚に、司令官席のカザンは厳しい表情で応える。

「全艦、直ちに地球圏に向けて進撃せよ。太陽系外に出ている敵第7艦隊が戻る前に地球本星を陥とすのだ！」

然る後に“あれ”を探し出して接收する。

政府や軍中枢を押さえただけでは、地球人は膝を折らないだろう。奴らの反抗心を完全に挫くには、“あれ”が我々の手中にあることを見せつけなければならない。

我々は、敵を侮った結果、足を掬われたガトランチスのズオーダー達のような間抜けではないぞ、地球人よ。

ミッドチルダ首都クラナガン、スーパータジアム

7万人の観客を収容できる多目的スタジアムは、普段は様々なスポーツやコンサートで歓声が響き渡るのだが、今日はスタジアム開設以来の異様な雰囲気支配されていた。

飛び交うのは歓声ではなく罵声と泣き声。

「何故、私の娘が死ななければならなかったの!？」

「局員の殉職率が9割以上の理由が、いつまで経っても説明されていないじゃないか、ふざけるな!!」

三提督を含む、壇上の管理局高官は苦渋の色を隠せずにした。

管理局とミッドチルダ政府、クラナガン特別市合同主催の追悼式は、三提督を含む海空陸の管理局高官や政府・市の要人出席の元、厳かに行われていたのだが、その空気を破ったのは、今回の任務で息子と孫娘を失った老婆だ。

「貴方がたは、どこに座っていらっしゃるのですか？」

静かだが、鋭い舌鋒に応えられた高官はいなかった。

三提督を始めとする幾人かの高官は老婆の言わんとしている事を悟り、苦渋に満ちた表情を浮かべたが、一方では不愉快な表情を浮かべた者もいた。

それを見咎めた別の遺族が指弾し始めたのをきっかけに、遺族席から管理局の一連の対応への非難が沸き上がったのである。

「
「
「

それは、スタジアム前の警備本部に詰めている警備担当の地上局員や、上空警戒にあたる航空武装隊員達も感じ取っており、滞空しているシグナム、ヴィータ、高町なのはの3人もまた、憂いを隠せず
にいた。

（スタジアムの中は沸騰しかかっているようだな）

（遺族の怒りはわかるけどよ、このままじゃ式は中止。全員締め出されちまうぞ。それじゃパニックになっちまう）

（誰かが扇動しているという可能性はないのかな　？）

（指名手配のテロリストや要注意人物は入っていないと言っていたが　）

管理局艦船の相次ぐ撃沈事件発生からこのかた、強硬派から穏健派までの反管理局集団が活動を活発化させており、様々な手段で管理局に揺さぶりをかけているのだ。

常識的な言論だけの集団は監視だけで済むが、テロ集団はそうもいかない。

しかし、摘発しようにも逃げ足が早く、なかなか尻尾を掴めないとフェイトも苦り切っていた。

地球と管理局の苦闘は始まったばかり　。

第213話『会戦直前』（後書き）

日本語って、面白いですね。

多機能トイレ 滝のおトイレ

和式三段重 和式散弾銃

アルフォン少尉

「それがどうかしたのかね？」

雪菜

「貴方 確か、公開前の設定ではキーマン少尉でしたよね。ラジオドラマでもそうでしたし」

アルフォン

「雪菜 大人には色々と事情があるのだよ」

雪菜

「私、少女だからわかりません」

なのは

「何か 微妙に腹が立つんだけど」

ヴィヴィオ

「ママ、電柱 じゃなくて殿中だからっ！」

第214話『A magical-boy meets Capt・Saek』

今週末の更新は作者私用により、“多分”ありません。

それはさておき、魔法少年エミールが冴子と対決…もとい、対面します。

内惑星防衛艦隊旗艦『アレクサンドロス』

「敵艦隊接近！大型艦40、中型艦80、小型艦100以上！大型艦の1隻は、『ヤマト』が沈めた艦と同型です！」

「戦艦主砲の有効射程まで、あと15分です！」
「ん」

観測士の報告に、司令官のタナリットは厳しい表情で頷く。

「全艦、全砲門、発射管スタンバイ！艦載機発進準備！」

艦隊に随伴している戦闘空母『葛城』『イーグル』『バイアブランカ』に搭載されているのは全て戦闘機。攻撃機部隊はパイロットの養成が間に合わなかったのだ。

地球艦隊のアキレス腱はまさにそこだった。

戦闘機に搭載する対艦ミサイルは小々中型艦の装甲は貫徹できても、戦艦クラス、それも主要部分の分厚い装甲を貫くのは難しい。従って、敵艦隊の力を削ぐのは艦砲と波動砲に限られる。

敵軍には芋虫形艦上攻撃機が存在することは『ヤマト』『相模』からの報告で明らかだが、芋虫形攻撃機が屠ったガミラス艦はデストロイヤー艦や三段空母で、装甲は堅牢とは言えず、デスラーの旗艦を含む戦闘空母や戦艦（シュルツ艦の同系艦）は損傷しながらも全て持ちこたえたという。

ガミラス戦艦より『ヤマト』やド級主力戦艦の方が概ね防御力が高い以上、一撃必殺の威力とは言い難いようだ。

もつとも、巡洋艦以下の艦艇にとっては要警戒に違いないのだが。

一方、艦船は円盤型の艦体に艦橋楼と砲塔をつけた形状で、小型艦はとにかく機動性が高い。その代わり装甲が薄くてパルスレーザーでも火だるまになってしまった。

一方で戦艦、特に旗艦級の大型戦艦はとにかく重防御で、『ヤマト』の主砲でもヴァイダルパートを撃ち抜けなかった。

しかし、他の艦はどつき合えば倒せるため、旗艦以外の敵艦を潰して手足をもうでしまえば、包囲撃沈するなり敗走させれば良い、とタナリットやクリューガーは踏んでいた。

何より、目の前の敵艦隊はイスカンドルに押し寄せた艦と同形艦で編成されていた。

つまり、波動砲みたいな殲滅兵器を搭載している可能性は低いであろうということだ。

無論、推測に過ぎないから用心するに越したことはない。

その時。

「敵艦隊より艦載機発進！100機以上ですっ！！」

観測士が報告する。直ぐさまタナリットは決断した。

航空攻撃でこちらの戦力を削ぐ腹だろう。

無論応戦だ。

「よし、コスモタイガー全機発進！迎撃せよ！！」

『葛城』『ラングレー』『イーグル』からコスモタイガーが次々と発艦し、4機ずつのロツテ編隊を組んで敵編隊に向かっていった。

『相模』 医務室

「 やっぱり、現実なんだな 」

時空管理局准空尉・エミール・F・ボルジツヒは改めて周囲を見渡し、自分の存在する所が未知の場である事を再認識するのだった。

「 おい、早くこれに入れ！ 」

「 え ？ で、でも 」

「 え？ じゃねえ！ さつさと入れ！ 」

奴らは次元犯罪者組織なんかとは訳が違うんだよ！ 」

『ラットバルド』で中年のクルーから怒鳴りつけられたかと思うと、文字通り尻を蹴飛ばされるかのように強制睡眠力プセルに入れられたが、その直後、凄まじい衝撃に見舞われたかと思うとそのまま意識が途切れた。

再び目が覚めた時、視界に入ったのは見知らぬ機材と見慣れぬ白衣の女性。

そこで初めて、ここが“地球防衛軍”の艦船で、フエイト・T・ハラウン執務官達を助けた戦艦『相模』であると知らされた。

そこで『ラットバルド』で助かったのは自分だけだと聞かされた時は流石に落ち込み、1人になった時は涙が出て仕方がなかったが、泣くだけ泣くと落ち着いたのも事実だった。

「くよくよしても仕方ないな。デインギルに捕まるよりは遙かにま

しなんだから」

デインギルの捕虜になれば拷問の末に虐殺されかねない。しかし、この『相模』という艦のクルーはあのハラウン執務官達を助けてくれたのだ。

現に自分も傷の治療をしてもらい、しっかりしたベッドに温かい食事が用意されていた。これ以上を望むのは贅沢だろう。

等と考えていた時、ドアがノックされ、ミズノという女性医務官と黒いジャケットを着た、高級士官と思しき長身の女性が入ってきた。かなりの美人だが、右の頬を走る傷が目立つ。戦闘で傷ついたのだろうか？

「おはよう。どこか痛むところはないかな？」

「…おはようございます、先生。大丈夫です」

水野医師は、それは結構と破顔するや、件の女性士官に向けて頷いてみせた。

「私はこの艦の艦長の嶋津冴子といます。」

少し、君と話をしたいんだけど、大丈夫かな？」

頬に傷がある女性士官はそう切り出してきた。

え？この人が艦長？

エミールは驚きを隠せずにいた。

『ラットバルド』が地球防衛軍と接触したことは知っていたが、自分は今回の任務で初めて乗艦したばかりで、詳細は全く知らない。

あの高町一尉や八神二佐の出身世界と同じく“地球”を名乗り、魔

法文化も存在しないが、ミッドチルダと同等以上の科学技術と、極めて強力な質量兵器による軍事力を保有するため、管理局は対応に苦慮しているらしいということしか知らなかったのだ。

その地球防衛軍の軍人が今目の前にいる。

20代後半から30代前半くらいだろうか。

言っただけだが、管理局の同年輩の士官を凌ぐオーラというか、存在感があるが、

「別に尋問したりはしないから安心してほしい。

ただ、『ラットバルド』で何があったのかを知りたいだけなんだ。あの艦とは全く無縁というわけではないし、予想外の再会だと思ったら、手酷くやられていたからな。こちらも驚いているのさ。

最初にも言っただけ、これは尋問じゃない。だから君が答えなくても構わないし、それで君の待遇を落とすようなことはしないから、安心してもらいたい」

「わかりました。僕にわかる範囲の事でしたらお答えします」

この会談でエミールと冴子はともに驚くべき事実を知る。

第214話『A magical-boy meets Capt. Saek

年内更新はあと2〜3回といったところでしょう…。

第215話『A magical-boy meets Capt・Saek』

冴子

「おい、駄作者。この週末は更新しないんじゃないか？」

作者

「はて。小生は更新しないなんて一言も言ってないぞ。

“多分”更新しないと言ったがね」

冴子

「道理で短いと思ったよ。

で、あんたは今どこにいる？」

作者

「福島県の某温泉旅館」

冴子

「あんたは寅さんか？」

作者

「やってることはあんま変わらないねえ」

冴子

「あっさり認めたよ、このフーテン駄作者」

内惑星防衛艦隊旗艦『アレクサンドロス』

「敵巡洋艦（中型艦）2、駆逐艦（小型艦）1撃沈！」

「巡洋艦『アンドレア・ドリア』、駆逐艦『カワード』『Z15』沈没しました！」

「自動艦隊第3群、敵右翼に攻撃開始！」

「第25駆逐隊と第12戦隊を左翼に回せ」

クルーの報告を受けたタナリットは、すかさず巡洋艦と駆逐艦部隊を支援に回す指示を下す。

戦闘は今のところ互角に進んでいるようだ。

彼我の数を考えれば地球側が健闘していると言えるが、正直、あまり時間をさくわけにはいかない。

敵艦隊、否、敵軍の戦力がわからない以上、早く目の前の艦隊を下して地球に向かわなければならぬ。

波動砲で片をつけたいところだが、敵の艦艇はなかなか機動性が高く、ことに駆逐艦クラスの小型艦は、ガミラスのデストロイヤー艦顔負けの軽快さで接近戦をしかけてくるのだ。

地球の駆逐艦と比べても、武装では地球側が勝るようだが、軽快さでは敵の方が上回り、駆逐艦の被害がばかにならない。

（消耗戦に持ち込まれるとまずい。長引かないうちに深手を負わせないと）

タナリットの心境を表すかのように、額には汗がじっとりと滲んでいた。

地球・自動艦隊コントロールセンター

「　　っ！」

チーフである島大介以下のフリートオペレーターが、『アレクサンドロス』からの信号を受けて自動型戦艦と駆逐艦を素早くシフトしていく。

地上では激しい戦闘が行われているが、ここは地下で、まだ敵軍接近の情報も来ていない。

とはいえ、いつここの所在が敵に露見するかわからない以上、早く敵艦隊を撃滅か撃退しなければならぬ。

「よし、いいぞ。その調子だ」

島は隣席の新人才オペレーターに声をかける。

厳しい状態だからこそ、萎縮させてはならないのだ。

自動艦は今のところ問題なく稼働している。

特に、有人艦では考えられない急機動を行える上、万一大ダメージを受けたら敵艦にぶつけるか、味方艦に接触する前に自爆させれば良い。

とはいえ、

（この艦自体が間に合わせだからな。せめてクレイモア級だったら）

島は内心でほぞを噛む。

オペレーターの練度は何とか及第だが、彼らが操る艦は、基本的に有人艦の改修型で、初めから無人艦として建造されたクレイモア級やダガー級ほどの機動性や火力、防御力はないし、ソフトもやや旧式だ。

暗黒星団帝国艦隊と直に戦い、その強さも身を持って知った島は、既存の艦艇では些か力不足であることを痛感していた。

（無いものねだりをしてもしようがない。
少なくともヤマト以前よりは遥かにましなんだからな）

島はモニターを見ながら艦をシフトさせるとともに、敵艦隊の手薄な所を探し始めた。

デザリアム艦隊総旗艦『ガリアデス』

「地球艦隊も存外やるようですね」

「ん、ガミラスとガトランチスを跳ね退けただけのことはあるということだな」

太陽系制圧軍司令長官のカザンは、スロハ参謀長の言に微かに眉を潜めた。

絶望的とも言える戦況を二度も覆してみせたのだ。戦巧者のミョーズが手こずるのも当然か。

しかし、いつまでも時間をかけているわけにはいくまい。

「デルザーはどこまで来ている？」

「太陽系外縁部に間もなく到達しましょう。あと1回のワープで到着可能です」

「急がせる」

カザンは切り札とも言うべき艦隊の早期合流を命じた。

聖総統に直訴してわざわざ派遣してもらったのだ。ここで使わずして何とするのだ？

『相模』個別病室

「そんな。暗黒星団帝国が」

「そうだ。イスカンドル救援から、こちらの暦で1年足らずで、とうとう戦争状態になってしまった」

最初に切り出したのは嶋津冴子だった。

冴子は、エミール・F・ボルジツヒが一番気にしていた、彼自身の処遇について切り出した。

時空管理局と地球防衛軍は敵対しているわけではないので、エミールの処遇はフェイト・T・ハラオウンらの前例に準じる事と、早期の身柄返還を目指す、現在、地球は暗黒星団帝国と突然の全面戦争状態に入ったことで、管理局への帰還は長引く可能性が高い事を告げた。

流石にエミールも驚きを隠せない。

暗黒星団帝国が管理局の艦船を破壊したことは彼の耳にも入っている。ガトランチス帝国や同様、強大な軍事力を有していることも。そんな軍事国家が地球に攻めてきたというのか？

「君を我々の戦争に巻き込んでしまったことは、本当に済まない
」

冴子はエミールに頭を下げた。

突然売られた戦争とはいえ、無関係な子供を巻き込んでしまったことは事実。

“ 消しゴムで消す事はできない。それが我々の仕事だ ”

訓練生時代に土方教官から、新任の頃沖田艦長から厳しく教え込まれた冴子としては、結果としてエミールを地球と暗黒星団帝国の戦争に巻き込んだことは無念の一語に尽きた。

管理局の事情はさておき、目の前のこの少年は絶対に死なせない。

暗黒星団帝国軍の侵略阻止と、エミールの早期帰還。

これが冴子に課せられた使命になった。

そして、エミールにとっても、この後の体験が彼の人生に多大な影響を与えることになる。

エミール

「管理局は今どうなっているんでしょう」

雪菜

「次回で明らかにするみたいだけど、作者さんが寅さん化してますから。年内にまとまるか不安だね」

エミール

「え 高町教導官？」

雪菜

「人違いです。」

あの人と私では、太陽と月、春の雲雀と真冬の雷鳥くらい違います」

第216話『A magical-boy meets Capt・Saek

本年最終更新です。

今年もご笑読ありがとうございました。

3年目も相変わらずのグダグダですが、一つよろしくお願い申し上げます。

「戦艦『アリヨール』『カナダ』沈没！」

「第17戦隊、全艦シグナル消失！及び、戦闘空母『葛城』『イーグル』落伍します！」

「自動艦隊第6群を第5戦隊の支援に振り向ける！」

（くっ、敵の切り札は凶悪だな…！）

被害報告が錯綜する中、タナリットは懸命に自我を保ち、対応策を命じる一方で、予想外だった敵の大口徑長距離射撃に対して毒づいた。

10分前、敵に加わった新手の一隊から放たれた砲火はこちらの戦艦主砲をも凌ぐ射程と威力でこちらの艦艇をズスタにした。

破壊力は波動砲には及ばぬものの、白色彗星艦隊旗艦のエネルギーワープ砲（火炎直撃砲）に匹敵し、戦艦も一撃で戦闘不能にされたり撃沈された。

そんなものがアウトレンジから撃たれるのだから、こちらはまさにサンドバッグ同然にめった打ちだ。

内心で焦慮を深めるタナリットに追い討ちがかけられる。

「『ザクセン』沈没！クリューガー司令、戦死！」

「第6艦隊の指揮はチヨー副司令が継承しました…！」

部隊No.2の指揮官が斃された。

すぐに指揮権は引き継がれたが、心理的なダメージは隠せないだろう。

果敢にも敵艦隊に突撃をかける巡洋艦や駆逐艦もいるが、多くは迎撃する敵艦と相打ちになって沈んでしまったため、敵主力の損害は僅かに過ぎない。

たとえ我々が全滅しても、敵艦隊の損害をもっと大きくしておかなければならない。

「敵艦隊前進！こちらを半包囲する構えですつ。」

「…自動艦の残存艦を艦隊外縁にシフト！」

第3戦隊と第9戦隊は波動砲戦用意！」

「自動艦隊コントロールセンターの地上部が空爆を受けています！」

コントロールセンターが嗅ぎ付けられたようだ。

主要部は遊星爆弾の直撃にも耐えられ、通信施設は数ヶ所あるので、すぐにコントロールを失うわけではないが、あまり長くはもちそうにない。

何としても敵艦隊に大穴を開けて撤退させなければいけない。

タナリットは相打ち覚悟で波動砲戦を挑む事を決意した。

戦艦『相模』医務室

「デインギル帝国　！？」

「はい。大神官大総統という人物を最高指導者にした宗教国家らしいというのが局の見解ですが、極めて強力な軍事力を持ち、管理局の艦船はほぼ一方的に墜とされました」

「」

エミールは管理局とデインギル帝国の経緯を冴子に話す。

彼の話では、そもそのきっかけは、ロストログアを積んでいた疑いがある船に停船命令を出したところ、それはデインギル帝国の船

で、すぐ軍艦がやってきて管理局の艦を攻撃してきたのが最初だという。

冴子としては、エミールの話「管理局の公式発表をそのまま受け取る気にはなれない。せいぜいが話半分だ。

デインギルの、捕虜に対する残虐行為は絶対に許されるものではないが、デインギルにはデインギルの主張があるかも知れないし、時空管理局には非魔法文化圏への差別意識が見え隠れしているのを直に知っているからだ。

フェイト・Ｔ・ハラオウン達のメンタリティは、魔法関係の事柄を除けば、地球人の同年代の少女や女性と何ら変わるところはなかった。

また、エミールのそれも、言葉を交わした限りの印象は地球人の子供とさして変わらない。

そもそも、まだ物事を多面的に考えることができない子供に自組織の正義を背負わせて危険過ぎる任務に投入し、挙げ句犬死にさせるなど、自分達には到底理解できない。

正直、管理局のお偉いさんと差し向かいで語り合いたい気分だ。

とはいえ、すんでのところで助けた命だ。必ずエミールを故郷に返す。

当然、『相模』も沈ませない。暗黒星団帝国軍も追い返す。

冴子は心中で決意したが。

“ゲキユ〜”

”

「???’」

腹の虫の鳴き声が聞こえてきた。

自分の腹の虫ではない。エミールを見遣ると、真っ赤になって俯いていた。

「す すみません。こんな時に」

「あははっ、健康な証拠さ」

冴子は相好を崩して、部屋の時計を見た。

地球（日本）標準時間で午前11時を回っている。

街のレストランならランチタイムが始まった頃合いだ。

「昼飯はこちらに持って来させるかね。それとも艦内食堂で皆と一緒に食べるか？」

冴子に尋ねられたエミールは少し考えていたか、ほどなく決断した。

「できれば、クルーの皆さんと一緒に食べたいです」

大した怪我ではないし、医務室に籠っているわけにはいかない。

異世界の軍人達が何を思っているのか知るのも、管理局員としての努めではないか？

「わかった、ちよいと待ってな」

冴子は艦内通信を開いて生活班にエミールの服を持ってくるよう指示した。

10分後。

（やっぱり、この服が落ち着くよ。スターゲイザー）
（そうですか）

時空管理局航空武装隊員の制服に身を包んだエミールは、ネクタイを直しながら、専用のインテリジェントデバイス“スターゲイザー”と念話を交わす。

（大丈夫ですか、マスター）

（大丈夫だよ。いつまでもくよくよしているわけにはいかないから行くよ、スターゲイザー）

（了解しました。マイマスター）

エミールは呼吸を整えると、部屋のドアを開いた　　。

第216話『A magical-boy meets Capt・Saek』

エミール君のイメージＣＶは日高のり子さん、スターゲイザーのイメージＣＶは玉木 宏さんです。

冴子

「 って、まんま“マキビ・ハリ”じゃん！」

雪菜

「何故でしょう、デジャビュを感じるのは」

冴子

「メタ発言はやめれ」

第217話『A magical-boy meets Capt. Saek

2012年、明けましておめでとございます。
今年が良き年であらんことを。

雪菜

「こちらは相も変わらぬグダグダ話ですが、長い目で読んであげて
いただけると、作者は泣いて喜びます」m——()m

自動艦隊コントロールセンター

「第6衛星破壊されました!!」

量子通信担当オペレーターが制御中継衛星がまた一つ使用不能になったことを告げた。

「制御不能も時間の問題か」

徳川太助が口惜しげな声をあげる。

自動艦隊、内惑星艦隊、第6艦隊は既に過半数を撃沈破された。コントロールセンターへの攻撃はおざなりだが、制御通信網を寸断されれば、自動艦はお荷物どころか味方にとって危険極まりない代物になってしまう。

「島、状態Zだ」

「っ、司令!」

自動艦隊を預かるイタリア出身のガレットー司令官が最終手段を島に指示する。

これには島も驚いて上官に向き直ったが、制御不能になった自動艦など役立たずどころか味方殺しでしかない。

島もそれは十分わかっていたので、異議を唱えることはなかったが、

「わかりました。残存全艦、状態Z」

（俺がああ艦に乗り組んでいれば　!）

“Z”モードに切り換える操作を行いながら、島は口惜しげに顔を歪めた。

内惑星艦隊旗艦『アレクサンドロス』艦橋

「司令、自動艦隊のガレッテー司令より緊急電です！」

「読め」

「はいっ！
間もなく残存全艦コントロール不能。よって状態Zとなす！」

自動艦隊はここまでか。

タナリットは内心で嘆息したが、自動艦隊の限界とうにわかっていたことで、むしろここまで戦闘を継続したことを褒めるべきなのだろうと納得した。

「全艦に連絡。自動艦隊自沈と呼応して敵艦隊を突破する。損傷艦を内側にして、突撃隊形Cをとれ！」

「了解！」

ここまで撃ち減らされては、地球に戻ることも自覚束かも知れない。しかし、我々全員が屍と化しても、敵を撃退しなければならないのだ。

「自動艦隊Zモード起動まで、あと30秒です！」

「中央司令部との通信が途絶しました！」

司令部が陥落したのか、単に全ての通信回路が寸断されたのかはわ

からないが、事態はいよいよ切迫してきた。

「自動艦隊、前速前進開始！」

残存している自動艦が円錐隊形を組み、有人艦ではあり得ない加速で前進し始めた。

デザリウム艦隊総旗艦『ガリアデス』

「残存の敵無人艦、こちらに突撃してきます！」

幕僚の報告に、カザンは嘲笑を浮かべる。

「愚かな、一気に片付けてくれる。後方の本隊もろとも包囲してすり潰せ！」

確かに、これが無謀な自殺突撃と見るのは無理からぬところだが、開発に関与した真田志郎は、“こんなこともあるのかと”細工を施していた。

突進する十字砲火を浴びて、自動艦は次々と落伍し爆散していくが、有人艦を上回る速度なので、まだ全艦撃沈には至らない。

さらに、自動艦からはランダムに主砲や対艦ミサイルが放たれ、小型艦を中心に被害も出始めていた。

「何をしている！もっと火線を濃密にしろ！」

無人艦が有人艦より機動力が上なのは折り込み済だ。勝利を目前にして気の緩みが出ているのか？

カザンは引き締めを図るが、地球側の手はその斜め上を行っていた。

「敵艦隊からエネルギー反応が急激に増加しています！」

「何！？」

突撃してこちらを攪乱すると思っていたが、エネルギー反応増大とは、まさか　　！！？

カザンはデーダーが何に斃されたのかに思い至り、顔色を変えた。

「いかん、敵艦と距離を取れ！前中衛とデルザー隊は離脱、後衛は停止せよ！！砲撃を緩めるなっ！」

デザリアム艦隊は炎上しつつ突進してくる地球の自動艦に激しく撃ちかける。

また1隻駆逐艦が爆散したが、戦艦を含めた10隻前後が猛火に包まれながら猛然と接近してきた。

「急速離脱　　！」

数隻にまで撃ち減らされた地球無人艦隊から大光芒がほとばしり、デザリアム艦隊も包み込んだ　　。

『相模』食堂《早雲峡》

“早雲峡”には既に10人余りのクルーが早めの昼食をとっていた。女性も何名が含まれている。

艦長の姿を認めて立ち上がる乗組員を手で制した冴子は、新入りだ

と傍らの少年を紹介した。

「じ　時空管理局航空武装隊所属、エミール・フ란ツ・ボルジツヒです！！」

若干噛みながらも、少年は自己紹介した。

周囲は皆自分より年長で、異世界の軍隊で管理局の階級が通用するとも思えなかったので、准空尉とは名乗らなかった。

おー、や、カワイイ等の声が上がった後、乗組員もエミールに自己紹介した。

『　時空管理局に対しては思う所があるだろうが、エミール個人には関係ない事だ。

彼はここに来る前に文字通り死ぬ思いをしている。それを踏まえて対応してもらいたい』

今朝乗組員にそう訓示していたこともあり、エミールに対するクルー達の反応は悪くない。特に女性クルーは目を輝かせている。

代わり映えないむさ苦しい野郎共ではなく、かなり年下の少年、しかも可愛い顔立ちとくれば、二十歳前後の女性クルーが目を輝かせないわけがなく、彼女達の顔も心なしに艶やかだ。

「そのくらいにしておけ、空腹でぶっ倒れてしまうぞ」

苦笑しながらエミールを促してオーダーコーナーに行く。

管理世界も地球も食習慣は大差ないことは実証済みだから、エミールもメニューには大して驚かなかったようだ。敢えて言うならば、“箸”の有無くらいか。

但しこの日は金曜日にあたるので、日本籍である『相模』はカレー

ライスが出された。

「甘口でいいかね？」

「はい、お願いします」

日本艦のカレーは伝統的に海軍カレーがベースで、後は各艦の歴代調理責任者と艦長の好みが反映される。

特に『相模』は艦長が激辛党であるため、甘口カレーは他艦での中辛カレーに相当するのだ。

まあ、クルーからの評判は悪くないのだが。

「おい、幕」

「ああ、準備できてるぞ」

冴子の声に、調理責任者の幕ノ内勉はエミールの前に小瓶を置く。

「調理責任者の幕ノ内だ。

この艦は艦長が激辛党なんで、甘口でも甘くないんだ。辛いと思ったらこいつを使ってくれ」

「あ、はい。ありがとうございます」

甘味料なのだろう、エミールは礼を言っ受取った。

冴子のトレイには赤い内容物が入った小瓶が載っていた。

激辛党だと言うから、多分艦長専用の辛味料なのだろうが、どのくらい辛いのだろうか？

何となく怖くなる魔法少年だった。

第218話『漢・アナライザー』（前書き）

少し早足だったかも知れませんか。

『永遠に』のエピソードを改造しました。

ティアナ

「ふーん、それであなただは今どこにいるのかしら？」

作者

「下痢 もとい下り寝台特急あけぼのに乗っています」

ティアナ

「あんたねえ 何下ネタかましてんのよ？」

作者

「ちょ、ちょい待ち、話せばわかるっ」

ティアナ

「問答無用！スターライト…ブレイカーッ……！」

作者

「ほ
」

駄作者はSLB・PSに飲み込まれました。

第218話『漢・アナライザー』

地球へ急行する旗艦『ガリアデス』で、デザリアム帝国軍太陽系方面軍司令官のカザンは苛立ちを隠せなかった。

第一の理由は地球艦隊との戦闘で予想以上の被害を出したこと。

艦隊戦闘でも頑強に抵抗され、デルザーの無限 砲艦群を投入して息の根を止める寸前まできたところで残存の無人艦群の突撃を受け、更に波動エンジンを暴走させながら自沈したことで、前衛部隊が大打撃を受けた。

特にデルザーの無限 砲艦は8割を失い、デルザー本人も艦もろとも斃されてしまった。

他の艦も大なり小なり損害を被り、『ガリアデス』もアビオニクスにダメージを受けた。

それでも7割超の戦力は維持しており、増援が来るまではこれで凌ぐしかない。

さらに、地球側の政府や軍の要人の拘束が少ないこともカザンを苛立たせていた。

首都制圧隊からの報告では、政府では副大統領と第1副首相を押さえたものの、大統領と第2副首相は行方不明。そして地球防衛軍司令長官も所在不明だという。

さらに、地球に亡命したイスカンドルのスターシャ女王も発見されていない。

「引き続き搜索を続ける。連邦大統領と軍司令長官、そしてイスカ

ンダルのスターシャ女王は必ず生かしたまま身柄を押さえるのだ！」

これからやるべき事は山積している。

要人の拘束、占領政策の運営等、カザンに課された責務は山積しているのだ。

殊に、今回、聖総統は地球の一般住民を徒に殺傷することを禁じている。

しかし、地球人がおとなしくこちらに従うのか甚だ疑問だ。

「総司令閣下、間もなく降下指定ポイントです」

「ん」

カザンの苦闘はまだ始まったばかりなのだ。

そのデザリアム艦隊から数千？離れた空間を、1隻の宇宙船が急ぎ地球から離れていた。

その宇宙船の操縦桿を握るのは人間ではなく、赤いボディのロボット アナライザー だった。

「俺ハ生キテル内ニハランノカ」

操縦桿を握りながら、アナライザーはぶつくさばやいていた。彼の後ろには20人ばかりの男達が横たわっている。

「ソレニシテモ、古代サンガアンナニ取り乱ストハ」

つい20分程前、ここはまさに修羅場だった。

敵の攻撃が激しくなり、守備が次々と破られていく中、英雄の丘に自発的に集合した『ヤマト』乗組員は、森 雪が携えてきた藤堂司令長官の特命により第2イカルス天文台の真田と連絡を取り、連邦政府要人用の緊急脱出艇でイカルス目指して発進したのだが、発進口が自動で開かず、手動で操作した雪が、追っ手の凶弾に倒れてしまったのだ。

当然、古代（進）は雪を救おうと、発進態勢に入った艇から飛び降りようとしたが、背後から相原義一に羽交い締めになされて、無理矢理引き戻された。

これに古代が逆ギレした。

相原の行動は間違っていない。

あの場で飛び降りたら、再び艇に乗る事はかなわない。

ましてや自分達は特命を受けた身であり、古代はリーダーなのだ。

しかし、恋人と引き裂かれ、頭に血が昇った古代は収まらず、自分を止めた相原を罵倒し殴り始めたのだ。

「相原！貴様なぜ俺を止めた！？なぜ雪を！？」

さんざん殴られながらも相原は抵抗しなかった。

戦友として古代の気持ちは痛い程理解していたし、相原自身も断腸の思いだったからだ。

しかし、いつまでもこのままでいいわけではない。

操縦桿を握っていた島が見かねて、副操縦士席のアナライザーに操縦を任せて立ち上がろうとした時、アナライザーは頭部を切り離れた。

そして、

「イイ加減ニシロ！コノ馬鹿タレガッ！！」

と、古代の後頭部に突撃し、彼を昏倒させたのだ。

「　済まんな。俺が古代と殴り合っても止めるべきだったのに」
頭部を戻したアナライザーに、島は謝罪と感謝の言葉をかけた。
しかし、アナライザーもまた“漢”だった。

「　雪サンハ、簡単ニ死ヌヨウナ人ジャアリマセン。
ソレハココノ皆ガ、何ヨリ古代サンガ一番知ツテイルハズデス
」
とのたもつたのだ。

その後、敵の警戒網をすり抜けるため、アナライザー以外の全員が
一時的に仮死状態になる薬剤の注射を受け、さらに生命維持機能以
外の動力も切って、慣性だけで移動していたため、デザリアム軍の
警戒網をすり抜けることができた。

否、宙域警戒にあたっていた1隻の護衛艦が、生命反応のない地球
の宇宙船を発見し、念のための攻撃を警戒隊司令部に意見具申した
のだが、許可されなかったのだ。後日、この護衛艦の艦長は、

「許可など申請せず、独断で撃破しておけば良かった！」

と、文字通り地団駄踏んで悔しがった。

「物資搬入はどこまで進んでいますか？」

「水、食糧等の生活物資は完了しました。」

「コスモタイガーは残りあと6機、ミサイルはあと30本等、戦闘関連物資と医薬品はあと1時間です」

「急がせて下さい」

発進準備の指揮をとる真田志郎と山崎 奨は準備の進捗状況を確認している。

第2イカルス基地で『ヤマト』の改装工事と新人乗組員の養成を主導していた2人は、デザリアム軍の太陽系侵入の報せを受けるや、即座に『ヤマト』発進準備を命じた。

古代達はどうに地球を発ち、あと1時間ほどで到着するはずだ。

彼らと合流したら直ちに発進し、敵の侵攻部隊を叩く算段でいたが、事態は常に流動的だ。

シリウスで演習中の第7艦隊も急ぎ太陽系に向かっているだろうから、これと合流するオプションもあるが、真田は最悪の可能性も考えていた。

つまり、古代達が辿り着けないということ。

状況は切迫している。時間が経てば敵の搜索網はより細くなり、ここが発見されるのも時間の問題だから、その場合は見切り発進するしかない。

そのような事態のために、坂本に加えて北野 哲らイスカンドル遠征組を更に数人呼び寄せておいた。

北野は操艦と戦闘指揮ができるし、いざとなれば操艦は真田自身やる。機関は山崎に任せられるし、戦闘機隊は坂本達イスカンドル遠征組があり、加藤（弟）達も順調に育っているから、最悪でも第

7 艦隊への合流は十分可能と見ていた。

そして、当然ながらスターシャも乗せていく。

第7艦隊には古代守がいるのだ。

全ての物資を搭載したら、真田とサーシャでスターシャをベッドごとヤマトに乗せることになっていた。

スターシャの命の火は遠からず燃え尽きる。

せめて最期は家族に看取らせてやりたかったのだ。

ミッドチルダ首都クラナガン郊外、高町家

『そんな』

『エミール君が』

「」

画面の向こうではエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエが絶句していた。

キャロはうつすらと涙を浮かべている。

被保護者が悲しげな表情を浮かべるのを、フェイトはただ黙って見詰めるしかなかった。

「『ラットバルド』は緊急転移したから、まだダメと決まったわけじゃないんだよ」

気休めにしかないだろうが、あの『相模』に発見された艦船もある。

『ラットバルド』が爆沈するところは誰も見ていない。

いや、あの老練なスールなら、最後まで諦めないだろう。

ひょっとしたら、あの太陽系かその近辺で地球防衛軍に発見される

可能性もゼロではないのだ。

とはいえ、流石にそれは気休め同様だとフェイトも思っていた。
。

第218話『漢・アナライザー』（後書き）

次回、ヤマト発進　するのか!？

第219話『彼らの目的』（前書き）

今話、冴子は出ません。

第219話『彼らの目的』

太陽系最外縁、エッジワース・カイパーベルト外縁、
『ヤマト』艦長室

第6艦隊・内惑星防衛艦隊との合流を目指す『ヤマト』は、イカルスを出発後、直ちに小ワープで一氣に太陽系外縁まで移動したのだ。

「そういう事か」

「はい」

テーブルを挟んで、古代と真田が難しい顔をする。

話の発端は古代からだ。

地球を脱出する時に雪を置き去りにしてしまった事もさりながら、飛び降りようとした自分を止めた相原に逆切れし、激情のまま殴り続けた事で、古代は強い自己嫌悪に陥り、リーダーとしての己の力量に疑問を抱いてしまったのだ。

悪く言えば、公私混同の挙げ句、感情のままクルーに私的制裁を加えたのだ。本来なら即日解任の上謹慎となり、最低でも査問委員会にかけられる。

「話はわかった。で、相原とは和解したのか？」

「はい。目を覚ました後真っ先に謝りました」

「ならばその話はひとまず置くとして、だ。」

心当たりの候補者はいるのか？」

相原を殴った件の正式な処分は、取りあえず両者が和解しているの

で、今はそれ以上の話は不要だ。

それこそ、暗黒星団帝国の地球侵略を止める事が最優先なのだから。

真田は、古代が“候補者”として誰がいるのかを古代に問い質す。

他でもない『ヤマト』艦長の。

「それは」

古代の口からその候補者の名が語られた。

時空管理局本局

「連絡がとれないって、本当なの!？」

「本当だ。何度コンタクトを試みても、防衛軍司令部との回線が繋がらないんだ。こちらのシステムや通信ポッドは正常に動作しているんだが」

義兄の言葉に、フェイトは、傍らのシャリオ、ティアナ共々困惑の表情になった。

デインギル帝国との紛争で次元航行部隊に大打撃を被った管理局本局は、戦力再編に苦慮していたが、三提督は極秘裡にリンディ・ハラウンに地球連邦政府と接触する事を命じた。

リンディはクロノに、まず地球防衛軍にコンタクトをとらせたのだが、それはのっけから躓いた。

首都東京が暗黒星団帝国軍に陥とされた地球が管理局からの通信に答えられるはずがなかったのだが、管理局はまだその事実を知る由もなかったのだ。

「それって、地球が戦争状態にあるという事ですか？」

「それは何とも言えない。何分にも情報がないからな」

不安げなティアナにクロノが答える。

「いずれにせよ、余り時間を空費するわけにはいかない。

『クラウドディア』が派遣される可能性もあるな」

管理局の中で、多少なりとも地球防衛軍とコネクションを持つのはリンディ・クロノ・フェイトのハラウンファミリーと、フェイトの補佐を務めるティアナとシャリオだけだ。

自ずから、艦船を指揮するクロノが派遣されるのは当然といえよう。果たせるかな、この2日後、『クラウドディア』に第197管理外世界こと地球連邦への派遣命令が出た。表向きはディンギル帝国方面の哨戒任務であつたが。

一方、地球は横須賀市。

「」

高町雪菜は1人、中学校から家路を辿っている。

主要都市を制圧したデザリアム帝国軍は、地下都市に避難した一般市民に対し、速やかに帰宅し、日常生活に戻るよう命令した。無論、従わない場合は拘束、最悪は武力行使と警告して、だ。これにより、市民生活が再開されたのだが、全てが元どおりになつたわけではない。

マスメディアは活動を大幅に制限され、携帯電話やインターネット

は原則として使用禁止となった。

テレビやラジオはニュースや討論番組は放映（送）を禁じられ、バラエティ番組や音楽番組などに限られた上、深夜帯は放送休止。

何より、地球全土に夜間外出禁止命令が布告され、22時から翌朝6時まではデザリアム軍関係や警察・消防等の緊急自動車以外は一切運行でなくなった。

当然、店舗はそれ以前に閉店せざるを得ない。

街中のあちこちにライフルを担いだ黒ずくめの暗黒星団帝国軍兵士が立ち、市民に威圧感を与えるようになったが、かなり厳しい軍律を敷いているようで、市民とのトラブルは少ないまま推移していた。

（何ていうか 威圧的ではあるけど、乱暴狼藉沙汰は聞かないね

）

（そうだな。かえって不気味ですらあるな。
水面下で何かが蠢いているような気がする。

それとだがな、レディ。敵軍兵士をサーチしたら、妙な反応があったぞ）

（ 妙な反応って？例えば改造人間だとか？）

主と念話を交わしていた“ピュア・ハート”が妙な事を言う。

冗談半分に問い返した雪菜だが、守護石の回答に一瞬絶句した。

（ ビンゴだ）

（！ どういう事？）

（連中の胴体部の広範囲から、精密機械特有のノイズや電磁波が僅かだが検出された。同時に、地球人類に近い生命反応もだ。

1人だけじゃない。今まで行き合った敵軍兵士全員がそうだ）
（　それって、サイボーグじゃない！？）

どういう事なのか。アンドロイドならばまだ解るが、兵士全員がサイボーグとは。

地球にも既にアンドロイドは存在するが、生身で戦闘をこなすようなハイレベルなものではない。

ましてやサイボーグなど、技術面もさりながら倫理的問題もあつて実用化自体怪しいものだ。

瀕死の負傷でやむなくサイボーグ化したのではなく、初めからサイボーグの体だというのか！？

（ひょっとして、暗黒星団帝国人は、生身の身体機能が著しく低下しているんじゃない）

（地球人より進化したのかも知らんが、代償として生命力自体が衰弱してしまったという可能性はあるな）

（だとすれば、彼らの地球侵略の目的は　　）

雪菜は背中にこれまでになく冷たいものが走るのを感じ、慄然とした。

第219話『彼らの目的』（後書き）

次回、ヤマトと第7艦隊が合流!!???

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7540v/>

或る戦艦と艦長 2

2012年1月13日19時57分発行